

アクセル・ワールド13

—本題の号火—

新アビリティ<光字誘導>を獲得したシルバー・クロウことハルユキ。ようやく<メタトロン>との決戦の準備が整ったかにみえたが、戦いの舞台は海都中学の文化祭へとうつる。

<スカーレット・レイン>ことニコと、<アッシュ・ローラー>こと目下部輪に文化祭の招待状を渡してしまったハルユキは、黒雪姫の水属性なオーラに脅えながらも、クラス展示班の仕事を他のメンバーと協力してやりとげる。そして、文化祭本番への招待に胸をふくらませるのだった。

しかし、加速世界に混沌を広めんとする<マゼンタ・シザー>の魔手が、思わぬ方向から迫りつつあり――！



か-16-25



アクセル・ワールド13

川原 礫

電撃文庫 ⑤ 590



9784048913300



1920193005905

ISBN978-4-04-891330-0
C0193 ¥590E



発行 ● アスキー・メディアワークス

定価 本体 590 円

※消費税が別に加算されます



アクセル 弁当 ⑤ 束き



かわはら れき
川原 礫

12巻まではずっと表紙が黒雪姫先輩でしたが、この13巻では初のニコ単独カバーとなっております。理由はとくにありませんが(笑)、フレッシュな気持ちで五年はも経ちます！

【電撃文庫特刊】

アクセル・ワールド1～13

ソードアート・オンライン1～11

ソードアート・オンライン プログレッシブ1

イラスト:HIMA

10月3日生まれ。挿絵はウシシリーズが功のイラストレーター。『電撃魔王』の電子への寄稿を見た文庫編集者が、今後の挿絵依頼をオファーしたことがきっかけ。本業仕事の合間を縫って、ブログやSNSサイトなどでイラストを発表している。

アクセル・ワールド

水際の号火

川原 礪
イラスト/HIMA
デザイン/ビィビィ



「……残念だけど、
このステーションに」

黒の王はいない」

「私たちはバーストリンカー
だから、拳と気合で」

「勝つ位です」

アーダー・
メイデン

黒のレギオン
ネガ・ネビュラス
黒の
バーストリンカー

アクア・
カレント

黒のレギオン
ネガ・ネビュラス
黒の
バーストリンカー

「あなたに私が」

「攻め込めるべき理由は……
黒の王、アクア・ロータスと

「戦うため」

ルバー・クロウ

黒のレギオン
ネガ・ネビュラス
黒の
バーストリンカー

2017

才力

岸田内閣成立後、大戦に突入してきた
赤のレナオは、日本軍が支那領土の
ハースト川を

「是が正解！ 政治的なものは

私たちの未来

1

ヒートショック

今乳癌は、がんの中でも、最も多い。乳がんは、乳管の細胞から発生する。乳管は、乳の通り道で、乳頭から乳管の開口部まで伸びている。乳管の細胞が、がん細胞に変化し、乳管の壁を突き破り、リンパ管や血管に侵入すると、がんが進行する。乳がんの進行は、乳管の細胞から始まり、乳管の壁を突き破り、リンパ管や血管に侵入し、他の臓器に転移する。乳がんの進行は、乳管の細胞から始まり、乳管の壁を突き破り、リンパ管や血管に侵入し、他の臓器に転移する。



THE UNIVERSITY OF CHICAGO PRESS
50 EAST LEXINGTON AVENUE
NEW YORK, N.Y. 10017-2453
TEL: 212 850 6640
FAX: 212 850 6640
WWW.CHICAGO.PRESS.EDU

可笑なだけの言い訳を思えて、興味ないんだよね。





ブロード
レバード

水見あきら

「これはちょっと、はなみしめい、デカ……」

「ふふふ、これは後でかきうーくお世間を騒がすわ」

リン

フーコ

四壁宮福



リン

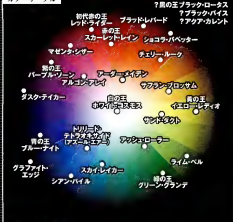
お嬢様学校に通う
バーストリンカーの少女。
幼少時は兄である
「アッシュ・ボーラー」に
虐待の主導権は移る

「……………ごめんなさい、有田さん。
ごめんなさい……榎子小姐……
私は……私のゲームにルアバクターは、
昨日、ISSキットを、貸しておかれて……
しまったんです……」



《ブレイン・バースト》におけるデュエル・アバターの《相性》

カラーサークル



メタルカラーチャート



バースト・ワンダーに自動的に付与される属性名には、必ず色を示す単語が含まれている。《赤系統》は正統派直衝攻撃。《青系統》は遠距離直衝攻撃。《黄系統》は間接攻撃。常や緑のような

中間色は、二つの系統にまたがった属性を得る。一方、《メタルカラーチャート》に属するアバターは、攻撃ではなく防御能力に秀でている。

アクセル・ワールド

13

水際の号火

川原 礫

イラスト/THIMA

デザイン/ビィビィ



1

「フレイン・バースト」の通常対戦モードのひとつ、バトルロイヤル・モードは、格闘ゲームの枠を広げた戦闘ゲームの集合体だ。

どんなバーストリンカーが、フィールドのどこに存在するかは、直接視認するかカメラで以内に接近するまで解らない。ガイドカーソルはもちろん表示されるが、それも一番近い敵の方向を指し示すだけで、誰かと戦闘中ならば消えてしまう。

だから、目先の相手と戦闘を繰り返しているところに、いきなり新たな「デニエルアバター」が割り込んでくることは大いにあり得る。というより、その展開こそがバトルロイヤルの醍醐味でさえある。

事実、二〇四七年六月二十七日の午後六時に突発的に開始されたこの対戦では、ハルユキはまず古馴染みのパイタ使い（「アッシュ・ローラー」と接触し、そこに対戦開始者である超硬のメタルカラー（ウルフラム・サーベラス）が混入してきた。

通常三回目となる激闘で、ハルユキはサーベラスの締め技に苦しめられたが、必殺技（「ヘッドバット」）を繰り出してからくも脱出。そのまま飛翔してサーベラスを高空まで引っ張り上げ、勝利に王手を掛けた。

しかし、またしても登場した乱入者が、戦いの行方を変えた。四眼の分析者の二つ名を揮つ謎多き女性型アバター、〈アルゴン・アレイ〉だ。帽子型バースに装備された、これまではデータ・スキャン用だと思われたレンズから、恐るべき威力のレーザーを放ってシルバー・クロウの羽根を貫き撃ち落としたのだ。

アルゴンは、どうやら顔見知りらしいサーベラスをも容赦なく撃ち、アッシュまでもがパイタごと撃破され、このまま彼女ひとりにバトルロイヤルを蹂躞されてしまうのか——と思われた、その時。

三人目の乱入者が現れ、戦況をもう一度覆したのだった。

「レベル1に負けて、たくさんポイントを失うのは、あなたに

静かな……それでいて底知れぬ迫力に満ちた声が、〈氷雷〉ステージに舞うダイヤモンド・ダストを揺らした。

循環する透明な水に全身を包んだ、特異な紫色のアバターだ。緑のレギオン所属のバーストランカー〈オリーブ・クラブ〉も油断コーティングされた装甲を持っているが、厚みがまるで違う。頭部から四肢へとさらさら音を立てて流れ、四本の円弧を描いて再び頭に戻る水の終着積は、アバター本体と同じくらいあるだろう。

細い腰や滑らかなフォルムは女性型と思える。声もどちらかと言えば女性的だったが、何せ

アバター本体が見通せないので確信は持てない。

たぶん（彼女）であろうデュエルアバターは、ステージの冷氣を利用して作り出した水の輪を投射し、アルゴン・アレイのレーザー攻撃を妨げたのだ。その発想といい、照準の正確さといい、実に鋭い慣れている。とても彼女の言葉どおり、レベル1の新米とは思えない。

路上に壁をついたまま、ハルユキは、視界右上に複数表示されているミニ体力ゲージを素早く確認した。

ゲージは距離の近い順に自動ソートされるので、いちばん上にあるのは、ハルユキの腕の中で行動不能に陥っているサーベラスのものだ。ハルユキとの戦いと、アルゴンのレーザー攻撃で削られた体力はもう一刻も残っていない。

その下が、少し離れた雪原にスタン状態で倒れるアツシユのゲージ。こちらもレーザーに撃たれたうえ、自身のバイクの大爆発による範囲ダメージを丸ごと喰らい、残り体力は同じく一刻以下だ。

そして、三つ目のゲージが、不思議な流水アバターのものであった。

表示されるレベルは、その落ち着きと重々たる戦い振りに反して、本当に1だ。いったい何者なんだ、と息を詰めながら、ハルユキは腕のアバターネームへと視線を移した。

「……………アタア、カレント……………」

そつと聴いた名前には、見覚え……………いや聞き覚えがある。しかも、とても重要な場面で隠ら

れた名前だったはずだ。しかし、誰の口から、どんな流れで出たのかがなぜか思い出せない。

——いや。

さら。さらさらさら。耳の奥で、水の流れる音がする。

まるで滲^{しみ}つていた水路が再び流れ始めたかのような、心地良い冷たさが頭の芯を洗う。それと同時に、ひとつのおぼろげな感覚、いや確信が生まれ、広がっていく。

「……………僕は、あの人を……………」

知っている。

ただ名前を聞いただけではない。いつか、どこかで……そう遠くない過去に、同じステージで戦っている。敵としてではなく、タッグ・パートナーとして。そう——助けて貰ったのだ。何かとんでもなく重大な、バーストリンカー生命にもかかわるほどの危機に見舞われた時、あのバーストリンカーに助けて貰った。

それだけでなく……別れ際にもっと、もっと大切なことを……………。

「……………よし、はんまびつくりやわあ。まさかここであんたが出てくるなんて、ちーっとも思わなかったよ、カレンちゃん」

不意にそんな声が聞こえ、ハルユキの思考を中断させた。さっと視線を導らせると、戦場となっている青柳街道南側のビル屋上に、両腰に手を当てて立つアルゴン・アレイの姿があった。顔の上半分が大型のゴーグルに覆われているので口許しか見えない。その口には、相変わらず

あだつばい笑みが浮かんでいる。しかし同時に、これまではまったく存在しなかった緊張感^{テンショウカン}が、ごくかすかにせよ滲み出ているように思える。

確かに、アルゴンの仲間であるらしいサーベラスを抜いても、戦況は三対一だ。普通なら張り詰めて当然の場面だが、三のうちのハルニキは残り体力一割。アッシュは行動不能で、これでは一対一とほとんど変わらない。

そのうえ、アルゴンの体力ゲージはいまだ満タン、おまけに遠か格上のレベル8なのだ。いったい彼女は、レベル1のアクア・カレントの何を書成しているのか。

青梅街道を挟んでアルゴンとちやうど正対する位置のビル上に陣取るカレントは、流水装甲の下に表情を隠したまま、やはり静かな声で応じた。

「私も、こんな形で再会するとは思っていなかった、アレイ」

口調や呼び方からすると、二人はかなり古い顔見知りのようだ。アルゴンはひよいと右肩だけをすくめ、試き返す。

「ふうん？　じゃあ、どんな形を予想してたん？」

「もちろん、金ポイントを懸けての……殺し合い」

カレントは、その恐ろしいひと言葉を、気負う様子もなく発した。これにはアルゴンの反応も少しかけ遅れた。数秒黙り込んでから——ぶっ、と噴き出す。

「あは、あははは。相変わらず、まじめな顔しておもろいこと言うわあ。ウチとサドンデ

ス・デュエルやりたいなら、あんたまず脱出せなあかんやないの」

一呼吸置き。

「帝城の、無限E.Kから」

「……………」

その言葉が耳に入った瞬間、ハルユキは鋭く息を吞んでいた。

帝城での無限E.K。それはつまり、アクア・カレントは、無制限中立フィールドに於いてはかつてのアーダー・メイデンと同様に、超級エネミー（四神）の総壇のいずれかで封印状態にあるという意味だ。

だがそんなことは有り得ない！ 無制限フィールドにダイブするための（アンリミテッド・バースト）コマンドは、レベル4にならねば使えないのだ。わずかレベル1でしかないカレントが、帝城に行けるはずがない。

ハルユキは、囁きを吞んでアクア・カレントの答えを待った。

だが流水アバターにはその会話を続ける気はないらしく、ばしやりと水音を囁らして一歩前に出ると、右手を三十メートル離れたアルゴンに向けた。

「今日は、あなたからポイントを奪うだけで満足しておく。残り時間も少ないし、お喋りはもう充分」

「やー、そんなつれないこと言わんといてえな。せつかくこうして再会したんよ？ お互い、

續もる話も……」

両手を広げ、頭を左右に振ったアルゴンの帽子が——いきなり光った。

会話を続けると思せかけて、ブレモーションなしにレーザーを発射したのだ。しかも、二門同時。紫色の超高温線は、空気中の水の粒を瞬時に溶かして白い軌跡を引きつつカレントに襲いかかった。

ハルユキが、「ずるい——」と叫ぶひまもなかった。アルゴンのレーザー攻撃の恐ろしさは、発射から着弾までのタイムラグの少なさにある。帽子のレンズが発光した、次の瞬間にはもう数十メートル先の標的に達しているのだ。もちろん実際の《元寇》ほどではないのだろうが、ほとんどそうとしか思えないスピードだ。ハルユキも、アッシュも、天才的格闘センスを持つサーベラスでさえまったく回避できなかった。

だからハルユキは、カレントの細い体が流水装甲ごと撃ち抜かれたと確信し、反射的に顔を背けた。——だが。

逸らすす前の視線が捉えたのは、必殺のアルゴン・レーザーがカレントの体をかすめて通り過ぎ、ずっと後方の水柱を穿つシーンだった。

——あの超精密狙撃が、的を外した!?

——いや、違う!

アタア・カレントの全身を覆う流水装甲がかなり薄くなり、代わりに、体の前に何かが出現

している。伸ばされた右手の先に浮かぶそれは、水でできた立方体だ。一辺五十センチはありそうな、巨大な水のキューブ。恐ろしく透明度が高いので、眼を穿らさないとほとんど認識できない。

恐らくアルゴン・アレイのレーザーは、あのキューブによって軌道を曲げられたのだ。すなわち、光の屈折現象。

サーベラスのタンダステン鎧甲をすら溶かすほどの高エネルギーレーザーが、単なる水を蒸発させられずに透過・屈折してしまった理由は解らないが、ともあれあの技があれば、カレントはアルゴンの攻撃に対してはほぼ完全な防御力を持っているに等しい。レベル1とレベル8のパワー差は圧倒的なはずだが、どんな攻撃も命中しなくては意味がない。

「……凄（すご）い……」

ハルユキは銀面の下で無意識の嘆息を漏らした。

腕の中で氣を失っているサーベラスも、レベル1としては破格の実力で数多（あまた）のミドルレベルを——そこにはもちろんハルユキも含まれる——圧倒したが、アクア・カレントの強さはもう一つ次元が違（ちが）うと思わされる。その風格、佇（た）まいはもはやハイランカーの域だ。

事実、先のアルゴンの口ぶりは、カレントと旧知の仲でもあるかのようなようだった。それが有り得るとすれば、カレントは初心者ではなく古参（ふるま）のベテランで、にもかかわらずずっと昔からレベルをひとつも上げていない、という理由くらいしか考えられないが——。

「わあー、嬉^{うれ}気なもんやね、カレンちゃん。ウチと戦うために、そんな技まで身につけてくれるやなんて」

再び、笑いを含んだ声に思考を中断させられ、ハルユキは瞬^{はな}きしてビル上のアルゴンを見上げた。

「確かにあんたの《理論純水》は、ウチのレーザーも素通りしてまうもんね。でもその技、見た目はど簡単やないやろ？」 レーザーの入射角をめっちゃ微妙に調整せなあかんのちゃう？」

たといえば……これでどう？」

びゅあっー と大気を震^{ふる}わせ、青紫色の光条が伸びた。だが、その軌跡はこれまでのように極細^{ごくこ}の直線ではなく、歪形^{ひがた}をしている。アルゴンが、レーザー発射時に、ほんの少しだが帽子を横に振ったのだ。

必殺のレーザーは、前回と同じく、本のキューブに触れた途端^{とくだん}かくんと曲がった。キューブを通過し、抜け出た時にはもう照準が二十センチ以上もずれていて、カレントの右側を空しく通り過ぎていく——はずが、今回は違った。

アルゴンがレーザーを振ったせいで、キューブを通過した後も軌道がずれて、カレントの右腕をほんの少しだが擦^すめたのだ。

今度こそ、しゅんっー という音が響き、華^{はな}やかな右腕から小さく白煙が上がった。同時にカレントの体力ゲージが、一割強も残^{のこ}っていた。

触れるか触れないか程度のかすり傷であれば、レーザーの威力だけではない。いかにベテランの風格があろうとも、カレントの体力はあくまでレベル1相当の値でしかないのだろう。つまり、同じ攻撃をあと十、いや九回やられたら、ゲージは簡単に満ち飛んでしまう。

アタア・カレントはどう対応する気なのか、と考えてから、ハルユキはようやく気付いた。彼女の、水のキューブによるレーザー防衛は確かに見事な技だが……そもそもあれだけでは絶対にアルゴンには勝てないのだ。ブレイン・バーストは対戦格闘ゲームであり、防衛しているだけで勝てる格ゲーは古来ひとつも存在しない。飛び道具や必殺技には限りダメージというものがあり、いかに完璧に見える防衛でも、ダメージは少しずつだが減らされてしまうからだ。カレントが、それを知らないはずがない。

ならば、彼女はどこに勝機を見出すつもりなのか。

——決まっている。それは、この僕だ！

ハルユキは奥歯を噛み締め、自分の愚かさを思い切り罵倒した。

——バカバカ、僕のバカちゃん！ 何をボーっと眺めていたんだ！ ほんとに、きつきカレンさんが最初のレーザーを屈折制御した瞬間に飛び出すべきだったんだ。アルゴン・アレイは色や攻撃方法からしても遠隔型で、密着してしまえばレーザー攻撃は封じられるはずだ。

——すみませんカレンさん、もう一度だけチャンスを下さい！ 次こそ、タッグパートナー

らしく連続しますから！

いつしか、自分までもがアクア・カレントを旧知であるかのように考えていることにも気付かず、ハルユキは意識を集中した。

アルゴンのレーザーは、どうやら連射はできない。一回撃てば、エネルギーチャージに最低三秒はかかるようだ。シルバー・タロウの交差力なら、それだけあれば路面からビル屋上まで飛翔し、アルゴンに組み付けろ。

次の射撃を待たずかな時間の中で、ハルユキは腕の中で行動停止状態に陥っているウルフラム・サーベラスに意識を向けた。

サーベラスとアルゴンの関係性はまだよく解らないが、どうやらこの不思議なレベルリンカーは、《分析者》の強いコントロール下にあるようだ。そのアルゴンは《加速研究会》の幹部と目されるので、考えたくないことだが、加速世界に混沌をもたらそうと暗躍するあの組織とサーベラスは繋がりがあるのかもしれない。

そう、思い返せば、ハルユキはサーベラスが《人造メタルカラー》である可能性を、すでに黒雲姫や親子と話し合っているのだ。そして、人造メタルカラー計画の礎となっている《心傷毀理論》を提唱した者こそが、アルゴン・アレイ……。

——でも。

——でも、サーベラス、君はさっき確かに言った。この世界に、戦いに勝つことより大切な

何かがあるのなら、それを見たい、って。僕はあれこそが君の本心の気持ちだと信じる。いや、そうだって解るんだ。

闘争の要素でそう語りかけると、ハルユキは意氣をカチリと切り替えた。

アルゴン・アレイを倒す。通常対戦で勝つても、アルゴンにとっては痛くもかゆくもない程度のポイントしか奪えないが、それでも意志を……あるいは意地を示すことはできる。

両眼に力をこめて見上げた先で、アルゴンの帽子に内蔵されたレンズが、レーザー発射の前兆となる刺激の微光を放った。

その瞬間、ハルユキはサーベラスを雪原に残し、ありったけの力で地面を蹴って、離陸した。左の翼は、先刻アルゴンに撃ち抜かれて金属フィンに穴が開いているが、五階建て程度のビル屋上までならきつと飛べる。いや、飛ばなくてはならない。

レーザーが、びゅっ！と唸りを上げてアクア・カレントへと伸びた。今度もアルゴンは発射時に機妙に頭を動かして、カレントの屈折防御に對抗する。先ほどと同じく、逃げきれなかった光条がカレントの体を締め、体力ゲージを更に一割奪う――。

だがその時にはもう、ハルユキはアルゴンの立つ五階建てビルの四階あたりにまで迫っていた。このまま組み付き、グラウンド勝負に持ち込む。F型アバターに寝技勝負を仕掛けるのは気が引けるが、今はそんなことを言っている場合ではない。アクア・カレントが作ってくれた、最初で最後のチャンスなのだ。

「う、おおッ」

ハルユキが、短い爆叫^{バクコウ}びを上げながら残る十メートルを突貫しようとした、その時、

帽子のレンズに撃ち終わりの余光を残すアルゴンが、顔をハルユキへと向けた。ゴードルの下の唇^{くちくち}が——につこりと笑った。

いままですだのメガネとばかり思っていた大型ゴードルのレンズが、眩い紫色に輝いた。

……まさか。帽子だけじゃなくて、眼からも、いーずーが。

ハルユキの脳内に閃いた予感を、強烈な高周波の唸りとともに進った二条の細網^{きよみ}が事実に変えた。回避不可能^{オウバイ}。防御もまた不可能。

——怖れるな—— 弾け

親にしてレギオンマスターでもある人——黒雪姫^{クロユキヒメ}のその声が、現実のものであるはずはなかった。

アルゴンの両脇から放たれたレーザーが、わずか十メートル足らずの距離^{きょり}を貫いてハルユキに届くまでの時間はコンマ一秒にも満たなかったし、黒雪姫は確かにこのフィールドに観戦者としてダイブしているが、かなり離れた高円寺^{こうえんじ}ルッタ商店街のどこかに残った彼女の声が届くわけではない。

それでもなお、ハルユキは、頭いっぱい響いた声に従い、両翼を広げて加速すると同時に両腕を体の前でクロスさせた。

ほとんど同時に、幅数センチの平行線を横く二本のレーザーが、腕部装甲に着弾した。

先刻、右肩を撃たれた時は、レーザーはまがりなりにもメタルカラーであるシルバー・クロウの装甲を果敢なく貫き大ダメージを与えた。しかし今度は、ぐぐつという抵抗感とともに、超高温のエネルギーは大きな球体となって腕アーマーの前に留まった。

確かに両腕の装甲は、クロウの全身でヘルメットと並んで最も頑丈な部位だが、レーザーに抗っているのは単なる防弾力ではない。

たった一日前に習得したばかりの、あらゆるレーザー系攻撃を防ぐ……いや曲げる、アビリティ。その名も（光学誘導）。

とても実戦で使える技ではないはずだった。何せ、発動に成功したのはわずか一回。しかも無我夢中だったので、自分がどう動き、どうレーザーを曲げたのかまるで憶えていない。このバトルロイヤルが始まってからも、今の今まで、自分がそんなアビリティに開眼したことを腕に忘れていたくらいだ。

しかし、これが、ハルユキに残された最後の切り札であるのは間違いないかった。

「く……う……」

あらん限りの精神力を振り絞り、ハルユキは自分を焼き尽くさんとする超高エネルギーの塊

に抗おうとした。

——いや、違う。

——抗っちゃだめなんだ。光を受け入れ、導き、解き放つ。拒絶、遮断するだけの物理的な壁ではなく、もう一つの世界へと繋がる通路。それが、僕の辿り着いた（國の境地）。光に對する柔法——。

発情を捨て、ハルユキは廻り轉めていた拳をふわりと開いた。両腕の、鋭い指先から射までを、二本の導光管とするイメージ。

かしやかしやつ、と音を立て、腕部装甲が変形した。中央のラインから左右に開き、できた隙間に細長いクリスタルパーツがせり上がる。球状に保持されていたレーザーのエネルギーは、左右二本のロッド型結晶に流れ込み、Xの形となって輝く。

「……………せああッ——」

叫び、ハルユキは両腕を鋭く左右に振り抜いた。

クリスタルロッドから輝き放たれたエネルギーは、後方の空へと飛び去り、垂れ込めた雲霧に二つの大穴を開けて消滅した。

必殺のレーザーがノーダメージで弾かれるのを見たアルゴンの口許から、ついに笑みが消えた。早くもリチャージが終わったらしい帽子のレンズが、再度輝き始める。

ゴーダルと帽子が交互にレーザーを整てるなら、発射ラダは一・五秒にまで縮まる理屈だ。

レーザー攻撃に百パーセントの耐性を持つ光学誘導アビリティだが、そんな問題で撃ちまくられたら全弾を防ぐことは難しい……。

びきつ。

という硬い音が響いた。レーザーの発射音ではない。道路の反対側から飛来した水の針が、アルゴンの帽子の左レンズに深々と突き立った音だ。

「あたっ……」

分析者が、そんな声を漏らして仰け反った。直後、帽子の内部でチャージ中だったエネルギーが暴発し、左レンズを粉々に吹き飛ばした。そこは強力な武器にして弱点でもあったようで、アルゴンの体力ゲージが二割以上も減った。

今度こそ——ラストチャンス！

「……………ター」

すかさずハルユキは、両翼をありったけの力で震わせた。シルバー・クロウの体が弾かれるように突進し、姿勢を崩したままのアルゴンに肉薄する。組み付いて動きを封じれば、それで勝敗は決するはずだ。

残り五メートル……三メートル……伸ばした指先が、ついに（分析者）の薄い装甲に触れようとした、その刹那。

「（ラズル・ダズル）」

アルゴンが、恐らく必殺技の名前であらうフレイズを囁いた。

帽子に残された一つと、ゴーグルの二つ、計三つのレンズが凄まじい光量で輝いた。レーザーではない。ストロボのような純白の光を、広範囲に照射したのだ。

ダメージ感はなかった。体力ゲージも残り一割のまま健在。しかし至近距離から強烈な光を浴びせられたハルユキの境界は白一色に染まり、ゲージとタイムカウント表示がぼんやり見えるだけになってしまった。(ダメージ) というのは確か(目くらまし) という意味の英単語だったはずなので、名前のおり直接攻撃力を持たない遠距離技なのだろうが、視力を完全に奪うこの性能は、貴の王の必殺技(愚者の回転木馬)をすら上回りがねない。

「くっ……」

ハルユキは反射的に顔を押しさへたくなるのを堪え、両手を大きく広げて、アルゴンを当てずっぽうで捕獲しようとした。

だが、左手の指先がアルゴンの体のどこかを押めただけで、そのまま顔からビル屋上の水に突っ込んでしまう。

「ふふ、ぼんがウチを押し倒そうなんて百年早いぞ」

そんな囁き声だけを残し、アルゴンの気配が消えた。幸い境界はすぐに回復し始めたので、ハルユキは上体を起こし、微かな眼で懸命に周囲を見回したが、もう(分析者)の姿はどこにもない。再表示されたガイドカーソルは、眼下の青板街道に横たわるウルフラム・サーベラスを

滑している。

氷雪ステージは建物内進入不可なので、そう簡単には戦場から離脱はできないはずなのに……と考えるながら諦め率くきよろきよろきしていると、どこからともなく声だけが聞こえた。

「先頭訪御持ちが二人もおつたら、いくらウチでもしんどいわあ。今日のところは、こんくらいにしておか。どうせもうすぐタイムアップやしね」

その言葉通り、残り時間はいつの間にか百秒を切っている。笑いを食んだ声が、急速に遠ざかりながら、冷たい微風に集って届いた。

「ほな、また遊ばな、クロウ。それと……カレンちゃんも」

そして、視界右上に並ぶミニ体力ゲージのうち、アルゴン・アレイのものだけが音もなく消滅した。

バトルロイヤル・モードでのポイント収支は、参加者のレベル、与ダメージと被ダメージの値、とどめボーナスなど幾つもの要素で複雑に計算される。

今回の対戦に関して言えば、ハルユキはサーベラスにかなりのダメージを与えたが、アルゴンにも同じくらい喰らってしまったのでプラマイゼロといったところだろう。アルゴンのほうも、ハルユキ、アッシュ、サーベラスのゲージを散々削ったものの、レベル1のアクア・カレントに痛撃されたので収支ゼロ。

そのカレントとは言えば、アルゴンのレーザーに体力ゲージを二割削られはしたが、自分も

水の針でアルゴンのレンズを一つ破壊して同量のダメージを与えたので、レベル差を考えればアルゴンからいくばくかのポイントを取ったはずだ。つまり、最初の言葉を、見事に達成してみせたことになる。

そんな計算を脳裏で巡らせながら、ハルエキはようやく完全回復した肉眼で、アタア・カレントを探した。だが、ついさっきまで陣取っていたはずのビルの上はその姿はない。

——まさか、アルゴン・アレイに続いてあの人まで溺れてしまったのか。訊きたいことが山ほどあるのに。いやその前に、助けてくれたお礼を言わなきゃならないのに。

そう考えたハルエキが、屋上にひざまずいたまま、思わず「カレンさああああん！」と叫ぼうとした——その寸前、真後ろで声がした。

「ナイスファイト、なの」

「えっ」

両脚を支点にぐるっと体を反転させると、目の前に立っていたのは、間違いない特異な流水装甲アバターだった。さらさら流れる水の膜の奥で、青白いアイレンズが仄かに光っている。「あっ、あのっ、僕、ええと、そのっ」

残り時間はあと八十秒と少し。喉嚨に何から口にするべきか決めかね、ハルエキは正座状態のままわたわた脚を振ってから、心の赴くままにまくし立てた。

「す、すみません——せっかく助太刀して頂いて、いい感じに追い込めそうだったのに、僕、

「脱走技なんかにやられて……」

いきなり謝罪から始めたハルユキに、カレントはかすかな笑みの気配を漏らすと、ちやぶんと水音を立ててかぶりを振った。

「いいえ、あなたは頑張ったの。目くらましと逃げ足はあいづらの得意技だから仕方ない。それに、あれ以上アレイ……いえ、《分析者》を追い込んでいたら、心意技で即死させられていたかもしれない。この状況なら、彼女はそれを躊躇わないの」

「しっ……し、シンイ……」

声の届く範囲には誰もいないにせよ、いきなり断絶のワードを聞かされ、ハルユキはびんと背筋を伸ばしてしまった。その反応を見て、カレントはもう一度微笑み、言った。

「それより、クロウ、あなたにはまだこの戦場でしなきゃならないことがあると思うの。アルゴン・アレイが、観察を中止して、自ら乱入してまで妨害したかったことが」

「え………あ、あつ！」

そう、カレントの言うとおりだ。突如現れたアルゴンのレーザーに翼を撃ち抜かれ、制御を失って墜落する直前、ハルユキはとてもの大切なことを語ろうとしていたのだ。加速世界に突如出現した天才バーストリンカー、ウルフラム・サーベラスに向かって。

「そ、そうだ……すみません、お礼はあとでちゃんと言いますー」

叫び、カレントに一礼してから、ハルユキは転がるように走った。ビル屋上から躊躇いなく

飛び降り、傷ついた翼で不安定に滑空。青梅街道の真ん中に着地すると、そこに横たわったままのサーベラスを抱え上げる。

まだ意識は戻っていないようだ。少し離れた所で、スタンから回復したアッシュ・ローラーがパイタの残骸の前で「ノオオオ——ッ！ 怪様のマッスイイ——ンがあ——ッ！」と絶叫しているところを見ると、恐らくサーベラスの失神は、単なる被ダメージによるものではない。

前回の対戦で発生した（人格交替現象）の予兆の可能性が高いが、ヘルメットだけでなく、両肩のアーマーも沈黙したままだ。ハルユキは残り時間が四十秒しかないことを確認すると、意を決してサーベラスを揺り動かしながら呼びかけた。

「サーベラス……起きてくれ、サーベラス！」

覚醒するのが左肩の（サーベラスⅡ）ならまだいいが、現状未確認の、右肩に宿る（と推測される）（サーベラスⅢ）——アルゴンが「ミーちゃん」と呼んだ人格が出てきてしまったら何が起きるか解らない。だが、この機会を逃せば、次にいつサーベラスとコンタクトできるかもまるで不明。たとえできても、その時の彼が第一人格のサーベラスⅠであるという確証はないのだ。

「サーベラス………!!」

ハルユキの、懸命の呼びかけが届いたのかどうかは定かでないが——。

ウルフラム・サーベラスの、狼のあぎとを模したバイザーの奥で、弱々しい光が明滅した。同時に、タンダステン装甲に包まれた体がびくりと震える。

「……………クロウ、さん……………」

やがて発せられたその声は、間違ひなくハルユキと三たび戦ったサーベラスIのものだった。安堵のため息を押し戻し、ハルユキは続けて叫んだ。

「サーベラス、もう時間がない！ でも、僕はもっと君と闘がしたいんだ！ 闘む、この対戦が終わったら、アルゴン・アレイの私入を避けるためにすぐにグローバル接続を切って、それで……………」

刹那の速さを振り切り、鋭くひと言を口にする。

「……………現実世界のこの場所、ルックタ商店街の青梅街道入り口まで来てくれ！ 僕はそこで君を待ってる!!」

「……………」

サーベラスは、すぐには答えようとしなかった。

細くことも、その他のいかなる反応も表さず、ただじつとハルユキの顔を見ている。しかしハルユキは、小柄なメタルカラー・アバターの内側に、解放を求める強い感情のうねりが存在することをありありと感じた。

視界上部では、タイムカウン트가冷酷に時を刻んでいく。残り二十秒。十五秒。

デジタル数字が最後の一桁に突入すると同時に、ハルユキは沈黙を続けるサーベラスに深く頷きかけ、顔を空に向けた。

すると、境界に、予想もしなかった光景が飛び込んできた。

青梅街道南側のビル屋上に立ち続ける、流水のデュエルアバター、アクア・カレント。

そして北側の、もともとカレントが陣取っていたビル屋上には、いつの間にか濃黒のシルエツトが一つ、ひっそりと佇んでいた。

剣状の四肢に、麗蓮の花を模したスカート。細くなやかなボディの上には、鋭利な逆V字型のマスク。ハルユキの親であり、ネガ・ネビュラスのマスターでもある、黒の王ブラック・ロータスだ。

シルバー・クロウを観戦登録していた彼女は、突発的バトルロイヤルの開始と同時にギヤトリとしてこの戦場に自動タイプした。しかし、たとえ攻撃される恐れのない観戦者であっても、事情が解らないまま（土）が姿を晒すのはリスクなので出現ポイントである商店街の北に残ったのだ。

なのに、いくら残り数秒とはいえ、あんなに目立つ場所に現れたその理由は――。

ハルユキが途惑いつつ見上げる先で、黒雷姫はすっと右腕を持ち上げた。ハルユキに向かってではない。（終決之剣）の鋭い切っ先は、通りの反対側に立つ、アクア・カレントを指している。

だが、その仕草に、いつさいの敵対的ニュアンスは存在しなかった。

それどころか、対戦者と観戦者の接近刺激十メートルを超えて近くまでいきたい……いや、直接触れ合いたいと求める、黒雲姫の心の表れであるかのようにだった。

同じことを感じたのか、アクア・カレントもまた右手を上げ、水が細く流れ落ちる指先をブラクタ・ロータスへと向けた。

その時、ステージの空を埋め尽くす陰鬱な雲霧にわずかな隙間ができ、細く差し込んだ夕日が、黒黒と流水のデニエルアバターたちを同じオレンジ色に染めさせた。

一秒後、タイムカウントがゼロになり、目の前に「TIME UP」の文字列が静かに燃え上がった。

現実世界に覆増した瞬間、周りに商店街の喧噪が押し寄せてきて、ハルユキは思わず顔を閉じた。

高円寺ルック商店街は、梅郷中には近い青梅街道の交差点から北に向かつて高円寺駅近くまで伸びている、歴史あるショッピング街である。横瓦ぶきの遠本タイルで舗装された道の両側には、生鮮食品や雑貨を扱う昔ながらの個人商店から、喫茶店やギョーザ屋、ハルユキもよく行くゲームショップなどがぎっしりと軒を連ね、夕方ともなれば平日でも買い物客で大いに賑わう。

すぐ近くにあった街灯兼ソーシャルカメラの支柱に背中を預け、手探りでニューロリンカーのグローバルネット接続を切る。ふうふうと長く息を吐いていると、誰かの手が顔に置かれた。続けて、耳許で声。

「よく頑張ったな。レベル8の（四眼の分析者）相手に、見事な戦いだったぞ」

ぱちつと見開いた目の先にあったのは、もちろん梅郷中学校副生徒会長にしてハルユキの（義）である黒雪姫の笑顔だった。毎週末の領土戦でハルユキが健闘した時と同じ、優しくも誇らしげな笑みを浮かべている——が、その奥にはもう一つ、他の感情が隠されているように

感じられた。寂しき……いや、二度と還らぬ何かに向ける切なさ、だろうか。

「……………先輩……………」

ハルユキは、頭の手を載せられたまま、黒雪姫の瞳をじっと見つめた。

脳裏には、長かったバトルロイヤルのラストシーンがまた焼き付いている。幹線道の両側から手を差し伸べ合う、二人のバーストリンカー。片やレベル9の（王）、片やレベル1ということ考えれば、それほど深い交誼があったとは考えにくいのだが、あの光景はまるで生き別れた姉妹でもあるかのようなだった。

「……………あの、先輩。さっきのバトルロイヤルに参加してた、アタア・カレントさんって……………」

「……………ン……………」

ハルユキが小声で口にした名前を聞いた途端、黒雪姫はそっと右手を下ろし、眼を伏せた。その表情を見ていると、誰なんですか、とストレートに訊ねることがなぜか躊躇われる。

頭の中で、「先輩はあの人を知ってるんですか」「僕も名前に聞き覚えはあるんですけど」「なんでレベル1なのにあんなに強いんですか」等々の質問事項をこねくり回し、最後に「どうして僕とサーベラスを助けてくれたんでしょう」と書かれたカードを思い浮かべた、その瞬間。

ハルユキはようやく、自分が大切な約束をしていることを思い出した。

「あ……………あつ、す、すみませんー僕、すぐに行かないとー」

いきなり叫んだハルユキに、黒雪姫も驚いたように顔を上げた。

「行くって……どこにだ？」

「そ、それが……僕、対戦の最後に、サーベラスに言ったんです。この商店街の入り口で待つてから、来てくれたって」

「な……いや、それは、しかし」

危険だ、というひと言を黒雪姫が吞み込んだことは、ハルユキにも解った。

誤として、またレジオンマスターとして当然の判断だろう。ウルフラム・サーベラスとアルゴン・アレイにはたんならの関係があることは確定的で、そしてアルゴンはあの恐るべき組織〈加速研究会〉の幹部だと疑われるのだ。この状態で、サーベラスにリアルを晒すのがどれほど危険か、それはハルユキも否定できない。

「……解ってます。でも」

一度傾き、次いで軽くかぶりを振って、ハルユキは続けた。

「でも、あいつ、僕に言ったんです。加速世界に、戦いに勝つことより大切なものがあるなら、それを見たい……って。最初は、勝ってポイントを稼ぐことだけが存在意義だっけって言ってたのに……僕との対戦を通して、何かを感じてくれたんです。だから……だから、僕……」

相変わらず肝心なところで言語化能力を使い果たしてしまうハルユキだったが、それでも黒雪姫には最後まで伝わったようだった。軽く見聞かれた漆黒の瞳が、やがて春の夜空のように

和らぐ。

「そうか。ならば、行こう」

「え……ま、まさか先輩ですか？」

「少し離れたところにいるから大丈夫さ。言い合っているヒマはないぞ」

確かにそれはそうだ。もしサーベラスが意を決して待ち合わせ場所に来てくれても、ハルユキがいなくては話にならない……という因果結果になりかねない。

「わ、解りました。じゃあ、すみませんが急ぎます！」

大きく息を吸い込み、ハルユキは小走り少し手前の速度で、商店街を南へと戻り始めた。

買い物をする主婦や、談笑しながら歩く学生たちの顔をすり抜けつつ数分移動すると、行く手に大きなサインゲートが見えてくる。前世紀半ばから建っているという——もちろん改修は何度もされただろうが——そのクラシカルな金属製ゲートの下が、ピンポイントでヘルツク商店街の青梅街道入り口」ということになるはずだ。

今のところ、それらしき少年の姿はない。対戦終了後、黒雪姫と少し会話したとは言え、出現位置を考えればハルユキが先着するはずだ。あそこで待っていれば、たぶん……いやきつと来てくれる。そして、僕は今度こそ、あいつにちゃんと言うんだ。一瞬に……

「念のため言っておくが」

ゲートに近づこうとするハルユキの肩を、後ろから伸びた手が押さえた。振り向くと、黒雪

姫の顔には、何とも微妙な表情が浮かんでいる。

「は、はい？」

「その、一応、可能性は頭の隅に入れておけよ。サーベラスが……男ではなかった場合も」

「は……え、えええけ」

「声大きい………私もまずないとはいえないが、キミの仇敵のアツシュ・ローラーという例もあることだしな」

仇敵の、をやや強調しつつそう言うとき、黒雪姫は手を離した。

確かに、加速世界のアツシュは一人称（優越）の、この上なく男性型な世紀末ライダーだが、現実世界では目下（目下）部（部）編（編）という名のたいへん素直で大人しい女の子なのだ。ハルユキの知る限り、彼女が唯一の性別逆転（逆転）バーストリンカーだが、例外が一つでも存在するならそれが二つになる可能性は常に存在する。

「特殊性で言えば、サーベラスはアツシュさんとタメ張りますもんね……。解りました、氣をつけておきます」

と頷いてはみたものの、もし本当に女の子だったら、初対面でもともに会話できるかどうかはかなり怪しくなる。ましてや近くから黒雪姫に見られているとなれば、全身硬直・大量発汗状態に陥り、あ行の音しか出せなくなる可能性が高い。

そんなハルユキの内心を見抜いているのか、黒雪姫は笑顔で「がんばれ」とだけ

言い、一足先に商店街入り口へと向かうと、サインダートのすぐ東にあるファーストフード店に入ってしまった。ガラス越しに監視……ではなく見守るつもりだろう。

一人になったハルユキは、何度が深呼吸してから、意を決して歩き始めた。数十歩でゲートの真下に到着したので、ファーストフード店から遠い方の金属柱に背中を預ける。店内窓際のカウンター席に座っている黒髪姫をちらりと確認してから、改めて周囲を見回す。

時刻は午後六時十分。平日だが人通りはかなり多い。ハルユキの位置からは、東西に走る青梅街道の歩道と北に延びる商店街が両方見えるが、どちらも帰宅途中の学生や勤め人、買い物客がひっきりなしに行き交っている。しかし今のところ、立ち止まってこちらを見るそぶりをする人物はいない。

ウルフラム・サーベラスは、先のバトルロイヤル対戦で、アツシユ・ローラーにやや遅れて北東方向から出現した。つまり、現実世界の彼（もしかすると彼女）もそこから現れるはずだ。ハルユキの言葉に応えてくれたならば、だが。

仮想デスタクトップの時刻表示を一瞥すると、対戦終了から五分弱が経過している。来るなら、北か、あるいは東だ。ハルユキは軽く両手を握ったまま、交互に視線を動かす。だが、通行人と建物に遮られ、見逃しが悪い。

——過激対戦ステージでも、こんなに遠くまで見逃せるんですね……。

耳の奥に、そんな声がかすかに響く。

アルゴン・アレイが乱入してくる直前、シルバー・クロウによって空高く持ち上げられたサーベラスが発した言葉だ。地上での格闘戦を得意とする彼は、あの高さから対戦ステージを睥睨したことはなかったのだろうか。

もう一度。

いや、もっともずっと、何故だっけに彼に見せたい。(月光) ステージの、巨大な満月に照らされながらもどこまでも続く純白の街並みを。(警察官) ステージの、地上に星屑が溢れたようなイルミネーションの海を。(風船林) ステージの、遙か地平線まで連なる緑のジャンダルを。(黄蜂) ステージの空を徘徊、茜色に染める、永遠の夕焼けを——。

「……あの世界は、無限なんだ」

戦場で口にした台詞をもう一度小声で呟いてから、ハルユキは顔を青梅街道から商店街へと動かした。

そして、見た。

行き交う人流の向こう、二十メートルほど離れた路傍に、いつの間にか小柄な人影がひっそりと立っているのを。

中学校の制服であらう白の開襟シャツに、細かいチェック柄の入ったダレーのスラックス。服従からすると男子だが、髪はやや長めだ。まだ精悍さよりも幼さが前に出ている顔立ちは、ハルユキより一つ下の一年生だろうか。

何かに耐えるように、少し歪められた表情も気になるが、何より印象的なのは彼の眼だった。商店街の雑踏を挟んでいても、互いの視線が真っ直ぐぶつかっていることをありありと感じる。それほどに、少年の眼は強い光を宿している。

普段なら、見知らぬ人とすれ違う目も合うと反射的に顔を逸らせてしまうハルユキだが、今だけはひたすらに少年の瞳を凝視し続けた。

彼がウルフラム・サーベラスだということは、直感以外にももう一つ、右手に握り締められた灰色のニューロリンカーが裏付けている。当然、細い首にはいかなるデバイスも存在しない。ハルユキの、対戦終了直後の「グローバル接続を切断しろ」という指示を、ひと目で解る形で実行しているのだ。

——僕は、ここにいます。

——あと二十メートル、その足で歩いてきてくれ。そうしたら、まずは挨拶しよう。互いに名乗って、握手して……そこからもう一度始めよう。

ハルユキは、心の裡で懸命に語りかけた。サーベラスがどんな組織に属し、いかなる秘密があるとも、根本のところまで掘れば、二人とも同じ「フレイン・バースト」という対戦格闘ゲームのプレイヤーだ。携って立つその基盤さえ共有できれば、いつか必ず解り合える。友達になれる。

——僕は、君と、友達になりたいんだ、サーベラス!!



その無音の叫びを感じ取ってか、少年はひととき強く表情を歪ませた。眉がぎゅっと寄せられ、引き結ばれた口許が震える。右足が少し持ち上げられ、また戻る。

数秒間の真藤を見せてから、少年は徐々に肩の力を抜き、かすかな微笑みを浮かべた。

全身を真っ直ぐに伸ばし、両手を横に揃えて、ゆっくりと頭を下げる――。

体を起こすと振り向いて、商店街を北へと走り出した。小さな背中はあつという箇に入混みに紛れ、ハルユキの世界から消える。

「あつ……………」

ハルユキは短く声を漏らし、反射的に少年を追いかけようとした。だが、二歩前に出たところで踏み留まる。

焦ってはいけない。サーベラスは、ハルユキの呼びかけに応えて待ち合わせ場所のすぐ近くまできて、現実世界で顔を見せてくれた。パーストリンカーにとって、リアルな姿を睹すことはとても重い意味を持つ。だから、次の機会には、彼は今日より近づいてくれるはずだ。

そう、きつとすぐに……………」

「きつと、すぐにまた会えるさ」

そんな声が後ろで聞こえ、ハルユキは振り向いた。するとそこには、テイタアウト用のドリントカップを片手に持った黒眼鏡の姿があった。微笑を浮かべながら一度頷き、カップを差し出してくる。

逆鱗、喉がからからに渴いていることが自覚され、ハルユキは「ありがとうございます」と頭を下げてから受け取った。ストローに口をつけ、冷たいウーロン茶を一気に半分飲み干す。ふうっと息をつき、黒雪姫の顔を見ながら、改めて答える。

「……そうですね。僕、また中野に行きます。それで、何度でも、あいつと対戦します」
「ン、それがいい」

黒雪姫は笑顔で頷き、ハルユキの背中をぽんと叩いた。

そのアタシカで、ようやく思い出す。この場所に移動する直前、ハルユキは黒雪姫にある質問をしたのだが、その答えをまだ聞いていない。

「あの、さっきはすみませんでした、お話を中断させちゃって」
謝罪してから、改めて訊ねる。

「えっと……バトロロイヤルで僕を助けてくれたアタ・カレントさんで、もしかしたら、先輩のお知り合い……なんですか？」

ハルユキの問いに、黒雪姫は一瞬いぶかしそうな顔をしたが、すぐにこくんと頷いた。

「ああ……そうだ。カレントは、私の古い……そしてとても大切な、仲間だったんだ」

「……そう……ですか。だったら、もつと話したいことが、たくさんあったんじゃない……」
言ってから、ハルユキはふと思いつき、早口で続けた。

「そ、そうだ。もしかしたら、カレントさんはまだこの戦域のマッティングリストにいるかもしれ

れません。先輩から対戦を申し込めば、もう一度会えるんじゃないんですか？」

「……………ん……」

黒雪姫は俯き、すうっと空気を吸い込んだものの、対戦を開始するための（バースト・ラング）コマンドを発することなく、長い吐息へと変えた。

「……………いや、いつかまた会う機会もあるさ……」

そう呟いた黒雪姫の顔は、微笑の奥にいくつもの感情を内包しているように思えて、ハルユキはただ置くことしかできなかった。

商店街の人通りがいつとき途絶え、青梅街道の車列も赤信号で停止した。生まれた静けさの中で、ハルユキは自分の感慨も込めたひと言を口にした。

「そうですね。また……いつか」

その言葉に答えたのは――。

黒雪姫ではなく、いつのまにか彼女の後ろを取っていた何者かだった。

「ごめんさい。その（いつか）は、今なの」

約二秒の硬直状態を経て、黒雪姫がしゅばつと振り向き、ハルユキがずざつと右側の前に飛び出した。

おそらく女性であろう人が、そこに立っていた。同年代か少しだけ上だと思われるが制服は着ていない。下が膝丈のスリムジーンズにスニーカー、上は七分袖のサマーニット。首のニエ

「ロリンカーは、白の半透明外装。」

髪は軽めの内巻きボブで、すっきり涼しげな顔立ちに、赤いフレームの眼鏡がアタセントになっ
てゐる。まったくの無表情だが、透明感のある瞳だけが、水面のように光をたゆたわせる。
揺れる心を映す小窓のように。

「だ……」

誰なんですかあなたは、と問い質すべく開きかけた口を、ハルユキはびたりと停止させた。
どこかで、この人と会っている。対戦中にも感じた、そんな記憶の残影のようなものが、ま
たしても頭の深いところを過ぎったのだ。

思い出したいのにどうしても思い出せないもどかしさに唇を噛むハルユキと、隣で声もなく
立ち尽くす黒髪姫を顔に見て、眼鏡の女性はごくかすかに微笑んだ。軽く会釈してから、ハル
ユキに向かつて、少しハスキーな囁き声を発する。

「お久しぶりなの、シルバー・タロウ」

「あ、ええと、ども……」

反射的に頭を下げかけて、再びフリーズ。りりりりアル割れ。と仰け返るが、そんなハル
ユキを右手で制止し、女性は斜め掛けにしたショルダーバッグから小さな瓶状のものを取り出
した。

見れば、少々時代遅れの筒がある薄型タブレット端末だ。タッチパネルに指を走らせると表

返してハルユキに示す。アインチほどの画面に表示されているのは、写真だ。人間の、胸から上を撮影している。まん丸い顔にぼさぼさヘア、まん丸い両眼をきょとんと見開く、なかなか人間の抜けた顔の少年は——どこからどう見ても、ハルユキ自身だった。

それだけではない。写真の下部にはくつきりと『Silver Crow』の文字、しかも2046/11/9と日付まで入っているではないか。

「な……ななっ……」

どうどうしてこんな写真が？ と再度俯け反るハルユキに向かって、女性は言った。

「……というわけだから、今更リアル割れを気にしなくていいの」

——と言われても、そうですわと納得できるはずもない。ハルユキが硬直したまま画面内の自分とにらめっこを続けていると、ここでようやく黒言姫が、密やかな声を発した。

「……………カレン、なのか…………？」

すると、

タブレット端末をバッグに戻した女性は、赤い眼鏡のブリッジを指先で持ち上げ、初めて正面から黒言姫を見た。二、三度瞬きしてから咬しように眼を細め、軽く、しかし確かに頷く。「リアルでは、はじめまして。そして……久しぶり、ポーラス。あなたと話すのは、二年と半年より……なの」

その返答は、二つの意味を持っていた。

まず、眼前のこの女性が、先刻のバトルロイヤルでハルユキを助けてくれた煉衣裝甲を持つレベル1、アクア・カレントであるということ。次に、彼女はやはり、黒薔姫……いや黒の王ブラッタ・ロータスと浅からぬ因縁があるということ――。

いや、それだけではない。カレントは、ハルユキとも何らかの関わりを持っているはずだ。そうでなければリアルルの、しかも半年以上も前の写真を持っているはずがないし、アルゴン・アレイの攻撃からハルユキを助けてくれたことも説明がつかない。

でも、どうして、《何らか》の申身が悪い出せないのか。

最大級の衝撃さに襲われ、ハルユキは思わず右手でちんと自分の頭を叩いた。続けてもう一度叩こうとしたが、カレントが素早く手を伸ばして妨げた。

「ごめんなさい。悪い出せないのは、私のせいなの」

「……え……それって、どういう……」

瞭然とするハルユキに向かって、カレントはにわかに信じがたい言葉を口にした。

「あなたの記憶を復活させてから、全部説明するの。でも、そのためにはどこか落ち着ける、安全な場所が必要。心あたり、ある？」

とりあえず疑問を横上げし、ハルユキは黒薔姫と顔を見合わせてから、カレントに向かってこつくり頷いた。

「ええと……少し歩いてもいいなら……」

3

レジオン（ネガ・ネビュラス）の作戦会議室兼前線基地。

すなわち、高円寺駅の北に建つ複合高層マンションB棟二十三階の有田家リビングルームに、ハルユキ、黒雪姫、そしてアクア・カレントのリアルであるらしい眼鏡の女性が到着した時、時刻は午後六時四十五分となっていた。

時代に逆行する高燃費体質を誇るハルユキとしては、そろそろ空腹メーターがレッドゾーンに差し掛かる頃合いだ。しかし、山ほど積み重なった疑問と謎がせめて半分解消されるまでは、ご飯を食べても味が解るまい。

というわけで、ソファセットに二人を案内してから、ハルユキはキッチンで三つのグラスに冷茶を注ぎ、さきやかなエネルギー源として木皿に梅のり輪あられを盛った。お盆を捧げ持つてソファのところに戻ろうとして、少し手前で立ち止まる。

向かい合わせに座る黒雪姫とアクア・カレントの様子に、なぜかはっと胸を衝かれたのだ。無言で見つめ合う二人は、互いに相手を深く求めつつも、同時に自分を遠ざけようとしているかのように思える。その雰囲気は、再会してすぐの頃の黒雪姫と、倉崎楓子——スカイ・レイカーを強く思い起こさせる。

「……お待ちしました」

ハルユキはそう声をかけ、ガラステーブルにお盆を置くと、二人の前に冷えた緑茶のグラスを並べた。部屋が薄暗いので照明の光量を上げようとしたが、思い直して南のカーテンを全開する。東に去りつつある雨雲を、夕陽が金色に染め上げる光景が窓いっぱいにはびかり、否応なく（氷雪）ステージでの激闘のラストシーンを想起させる。

「……………もうすぐ、梅雨明けだな」

黒雪姫の呟きに、ハルユキは頷いた。

「最新の手測だと、七月五日でしたわ」

「あと一週間か。それまでに、色々解決したいものだな……。———ありがとう、頂きます」

黒雪姫がグラスを手にとると、向かいの少女も「頂きます」と言ってお茶に口をつけた。ハルユキも下座に腰を下ろして一口飲み、三人揃ってひと息ついたところで、右側に座るカレントが何気ない口調で言った。

「じゃあ、始めるの」

傳（つた）わりのバッグから取り出されたのは、丸いコードリールつきの携行用XS Bケーブルだった。ブラダの片方を引き出し、それをハルユキに差し出す。

「え……あの、ええと」

「直結がいちばん簡単なの。早く」

やむなくブラダを受け取ってから、ちらりと左側を見ると、黒實姫は軽く苦笑して言った。

「必要ならばやむを得まい。行つてらっしゃい」

「は、はい、行つてきます」

ハルユキがニュートロリンカーの直結端子にブラダを挿すと、すでにもう一方を接続していたカレントがすかさず言った。

「バースト・リンク」

体感時間で約十秒——つまり現実では〇・一秒にも満たない（加速）だった。戻った瞬間、黒實姫が呆れたように「早いお爆りだな」と感いたほどだ。

何せ、直結対戦フィールド内で行われたことと言えば、最短距離に出現したアタア・カレントがすたすたクロウに歩み寄ってきて、水に包まれた両手でヘルメットを包んで、額をびたつと押しつけて、ひと言囁いただけなのだ。（メモリ・フリー）、と。

加速終了しても、正真正正、何が変わったとも思えない。カレントは回収したXSSBケーブルを巻き取ってバッグに片付けてしまったので、成されるべきことは成された——のだろうが、しかし……。

さらさら、さら。

水が流れる音が聞こえ、ハルユキはキタチンの蛇口を閉め忘れたかなと振り向いた。しかし

考えてみれば、もしそうならとうに警告が表示されているはずだし、聞こえているのはシンクに水流がぶつかる寛々しいノイズではなく、深山のせせらぎを思わせる軽やかな水音だ。耳を澄ませると、音源は外部ではなく自分の内側にあるように思えてくる。過ぎ通った冷水が、頭の中を洗い流し、せき止められた回路を甦らせていく……………。

「……………人、あれ」

ハルユキはばかんと口を開け、右側に座る眼鏡の（おそらく）女性をまじまじと眺めた。

「…………アタア・カレントさん…………って、あのアタア・カレントさん…………ですよね？ レイカーさんやメイデンさんと同じ…………第一期ネガ・ネビュラスの幹部、《四元素》のお一人の…………」

こんな大事なことを、なぜ今まで忘れていたのか。アタア・カレントの名前は、ほんの九日前に行われた、《アーダー・メイデン救出作戦》の通りに聞いたばかりではないか。しかも、同じこの有田家リビングルームで。

二年半前、現在の六大レギオンに伍する勢力だったネガ・ネビュラスは、無制限フィールドの中央に存在する《帝城》攻略に挑み、しかし四方門を守護する超級エネミー《四神》に殲滅らされて崩壊した。その際、西門の守護獣ビヤッコと戦った頭首ブラック・ロータスと《風》のスカイ・レイカーは幸くも離脱できたものの、それ以外の門を攻めた三人の幹部は、全員が《無限EK》に陥ってしまった。

南門・スザクの祭壇では、四禁言日誌こと《火》のアーダー・メイデンが。

北門・ゲンプの祭壇では、《地》のグラフィイト・エッジが。

そして、東門・セイリユウの祭壇では、《水》のアタア・カレントが――。

確かにあの時は、最優先目標であるメイデン救出作戦で頭がいっぱいだったが、それにしても四元素の名前をこうも簡単に忘れてしまうとは情けない。ハルユキは両手で記憶保存容量少なめの頭を抱え、「うろうろ」と呻いた。

しかし、何たることか、それで終わりではなかった。

頭の奥で更にもう一つ回路が開き、新たな、そして大量の記憶がどっと意識に流れ込んできたのだ。

アタア・カレント。その二つ名――《唯一の二》

そう呼ばれている理由は、彼女があまりにも特殊なレベル1バーストリンカーだから。普通、レベル1の新米は自分のポイント収支だけで頭がいっぱいになってしまうもののに、カレントはポイントが危うくなった新米リンカーの運術を請け負う《用心棒》として名を馳せているのだ。

具体的には、レベル2までのバーストリンカーの依頼を受けて、ポイント残高が50に回復するまでタッグを組んで戦ってくれる。運術の報酬は、ポイントではなく、《リアルを略すこと》。持ち合わせ場所の喫茶店等に起き、指定された席に置いてあるタブレット端末にアバターネームを入力すると、カメラアプリで顔の写真を撮られる。その写真は、付近に身を隠しているカ

レントの端末に無断転送される。

ハルユキが、なぜそんな具体的な手順まで知っているかというところ。

かつて自分自身がアクア・カレントの依頼人となったからだ。去年の秋、まだまだひよつこだった頃、パーストポイントがようやく300を超えた嬉しいさで舞い上がって、安全マージンのことなどすっかり忘れてレベルを2に上げてしまったのだ。

結果、保有ポイントはたった8にまで落ち込み、あとたった一敗でブレイン・パースト強制アンインストールという絶体絶命の危機に立たされた。そのピンチを救ってくれたのが、誰あろう（唯一の「一」）アクア・カレントだ。神保町エリアで、レベル3や4のタッグを相手に連戦連勝し、ハルユキのポイントを70台にまで引き上げてくれた。彼女が護衛してくれなければ、ハルユキはとくにブレイン・パーストを失っていたかもしれない、いや、その可能性はかなり高い。

「……………カレンさん」

ハルユキは顔を上げると、これまでとはまったく違う思いを込めてその名を呼んだ。製薬で仄かに微笑む女性の、揺れる水面を思わせる瞳をじっと見詰め、もう一度呼ぶ。

「カレンさん……………僕……………僕、ずっと、あなたに……………会いたかった」

夢中でそう言った途端、左側からある種の心意的波動がメラッと放たれるが、それに気付くこともなく続ける。

「会って、おれが言いたかったんです。あなたがいてくれたから……助けてくれたから、僕、こうして……」

それ以上はもう言葉にならず、代わりに両眼に熱く滲むものがあつた。

アタア・カレントは、そんなハルユキに向かってゆっくりと頷きかけると、穏やかな声で答えた。

「私も、もう一度あなたに会いたかったの。会って、たくさん話を聞きたかった」

メラメラッ。とオーラの第二波が訪れ、ハルユキはようやく視線をその発生源へと向けた。

途端、びくんと体を震ませる。にこやかな笑みを保つ黒雪姫の背後に、攻撃威力強化系の過剰光を幻視したからだ。

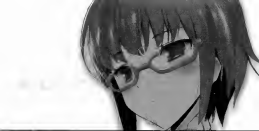
「ハルユキ君？」

「は、はひっ」

「盛り上がりつついるところすまないが、説明してくれるかな？ 私にはさっぱり話が見えないのだが」

「は、は、はひー」

こくこく傾き、ハルユキは無我夢中でアタア・カレントと出会った経緯を説明した。時折頷きながら、静かに聞いていた黒雪姫は、ハルユキが「……というわけなんです」と締めくくったその瞬間――。



「……………バカセノ男」

と、久々の大喝を炸裂させた。ソファから身を乗り出し、ハルユキの左頬をむぎうと掴んで、尚もまくし立てる。

「レベル2に到達した時点でニアデス状態になっていた、だと？ ……いや、安全マージンを取らずにレベルアップしたことはいままさか責めん、私の指導不足が原因だからな。だが、なぜすぐ私に教えなかった！ 言ってくれば、ポイントなど焼らでも分けてやったものを！」

「で、でも、先輩はあの頃高度治療室で面会謝絶で」

「デモも製品版もない！ 直結は無理でも、院内ネット経由で対戦はできたろう？！」

「で、でも、先輩もあの頃はポイントの残高が」

「そんなもの、エネミー狩りで焼らでも稼いできたさー」

……………くすくす。

不意に控えめな笑い声が響き、黒雪姫とハルユキは同時に顔を動かした。

すると、これまではば無表情を保ち続けていたアクア・カレントが、口許に手をあてて小刻みに肩を揺らしていた。

その様子を見ても、ハルユキは「カレンさんも笑う時は笑うんだな」と思っただけだったが、黒雪姫のほうはハルユキの頬を掴んだまま、両眼をいっぱいに見開いた。何度か瞬きしてから、それまでとは打って変わった囁き声を漏らす。

「……カレン。お前がそんなふうに笑うところを、初めて見た。……いや、リアルでは初対面なのだから、当たり前かもしれないが……」

アタア・カレントは、尚も羞び笑いを続けていたが、やがて咳払いすると言った。

「ごめんなさい。可笑しくて笑ったのではないの。なんだか、嬉しくて……だって、ロータスが、昔みたいにな……私やメイデンが見ている前で、レイカーやグラフと言い合いをしていた、あの頃みたいに……」

赤いフレームの眼鏡に触れながらいつとき鐘を鳴し、すぐに顔を上げると、表情を改めて背中をびんと伸ばす。ジーンズの両膝に両手を重ねて、透明な視線でハルユキと黒雪姫を見詰め――。

「改めて、自己紹介するの。私はアタア・カレント。リアルネームは水見あきら」

少し間を置いてから、中性的な雰囲気（きずけ）に似つかわしいあきらという名前の女性は、主に黒雪姫に向かつてべこりと頭を下げた。

「ロータス。シルバー・クロウが私との関わりをいまままであなたに黙っていたのは、仕方がないことなの。なぜなら、該当する彼の記憶を、私が封印していたのだから」

五分後。

ハルユキと黒雪姫の自己紹介も終わり、互いのリアルでの呼び方も仮決定したところで、ハ

ルユキは改めてあきらかに確認した。

「ええと、じゃあ、あきらは八ヶ月前に僕の記憶を心意技（きこうぎ）で封印して、それをあっきの直轄封戦で使った（記憶解放）で解除した……わけですよね？」

「そのとおりなの」

「で、でも、なんでそんなことを……？」

「理由の半分は解りきっているの。ハル君に私の素顔を見られてしまったから」

「ほう？ キミはどうやってあきらのリアルを割ったんだ、ハルユキ君？」

黒雪姫が軽い驚き顔でそう訊ねるので、ハルユキは後頭部を掻きながら言った。

「いえ、意図的に割り出したわけじゃなくて、いつものドジで……指定場所の喫茶店で、トイレに行こうとしてつまずいて、偶然近くにいたあきらさんと……」

ぶつかって、押し倒して、その際彼女の身体に不意な接触をしてしまった記憶がようやく甦り、ハルユキはばくつと口を閉じた。硬直しながら視線を動かすと、当のあきらは素知らぬ顔で筆のり巻あられを振っているの、詳細を省いて説明する。

「……あきらさんのバッグを落としちゃって、そしたらあっきのタブレット端末が出てきて、

そこに僕の写真が……」

それを聞いた黒雪姫は、少々疑わしい顔をしながらも頷いた。

「なるほどな。さすがのアクア・カレントも、ハルユキ君のオッチコチヨイパワーにはして

やられたか」

「い、いやあ、それほどでも」

「褒めてはいないがな。……それで、あきら、もう一つの理由とは？」

視線を向けられると、あきらは指先に挟んだ梅あられをびつとハルユキに向けた。

「それも、当時ハル君に説明しているの」

「そ、そうでしたっけ……ええと……」

復活したばかりの記憶を高速再生し、ようやく該当シーンに辿り着く。ハルユキに心意技を使う寸前、彼女は確かに言っていた。

「……僕とあきらさんが出会う……つまり、復活したばかりのネガ・ネビユラスに（四元素）であるカレンさんが関わるには、まだ早すぎるから……ですっけ」

「そう。再会する最初の一人はスカイ・レイカーであるべきだと思っただし、何より私とメイデン、そしてグラフは……」

「（無闇正史）状態から……か」

黒雪姫が、痛みに耐えるような顔で言うところ、あきらは眼を伏せながらそつと頷いた。

しばし沈黙する二人を交互に見やっていると、ハルユキはあることに気付き——いや思出し、鋭く息を吸い込んだ。

先のバトルロイヤルの最中にも感じたことだが、今までのやりとりには、一つの巨大な矛盾

が内包されているのだ。

あきらのデュエルアバター、アタア・カレントは、無制限中立フィールドに於いては帝城の東門に封印されている。

その状態のまま、あきらは通常対戦フィールドに於いて、レベル1の用心棒（唯一の「一」）として活動している。

しかし――。

「……で、でも、あの、無制限フィールドって、レベル4からじゃないと入れないんじゃない？」

思考の結末部分をつい口に出してしまったハルユキに、二人の視線が向けられた。凝って何度が覗きしてから、まずあきらが詭策のブリッジに放れつつ口を開く。

「当然の疑問なの。むしろ、ハル君がいつそれを言い出すかと思っていたの」

続いて黒雪姫が、照根を寄せたまま小さく頷いた。

「その問いに対する答えはシンプルだ。かつてのネガ・ネビュラスが帝城攻略に挑み破れた時、カレントはレベル7だった」

「な……ナナ!? 今のメイデンさんと同じじゃないですかー そ、それが、どうしてレベル1に……」

仰天のあまり口と眼をいっばいに見開いたその時、扉裏に遠く聴える声があった。草原を渡るそよ風のように爽やかで、磨き上げられた刃のように凛々しいその声は――帝城の内部で出

会った不思議な若武者アバターのものだ。最初は《トリリード・テトラオキサイド》と名乗り、別れ際に《アズール・エア》なる本名を明かした、大切な友達。

ハルユキと闇の脱出経路を検討していた時、彼は確かに言った。東門はおすすめしません、なぜならそこを守護する超級エネミー、《四神セイリユウ》は恐るべき特殊能力を持っているから、と。

「……レベル……吸収……」

ハルユキが荘くと、黒雪姫は軽く肩を持ち上げてから頷いた。

「……知っていたか。その通りだ……カレンは、指揮していた東門攻略部隊全員を撤退させるため、ひとりセイリユウの祭壇に踏み留まって勇戦し……幾度も敵の特殊攻撃を受け、その結果……」

「レベルが、一気に下がってしまったの」

バーストリンカーとして、およそ考えられる限り最大のダメージであろう——もちろんポイント全指を除けば、だが——事柄を、あきらめはさらりと口にした。指先に摘んだまたった梅あられを小さく齧り、冷茶を一口含むと、両眼を見開くハルユキと張り詰めた表情の黒雪姫に向けて仄かに微笑む。

「でもそのことで、メイデンやグラフ、レイカー、そしてロータスよりも深い傷を受けたなんて、私は思っていない。四神の強さ、恐ろしさに差はない……私が無痛のドレイン攻撃を受け

ている時、メイデンはスザクの火炎に焼かれていたし、ダラフはダンプの超質量に押し潰され、レイカーとロータスはビヤッコの爪と牙に切り裂かれていた。純粋に苦痛の大きさを比べれば、みんな私以上だったはずなの」

「……しかし、カレン。仮想世界の痛みは眠いが終われば消えるが……お前の受けたダメージは……」

「もちろん、レベルが下がった直後はちよつと……ちよつとの少し上くらいはショッパだったけど、でも、悪いことばかりじゃなかったの。用心棒として、ハル君みたいな困ってる子をたくさん助けることができたのも、そのお陰……だからそんな願をしなくていいの、ロータス」

あきらは、抑揚こそ薄いのが、たつぷりと気持ちがいこもった声でそう言くと、少し間を置いてから再び話し始めた。

「……ただ、レベルドレインのことはさておいても、守護エリアに深く踏み込めばほぼ確実に《無敵王》状態になってしまうのはセイリユウも他の四神と同じだから……私は、ネガ・ネビュラスが再結成されたと知っても、今までコンタクトする決心がつかなかったの。戻りたい気持ちはもちろんあった……本当は、戻りたくてたまらなかった。でも、もし私がレギオンに再加入すれば、ロータス、あなたは……」

そこで口をつぐみ、俯いたあきらに代わって、黒雪姫がゆっくり傾きながら囁いた。

「二週間前、再会したばかりのメイデンも、まったく同じことを言ったよ。もし再加入すれば、

新生ネガ・ネビュラスは……いや、マスターである私は、帝城で封印中のメイデンを救出するため再び四神に挑むだろう。その結果、新たな封印者を出してしまいかもしれない。それが怖かった、とな」

「怖くて当たり前なの。せつかくロータス……サッチが再起して、杉並に黒の旗が立つたのに、またあの悲劇を繰り返したくはないの」

あきらが黒雪姫に対して用いた「サッチ」なる呼称は、倉崎楓子が「サッチちゃん」、四葉宮蘭が「サッチ」と呼んでいると聞き、それを覚悟した結果だ。シンブルな口調といい、実はバドさんほどではないにせよセツカチ星人らしい眼鏡の女性は、黒雪姫が何かを言う前に再度口を開いた。

「でも、サッチやハル君は、見事にメイデンをスザクの祭壇から助け出した。風の噂にそれを聞いた時は、摩く嬉しかった。私が二人に再会して、封印したハル君の記憶を解放できる日もさつとくるって、そう思い続けていたの……」

「……それが、今日だった……というわけか」

黒雪姫が微笑みながらそう相づちを打つと、あきらは一度頷きはしたが、すぐに軽くかぶりを振った。

「本当は、もう少しだけ待つつもりだった。でも、のんびりしてられない事情ができたの」
眼鏡の奥で、セピアがかった色の瞳が鋭い光を帯びる。

「……知ってのとおり、二年と半年前に旧ネガ・ネビユラスが消滅してから、私は《用心棒》として低レベルリンカーの護衛を続けてきた。理由は幾つかあるけど、その一つは情報収集。私が助けたバーストリンカーたちは、ミドルゾーンに到達してからも、加速世界で知り得た重要情報を私に伝えてくれている……もちろん、所属レギオンの活動を阻害しない範囲で、だけだ」

その言葉に、ハルユキは大いに納得しつつ頷いた。仮に記憶を消去、いや封印されなければ、ハルユキも受けた恩義を少しでも返すべく、アタア・カレントと連絡を取り続けていたに違いない。

あきらも軽く頷くと、冷静ながらもどこか張り詰めた声で続けた。

「だから、私は新生ネガ・ネビユラスと連絡を断つていても、ここしばらく加速世界で起きていた一連の事件についてはそれなりに把握していたの。具体的には……《ヘルメス・コード縦走レース》での第四象限心査技による大規模テロと《冥府の鐘》の復活、七王会議で最終された鐘の浄化指令、《ISSSキット》の暴走と東京ミッドタウン・タワーに出現した《大天使メタトロン》、そして……シルバー・クロウによる《鐘》の浄化と封印」

すらすらと告げられた言葉は、この一ヶ月に起きた多くの事件をあまねくフォローしていて、ハルユキのみならず黒雪姫も驚いたように眼を見張った。

「相変わらず……と言うべきか、さすがの情報力だな、カレン」

軽く両手を広げてから、ハルユキに説明する。

「彼女は、以前のネガ・ネビュラスでも情報の収集と分析を担当していたんだ。我々なら気にもしないような噂の断片を集めて重要情報を導き出す手腕は、それは見事だったものさ」

かつてのマスターに賞賛されたあきらは、少し恥ずかしそうに眩いた。

「情報は、都市に張り巡らされた水道管を流れる水みたいなものだから。パイプの継ぎ目やヒビから、常に少しずつ漏れ出しているけれど、誰も意識しないの」

「へ、へえ……水道ってそんなに水漏れしてるんですか？」

つい、もう一度台所のほうを振り向いてしまってから、ハルユキは訊ねた。するとあきらは真顔で頷き、思わぬ豆知識を披露してくれた。

「東京都水道局管内の、今世紀はじめの漏水率は五パーセント前後。二〇四〇年代のいまでも、東京の上水道を流れる水の一パーセントは漏水で消滅しているの。量で言えば、一年間でだいたい一五〇〇万立方メートル」

「い、いっせんごひゃくまん……というと、二リットルペットボトルで、ええと……」

ハルユキが仮想デスクトップの電卓アプリを起動するより早く、黒富雄がさりと暗算してみせた。

「七十五億本だ。これでも、他国の大都市に比べればロスはかなり少ないらしいがな。……しかしあきら、確か私がまだレベル8だった頃、（レベル9サドンデス・ルール）の情報を得る

ために、同じくレベル8のドラフにお前が「先にレベルアップしてみる」と言ったような記憶があるが……あれはなかなか強烈な情報収集だったんじゃないか？」

悪戯っぽい微笑を添えながら黒雪姫がそう指摘すると、あきらは涼しい顔で答えた。

「ドラフは人柱担当だったから問題ないの」

「ははは……ま、確かにあいつほどしぶとい奴はなかなかいないな」

楽しそうに笑う黒雪姫の様子を見ながら、ハルユキは温かな感慨を噛み締めていた。

何か重要な事情に迫られてのことらしいが、あきら／＼アクア・カレントの登場によって、ネガ・ネビュラスの幹部集団たる「四元素」はこれで三人までもが帰還したわけだ。もちろん、カレントの言わば本体は無制限フィールドの音城実門、四神セイリユウの療場に封印されたままなのだが、いまだ名前だけしか知らないドラフアイト・エッジも含めて、四人が完全復活する日も決して遠くないという予感がする。いや、四元素だけではなく、旧レギオンに所属していた他のメンバーたちも、いずれ続々とはせ参じてくれるのではないか。

その時こそ、黒雪姫は、失ったものを取り返せる。

ネガ・ネビュラスが名実ともに七大陸レギオンの一つに戻れば、ハルユキは黒雪姫を今ほど強占できなくなるだろう。それが寂しくないわけではないが、彼女のたった一人の「子」であるという事実は変わらないし、何より黒雪姫の……そしてハルユキ自身の目標でもある「レベル10」に到達するためには、レギオンの陣容強化は必須条件なのだ。

梅風味のあられを習りながらそんなことを考えていると、不意に黒雪姫が手を伸ばし、ハルユキの頭をわしやわしやと撫でた。

「相変わらず気が早いなあ、キミは」

ハルユキの心を読んだかのような優しい笑顔をちらりと見て、小刻みにかぶりを振る。

「え……いい、いえ、僕はべつにそんな、寂しいなんてちつとも」

「そこで言ってしまえば白状したも同然だろう。信じる、私にとってキミやタム君、チエリ君は、かつての仲間たちと同じかそれ以上に大切な存在だ。仮にレギオンがどれほど大きくなろうとも、私の中のキミが小さくなることなど有り得ん」

「は、はい……」

じわりと滲みそうになったものを必死に押しとどめ、ハルユキは頷いた。すると右側から、あきらも微笑みながら言った。

「泣きたい時は泣けばいいの。水はいつも流れていないと澱んでしまうから」

少し前のハルユキなら、堪えきれずにポロポロいってしまふ場面だったが、ここはぐつと我慢して答える。

「えっと……あきらさんが、正式にレギオンに復帰してくれる時まで、貯めておきます」

「そう。なら、その時まで、記憶封印の直前に私に何を言ったか思い出しておいて」

「え、えっと……僕、何を言い……ましたっけ……」

と口にする間にも、あきらの台詞が呼び水になったかのように、当時のシーンが脳裏で再生される。あの時アタ・カレントは、あまりにも無防備に直結対戦を受け入れたハルユキへの警告として、「後払いの報酬としてポイントを全部奪う」と宣言したのだ。それに対してハルユキが答えた言葉は――

「……………『僕はあなたとは戦わない、なぜなら好きになってしまっ』」

みしみしつ。と頭部を強烈な圧力が襲い、ハルユキの台詞を中断させた。圧力の発生源は、頭に乗ったままだった黒雪姫の華奢な五指だ。細み技系アエルアバターの如きパワーを発揮しながらも、口許の微笑は消えていない。もちろんそれは、必殺の「極冷氣クロユキスマイル」ではあるが。

「……………よく聞こまなかったな、キミがカレンと戦わない理由が、何だった？」

「え、まえと……その、それは、す、スキー……じやなくて、スキヤキ……でもなくて、そう、スキルの戦っても敵わないかなーって……」

ハルユキ会心の言い逃れを、

「ブレイン・バーストにアビリティはあってもスキルは存在しないぞ」

と冷ややかに論破してから、黒雪姫は仕方ないなというように表情を緩めた。最後にほんと軽く叩いてからハルユキの頭から手を離し、自分も痺あられを一つ摘む。

「だがまあ、そんなキミだから、あきらはこうしてリアルで姿を現してくれたんだろうな……」

ばいっとあられを口に放り込み、いい音をさせて囃^はんでから、グラスに残っていた冷茶を飲み干す。お代わりを注いでこようと腰を浮かせたハルユキを、黒宮姫は手振りで制して姿勢を改めた。正面に座るあきらを真剣な表情で見詰めて、言う。

「……まだ色々試^しみたいことはあるが、過去の話はひとまずこのへんにしておこう。より重要なのは現在と未来……あきらが今日杉並^{すぎなみ}を訪れて我々とコンタクトした、その理由のほうだ。タイムリンドからして、(ISSキット)もしくは(加速研究会)と関連していると思うんだが……どうだ?」

聞かれたあきらは、眼鏡のブリッジに指先を触れさせながら頷^{うなづ}いた。

「相変わらず、いい読みなの。理由はその両方……と、プラスもう一つ」

「ほう? それは……?」

今日はもう数え切れないほどびっくりさせられているので、今更^{いまさら}何^{なに}を聞いても驚^{おどろ}かないぞ、というつもりでハルユキはあきらの答えを待った。しかし、発せられたひと言は、そんな決意など軽く吹き飛ばす威力を持っていた。

「……………(災禍^{さいくわ}の鐘^{かね})」

「……………!!」

黒宮姫は鋭く息を呑^のんだだけだったが、ハルユキは反射的に激しく身を引き、倉うくソファごと後ろにひっくり返りそうになった。どうにかバランスを取って前に戻り、大きく息を吐^はい

てから、改めて叫ぶ。

「そ……そんなー あ、あの箱は……いえ、あの（呪い）はもう完全に浄化されて、消え去ったはずですよ！」

ハルユキが、災禍の鎧と強化外装（ザ・ディザスター）を、本来の姿——神器（ザ・ディステイニー）と聖劍（スター・キヤスター）に還元し、無制限フィールドの片隅に永久封印したのは、ほんの大日前のことだ。いかに加速研究会といえども、もうあの場所に手出しはできないはずだし、そんなことがあつてはならない。絶対に。

そもそも、わずか数分前、アクア・カレント自身が言つたではないか。（鎧）は、シルバー・クロウによつて浄化・封印された、と。

ハルユキの受けた衝撃を和らげようとするかのように、あきらは一度頷きかけると説明を再開した。

「（災禍の鎧）そのものを復活させることは、研究会にももうできないと私も思うの。でも、彼らは恐らく、復活ではなく……新生を企んでいるの」

「し……新生、だと？ あれを、新たに生み出す……というのか？」

さしもの黒雲姫も、声に畏れを溜ませてそう訊ねた。あきらは視線を正面に移動させ、再び頷いた。

「七年前の、災禍の鎧誕生にも、加速研究会が関わっている……と私は推測しているの。それ

「は正しい？」

逆に問われ、ハルユキは黒雪姫と顔を見合わせてから同時に頷いた。極秘情報ではあるが、四元書^{シゲンショ}の一人たるアタア・カレントに伏せる理由はまったくくない。

「は、はい……。(鑑に寄生されてる時に見た夢)なんていう、ものすごく曖昧な根拠しかないんですが、でも僕は確信してます。七年前に、タロム・ファルゴンとサフラン・ブロッサム^{ブロッサム}の二人を腕^{うで}に掛けて、フランさんを無限EKでポイント全損させたのは、研究会の副会長ブラッタ・バイスと……幹部のアルゴン・アレイだってことを……」

ファルゴンとサフランの名前を聞いた時、あきらの瞳^{ひとみ}がほんの一瞬だけ華^{はな}らいたような気がしたが、窓から差し込むオレンジ色の光が眼鏡のレンズに反射して表情を隠した。少しだけ情^{なさけ}いたまま、静かな声を出す。

「そう……。なら、鑑^{かん}がその後何代にもわたって受け継がれ、加速世界に多くの血が流れたのも、研究会の意図する処^{あきざ}だった……と判断するべきなの」

「しかし……五代目のチェリー・ルータに鑑^{かん}を譲渡したのは、確^{たしか}か賞の王イエロー・レディオだったはずだぞ。まさかあのバナナ頭^{バナナがしら}までも、研究会の一味^{いり}だというのか……？」

黒雪姫^{クロユキヒメ}が眉^{まゆ}をひそめると、あきらは顔を上げて小さく苦笑した。

「さすがにそれはない、と思うの。レディオくんは、真^{まこと}とか策略^{たくわく}が大好きだけど、基本的には目立ちたがりのお調子者だから」

「お、おちよーしもの……」

仮にもレベル9の(王)をばっさり切ってしまうアタア・カレントにハルユキは仰天したが、黒雪姫はタスラスと小さな笑い声を上げると頷いた。

「それは確かにそうだな。自ら舞台上に上がらねば満足できないレディオは、暗黒趣味の研究会とはカラーが違い過ぎるか……。しかし、ならば奴が四代目ディザスター討伐のうちに(黒)を手に入れ、赤の王スカーレット・レインを狙った黒のキーパーツとして使ったのは、レディオ自身の意志だったということになるが?」

黒雪姫の指摘に、ハルユキも釣り込まれるように頷いた。

「それに、五代目のチェリー・ルートから六代目の僕に剣が移動したのも、まったく偶然の成り行きでしたよ。ニコがネガ・ネビュラスに協力を依頼するとか、五代目ディザスターにとどめを刺すのが僕になるとか、誰にも予想できなかったはずですよ。たとえば、研究会の奴らでも」
二人の指摘を、あきらは青んじるでも否定するでもない表情で受け止め、少しボリウムを落として言った。

「……つまり、こういうことだと思ふの。剣が誰から誰に移動して、どこでどんな悲劇を生もうとも、研究会にとってはどうでもよかった。彼らが求めていたのは、災禍のサイクルが必要なだけ続くこと……剣が受け継がれ、強化されていくこと。そして、充分に強くなったところで回収し、最終的な目的のために使うこと……」

「あ……」

あきらの言葉の一部分を聞いた瞬間、ハルユキの脳裏にもかっとフラッシュアップする記憶があった。顔をしかめ、問題のシーンの再生を試みる。

「ええと……」一週間近く前に、無制限フィールドで鐘を元の強化外装二つに分離したんですが、その直前に研究会副会長のブラック・パイスが現れて、僕に言ったんです。確か……「予定より少し早い、その鐘は回収・解析する。クロウ君は、残念ながら加速世界から退場して貰う」……って」

当時はざりざりの無神状態だったために記憶も曖昧だが、大意では間違っていないはずだ。ハルユキの、いやブラック・パイスの台詞を聞いた女性二人は顔を見合わせ、鋭い表情を浮かべて頷いた。まず、あきらが口を開く。

「やっぱ、僕らには長期的な計画が……つまり、鐘の最終的な使用目的があったんだと思うの。これは私の推測だけど、ハル君から回収した鐘を、七代目となる誰かに整備させて、そこでクロム・ディザスターは完成するはずだった。あるいは、それすらも更に大きな計画の一部なのかもしれないけれど……」

「七代目、か。いかにもな数字だな」

忌々しげに言った黒雪姫は、ハルユキを見ると、口許を和ませて続けた。

「つまり、六代目のハルユキ君が鐘を浄化・封印したことで、加速研究会の七年……いや、無

無限フィールドでの加速を考えればその十倍、百倍にも及ぶ大計画が崩れ去ったというわけだ。改めて、ギガGだったぞ」

「それ、アツシユさん語なんですかバドさん語なんですか」

ハルユキが苦笑しつつ応じ、黒雪姫もふふっと笑ったが、あきらはなぜか一瞬ひたりと動きを止めた。少し遅れて、仄かな微笑みを浮かべる。

どうかしましたか、とハルユキは訊こうとしたが、それより早くあきらは話し始めた。

「……災禍の鐘は、ハル君の頑張りによって消滅した。さっきも言ったけれど、鐘を復活させることは、もう研究会にもできない。でも、だからといっておとなしく諦めるような連中でもないの」

「そうか……そこで、さっきの（新生）という言葉に繋がるわけだな」

黒雪姫の呟きに、あきらはゆっくり首を縦に動かす。

「ええ。加速研究会は、七年前と同じことをもう一度繰り返そうとしている……と私は思うの。暴発的な増しひと悲しみを呼び起こして、負のエネルギーを依代となる強化外装に注ぎ込み、呪われた力を与える。いま加速世界に起きている出来事の幾つかは、その可能性を強く示唆しているような気がするの……」

「ふむ……。——あきらの分析力を疑いはしないが……しかし、そう容易く再現できる現象ではないんじゃないか？ 確か、クロム・ディザスターは幾つもの要素が複合して生まれた存在

だったはずだ。……そうだな、ハルユキ君？」

視線を向けられ、ハルユキは深く頷いた。右手の指を折りながら、災禍の體の構成要素を列挙していく。

「はい。ええっと……まず、初代、ディザスターになったメタルカラー、クロム・ファルコン。それと、彼のパートナーのサフラン・プロマサム。サフランさんを無限Eでふみ潰させた神獸級エネミー。ファルコンさんの悲しみと憎しみを受け止めて、體に変化した強化外装ザ・ディスタイニー。あと、これは必須かどうか解りませんが、サフランの心を宿した大剣スター・キヤスター……。『災禍の體』が誕生するには、少なくともこれらの要素が必要だったはずですよ……」

「やはり、全てが相当に稀少だな。メタルカラーアバターが数少ないのは言うまでもないし、固定パートナーがいるとなれば尚更だ。そして、何よりレアなのが、依代となったザ・ディスタイニーか……。何せあれは、七の神體の一つ、だからな」

黒雪姫の囁き声に、ハルユキとあきらは束の間は黙然した。

いつの間にか半分ほど減っている梅のり巻あられに手を伸ばし、一本握ると、ハルユキはそれを木皿の縁に置きながら言った。

「いま、加速世界で存在が確認されてる神體は、まず……青の王の大剣、一番星（ジ・インパルス）」

新しいあられを隣に置き、

「それと、紫の王の錫杖、二番星（ザ・テンベスト）。緑の王の大盾、三番星（ザ・ストライフ）。あと……帝城の中であつたトリリードの長刀、五番星（フ・インフィニティ）……」

そこまでので、並んだあられは四本。顔を上げ、黒雪姫とあきれを腹に見る。

「この四つだけ、ですよ。四番星（ア・ルミナリー）は行方不明のままですし……六番星（ザ・ディステイニー）はもちろん封印中で、七番星（ザ・フラクチュエーティンダ・ライト）は帝城の一番奥にあつて誰も手出しできませんし」

ハルユキが口を閉じると、黒雪姫は小さく苦笑して肩をすくめた。

「なんだか、そう列挙されると、やたら決山あるように思えるが……しかし、現状では確かに四つ、いや研究会がちょっかいを出せそうなのは三つか。五番星を持っている、帝城暮らしのトリリード君には、いくら連中でも手出しできないだろうからな」

右手を伸ばし、黒の縁に並ぶあられの一本を掴み上げ、ばくんと響く。残った二本をしばし見詰めていたあさらが、やがてこちらも肩を上下させる。

「干渉が難しいのは、残り三つも同じだと思ふの。どの王もまさか神器を手放すはずがないし、強化外装を奪い取るには相手をポイント全損させるしかない。さすがの加減研究会も、そこまでの戦術力はないはずなの」

そう言つて、あられを更に一本取る。ハルユキも残り二本を回収して同時に口に放り込み、

しばらくモグモグしてから言った。

「……えっと……金のためですけど、加減世界に、七の神器と同じくらい強い強化外装は存在しない、んですよね？」

すると、あきると黒雪姫はしばらくと二度瞬きし、黙ってかぶりを振った。

「ない、と思うの」

「ない、はずだ。……そもそも、突出した性能を持つからこそ神器と呼ばれているわけだしな。キミも縁の王の大層とたった一度にせよ撃ち合ったなら、あのバカバカしい防御力を実感しただろう？」

「え、ええ、それはもう……」

「ま、あいつの場合は本体も反則級に硬いがな……。ン、となるとその逆に、ポテンシャルのほとんどを強化外装に託して生まれた、バーストリンカーが、レベルアップ・ボーナスの全てを外装の性能アップに注ぎ込めば……ううん、それでもどうかなあ……」

黒雪姫が首を捻りつつ口にした推論に、ハルキは否応なくひとりのバーストリンカーを思いつかべた。

「たとえば、アッシュさんがこれからもバイクをひたすら育て続けたら、あのマッシーンが神器級の強化外装に……ってことですか？」

しばし顔を見合わせ、同時にぶつと噴き出してしまった。アッシュ・ローラーには申し訳ないが、

このうえミサイルや機械やロケットランチャーが追加装備されても、彼の愛車が（七の神機）に仲間入りできるとはちよつと思えない……。

と考へた時、ふと連想がもうひと繋がりしそうになり、ハルユキは眉を寄せた。だが思考がどこかに迷ひ着く前に、黒雪姫が軽く咳払いをして、あきらかに向けて言つた。

「ん……すまない、脱線した。つまるところ、仮に加速研究会が第二の（銀）誕生を企んでいても、その依代に神器は使えないということになるが……」

「ええ。私もそこは同感なの」

「それに、足りない要素は他にもあるぞ。銀の強さの本質は、歴代の装着者たちが長年かけて蓄積し、育て上げ、ついには疑似的な速を持つにまで至った負の心算の総集……ハルユキ君言うところの（銀）の強さだったはずだ」

黒雪姫の指摘に、ハルユキは思ひ出そうとしていたことを脇にどけて大きく頷いた。

「ええ。あいつはほんとに凄かつたですよ。敵の攻撃を何から何まで、心意技さえも事前置測して、視界に攻撃軌道と技の種類まで表示してくれましたもん。そのうえ、歴代『ディザスターの得意技を全部習得してて、使い放題なんですよ。（フラッシュ・プリンク）からの（レーザ・ソード）のコンボとか、もう最強な勢いで……」

両手を握り締めてまくし立てるハルユキに、黒雪姫はしばし眼を見開いてから、やれやれというふうに苦笑した。

「なんだかその言い方は、《獣》にずいぶんと刷り入れしているように聞こえるなあ」

「あ、い、いえ、そういうわけでは……」

「だがまあ、言わんとするところは伝わった。それほどまでに《獣》は強力であり、だからこそクロム・ディザスターも強かった……ということだな。つまり、研究会の奴らが寄生能力と精神支配力を持った《災禍の銀マーク2》の製造に成功したとしても、それに負の心意が善機していった、マーク1と同等の性能を発揮するようになるまでに数年……いや、依代に神託を使えないことを考えればもっと長い時間がかかるかと考えていい。連中が、今更そんな気の長い計画を立てるかな……?」

最後の問いは、あきらかに向けられたものだ。

第一期本ガ・ネビュラスの情報担当幹部だったという彼女は、すぐには答えずにセビアブラウンの瞳を意図しの夕空へと向けた。まるでそこに何かを見ているかのように腰を組め、数秒後、密やかな声で言う。

「……《巨大な負の心意の集合体》。その形容に該当するモノがもう一つ、加速世界に存在している……。そしていまこの瞬間も、刻一刻と成長を続けているの……」

「……………」

それを聞いた途端、ハルユキと黒雪姫は鋭く空気を吸い込んだ。

あきらかに指摘され、ようやく思いついたのだ。複数のバーストリンカーの、敵意や憎悪とい

ったネガティブな意志……すなわち負の心算を吸い込み、蓄積させ続けている存在。冥府の鏡に宿っていた（獣）と成長ロジックを二にする、しかしずっと黒く惨々しいモノ。

「……ISSキット、本体……」

ハルユキが抑え声で敗くと、それを受けて黒書姫があらに訴えた。

「カレン、お前は……見たのか？ 東京ミッドタウン・タワーにある、ISSキットの本体を……」

しかしそこでいったん口をつぐみ、すぐに頭を下げる。

「すまん。見られるはずはないな……。無制限ワールドのお前は、いまだ帝城東門に封印されたままなんだから……」

「謝らなくていいの、ロータス。帝城攻略は（四元素）を含むメンバー全員の意志だった。それに、結果はどうあれ、レジオンのみんなで帝城目指して歩いたあの夜のことは、今でも大切な思い出なの」

穏やかにそう応じると、あきらは語調を戻して続けた。

「……ISSキットの本体を、直接見てはいらないの。少し前に、私が調術をしたことのあるバーストリンカーが、キットを装着してしまって……。その子が、キットの性能や、強化・増殖の仕組みについて情報を送ってくれた。キットが中央集権的構造になっていることは、そこから推測したの」

「……あの、その人は、今でも……」

——大丈夫なんですか？ と視線で訊ねたハルユキに、あきらはそつとかぶりを振った。

「三日前から、連絡が途絶えたまま。多分、ISSキットの精神支配力が、私との関係性を上回ってしまったの」

相変ぬらず声も表情も抑制されているが、それでも眼鏡の奥の瞳にちらりと哀しげな色が浮かんだのをハルユキは見た。

当然だろう。加速世界にたまたま一人の用心棒、《唯一の二》アタア・カレントにとっては、依頼を受け、タツタを組み、金損の危機から救った全ての新米がある意味では自分の《子》のようなものなのだ。

『三日……。三日くらいなら、もしかしたら、タイム・ベルの必殺技を使えば……』

ハルユキは無意識のうちにそう口にしていた。全頭にあつたのはもちろん、世田谷エリアのレギオン《フチ・バケ》のことだ。特異なチココレート装甲を持つシヨコラ・バベツターと、彼女の《親》と《子》のたった三人で構成されるレギオンだったが、シヨコラ以外の二人がISSキットに汚染されてしまった。

しかし、シヨコラの必死の呼びかけも、タイム・ベルの時間進行能力《シトロンのコール・モード》によって、二人からキットを分離し、封印カード状態にまで還元することができた。同じことが、アタア・カレントの依頼人に対しても、原理的には可能はずだ。

あきらは「瞬（ひし）ハルユキを見詰めたが、すぐにもう一度首を横に振った。

「ありがと。でも、状況はもう、端（は）末（まつ）ひとつひとつへの対処では解決できないところまできているの。目撃情報（めくげきじょうほう）を総合すると、キット装束者は毎日十人以上も増え続けている。たぶん、あるしきい値（しきい値）を超えれば、感染爆発（かんせんばくはつ）みたいになると思うの……」

「……そして、ISSキット増殖の目的は、膨大な量の負の心意を集めて、災害の錨（いかり）マーク2に注入すること……だと、あきらは思っているわけか……？」

深刻な表情の黒宮姫に、あきらは軽くおとがいを引く。

「それが目的の全部かどうかは解らない。でも、使い道のひとつであることは間違いないと思うの」

「ふむ。その理由は？」

「その理由は、私が今日、杉並エリアに……サツチやハル君の前に現れた理由でもあるの」
 思いがけない言葉に、ハルユキと黒宮姫は同時に軽く鼻を嗅い込み、続く説明を待った。

「……加害世界に、異は不明でレジオンにも未加入、にもかかわらず規格外に強い新人メタルカラーが現れた。一週間くらい前にそんな噂（うわさ）を聞いてから、私はずっと情報を集めていたの。何度かは、直接ギャラリーもした……観戦用ダミーアバターを使って、だけど」

「……ウルフラム・サーベラス……？」

ハルユキの擦れ声に、あきらは軽く頷く。

「ええ。彼は……その登場の仕方や言談外の強さ、メタルカラーであること、そして全体的な雰囲気までも、私にひとりの……速い昔にいかなくなってしまったバーストリンカーを思い起こさせるの。二代目クロム・ディザスター、《マダネシウム・ドレイク》を……」

「……………」

その名前は、昨日の昼休みに、黒雪姫の口からも聞いたばかりだ。加速世界の黎明期に出現し、多くの人望を集め、しかし突然《燈》に吞み込まれて二代目のディザスターとなり、多くの血を流した果てに討伐された――。

「……ドレイクを直接知っていたのか、カレン？」

黒雪姫の隣に、あきらはこくりと頷く。

「対戦したことも、話をしたことも何度もあるの。私の力が本、彼の力が炎だったせいもあって、お互いをライバル視していたから。ネガ・ネビュラスに入る前の話、だけれど」

顔を上げ、再び窓の外を見やると、あきらは速い昔を覗き込むような眼をして続けた。

「……私は《翼》とあまり長い時間を過ごせなかったので、ドレイクに教わったことも少なくない。自分の力の使い方や、対戦のテクニク、バーストリンカーとしての覚悟……。だから、ライバルであり、友達でもあった、と私は思ってる。――でも、ドレイクはある時突然姿を消し、戻ってきた時はもう違う誰かになっていた。翼の鎧に身を包んで、通常対戦でも、無制限フィールドでも、たくさんのバーストリンカーを手に掛けた……。以前の何倍もの威力にな

った後で、私を焼く私った時も、躊躇いさえしなかったの……」

「……………カレン、さん…………」

思わず名前を叫んだハルニキを見て、あきらは大丈夫というふうには微笑んでみせた。

「もう、ずっとずっと昔のこと。…………でもこの前の日曜、初めてウルフラム・サーベラスを見た時、私は一瞬、ドレイクと見間違えたの。サイズはドレイクのほうがずっと大きいし、色合いも違うけれど…………でも全体としてはかなり似てる。外見だけじゃなくて、雰囲気も。強さも、出自が不明なところも。だから、私は推測…………いえ、直感したの。また、同じことが起きるんじゃないか、って…………」

「同じこと…………とはつまり、クロム・ディザスターの出現、だな？」

「ええ。もちろん、《鎧》がハル君の手で封印されたことは知ってる。でも…………貴、ドレイクがディザスターになった時も、そうだったの。初代が討伐されて、加速世界の住人はみんな、もう二度とあの恐ろしいバーサーカーは現れないと信じて疑わなかった。なのに…………」

「…………《鎧》は現れ、再び大量の血が流された…………」

無言の密やかな声に、あきらは深く頷いた。

「これは仮定だけど、ウルフラム・サーベラスがドレイクと同じく《鎧を装備する者》の役割なら、加速世界のどこかに《鎧を生み出す者》がいるはず。私はそう考えて、今週のサーベラスの対戦をできる限りギョウリーしていたの。残念ながらタイミングが合わない

くて、一昨日と昨日のハル君との対戦は續けられなかったけど……」

「そ、そうだったんですか」

ハルユキが首を縮めると、かつてのタッグ・パートナーは仄かに微笑んだ。

「今日こそ観戦できるかと思っていたけど、ハル君が現れなかったの。でもハル君を待っていたのはサーベラスも同じだったみたいで、今日は自分からの対戦は一度もしないで、そのうちマッティングリストからも消えてしまった。それで、もしかしたら自分から本ガ・ネビュラスの領土に出向くつもりかもって思ってた……私も、速ったけど中野から移送に電車で移動したの。高円寺駅で降りて、駅のベンチでグローパーと接続して、念のためにバトルロイヤル待ち受けもオンにしたら……」

「サーベラスが開始したバトルステージに引き込まれた、というわけか」

「ええ。でももちろん対戦には参加しないで、サーベラスとハル君の対戦だけ観せて貰って、何も起きなければそのまま帰ろうと思っていたの。——でも、まさか（あいつ）がステージに入り込んで、しかも対戦に介入するなんて……」

「……（バトルの分析者）……アルゴン・アレイ、ですね」

訊ねたハルユキに、あきらは珍しくキレのいい動きで首肯してみせた。

「情報収集という本来の目的のためには、姿を隠したままあいつの行動を観察するべきだったけど……あいつがハル君やアッシュ・ローラーを好き勝手に攻撃するのを見てたら腹が立って

仕方なくて、つい割り込んでやったの。そのわりに、あんまり助けにはなれなかったけど……」

「い……いえ、そんなことはないです!!」

勢い込んで叫んでから、ハルユキはあきらに向かつて身を乗り出した。

「アルゴン・アレイのレーザー攻撃に手も足も出なくて、泣きたいくらい悔しくて、なのに立てなくて……。そんな時、ビルの上のカレンさんを見て、僕、とっても感動しました。まだ記憶は戻ってなかったはずなのに、凄く力が湧いてきて……カレンさんがいてくれたから、僕あそこからまた戦えたんです」

無我夢中でそう言い募るハルユキに、あきらはこれまでもっとも優しい笑みを滲ませながら言った。

「……シルバー・クロウ、あなたは私の想像よりもずっと、ずっと強くなっていたの。護衛したことのあるバーストリンカーの、立派に成長した姿を見ることが、私はなにより嬉しい。予定外の成り行きだったけど、今日こうしてあなたに再会できて……本当によかったと思ってる……」

じつと見つめ合う二人の間を、黒書館の三点バースト映私（ミカド）が通過した。

「あー、ハルユキ君、ピンチに手助けしてやれなくてほんつとうにすまなかった。何せ、こちららギヤラリーだったものでない。それにあきら、なんだか私との再会はおマケのように聞こえるか？」

ハルユキは当然びくーんと身を引いたが、あきらは黒雪姫に視線を移すと、まるで甘えん坊の妹を見る姉のような表情でふふつと笑った。

「サツチ、あなたは言とまったく変わってないの」

「そ……それは成長がないという意味か？」

「賽め言葉なの、もちろん。私が剣を抜けたレギオンマスターは、何も変わらずに私を待っていていた。それが嬉しいはずがないの」

一瞬口を閉じると、あきらは表情と姿勢と声音を潔と正し――。

「これもさつと、永遠に渡る水の導き。サツチ……いえ、黒の王ブラック・ロータス。私アタア・カレントは、今日この瞬間より、ネガ・ネビュラスに復帰したいと思います。許して頂きますか？」

いきなりの宣言に、黒雪姫は虚を突かれたように両眼を瞬かせた。

だが、すぐに黒黒の瞳をさらに輝かせ、ソファから勢いよく立ち上がった。ガラステーブルを回り込み、あきらの前まで移動すると、まっすぐ右手を差し出す。

あきらがその手を取って立つと、黒雪姫はほぼ同じ高さにあるセピアブラウンの瞳を間近から見詰め、囁いた。

「もちろん。もちろんだとも。……………おかえり、カレン」

「……………ただいま、ロータス」

そして二人は、同時に一歩ずつ近づくと、互いの体にしっかりと両腕を回した。

二ヶ月間、新宿駅サザンテラスで有崎楓子と抱き合った時のような涙も喚咽もなかったが、しかしハルユキには、二人の心が触れ合い、共感し、静寂いっばいに温かな光の波を上げるさまがはつきりと感じられた。

二〇四七年六月二十七日、旧レギオンの崩壊から、二年と十ヶ月後。

《四元素》の一人、《水》のアタア・カレントは、《風》のスカイ・レイカー、《火》のアーダー・メイダンに続いて、ネガ・ネビュラスへの復讐を果たした。



翌々日——六月二十九日、土曜日、午後三時。

ハルユキは、梅郷中学校第二校舎裏に建つ飼育小屋の中にいた。

水を盛いた床を、奥からデツキブラシで丁寧に擦っていく。普校は耐水コーティングシートで覆っているの、ばっと見ではさして汚れていないが、小屋の主の健康を保つためにも週に一度は磨き掃除をすることになっている。

その主ことアフリカオオコノハズタのホウは、定位置である左の止まり木の枝で、時々首をくるくる動かしている。別にハルユキの作業を監視しているわけではなく、学校全体に満ちる浮き立った安否感を彼も察知しているのだらう。なにせ明日の日曜は、ついに梅郷中の文化祭当日なのだ。

体育館のステージでは吹奏楽部が最後の通し練習中、前庭では文化祭ダート制作班の殺気立った声が響き、校舎二棟を隔てたグラウンドからも創作ダンスを練習するかけ声が遠く届いてくる。

ハルユキには二度目の文化祭だが、小学校では味わえなかった（生徒主導のお祭り）感覚は無いではない。——というわりには今年もクラス展示担当という地味な班に参加してしまい、

（二十年前の高円寺）という堅めなテーマの展示は、一時間前に早くも準備が終了している。残る作業は明日の朝、ハルユキ担当のA氏表示ファイルを学内ローカルネットにアップロード、起動するだけだ。

チユリの陸上部はクレープの屋台を出し、タタムの側道部は仮装ダンスを披露することとで、二人ともまだ準備中だ。四時過ぎには終了する予定で、夕方の旗本戦（もちろん文化祭の出し物ではなく加藤世界の）には間に合うらしいが、万が一の場合は二人を抜いた四人で杉並を訪問しなくてはならない。

……………いや。

四人ではなく、五人だ。一昨日の本曜日、ネガ・ネビュラスは待望の新レギオンメンバーを迎え、総勢が七人になったのだから。

そう考えると同時に、温かいものが胸に広がりがけたが、しかしそれはすぐにどこか奥へと引っ込んでしまった。昨日の金曜の放課後に行った、いや、行われなかった対戦のことを連想したせいだ。

ハルユキは昨日、ホウの餌やりが終わるやいなや学校を飛び出し、一人で中野第二戦域を目指した。もちろん、ウルフラム・サーベラスと対戦するためだ。邪魔の入らない通常対戦で、今度こそサーベラスと心ゆくまで拳を交え、もう一度呼びかけるつもりだった。一緒に来い、と。仲間……友達になつてくれ、と。

だが――。この一週間、毎日のように中二エリアで対戦していたはずのサーベラスが、なぜか昨日は何時まで待っても現れなかったのだ。

代わりに、様子を見に来た黒書殿と楓子に捕獲され、そのまま二人が有田家に泊まっていってしまうという予想外の展開になりそれはもちろん事しかつたのだが、一夜明ければどうしても残念な気持ちが残ってしまう。いや、残念というよりも不安感だろうか。もしかしたら、サーベラスはもう現れないのではないかと……現れた時には、何か決定的な変化が訪れてしまっているのではないか、という。

そんな複雑な思考を抱えたまま、デッキブラシをこしこし動かしている――。

【UIV どちらなのですか？】

という板色の文字列が、視界に表示されたままのアドホック・チャット窓に流れた。

顔を上げると、剣育小屋の入り口で、デッキブラシを右手に持った年下の少女が笑顔で軽く傾けていた。書れてもいいように着ている白い体操服の胸には、梅郷中のものではない校章が入っている。

「ど……どっちって、何が？」

ハルユキが手を止めてそう訊き返すと、某列校の校乃木学園初等部の四年生であると同時に梅郷中剣育委員会の（超委員長）でもある西壁玄龍は、ハルユキを見上げながら空中で左手の指を走らせた。

「UIV 有田さん、なんだか嬉しいのが半分、寂しいのが半分みたいなお顔をしていらっしゃるのです」

チャット窓に、口で喋るよりも速いスピードで二行目が表示される。

ハルユキは少し考え、こくりと頷いた。

「うん、そうかも……。昨日、ホウの世話が終わってから中野に行ったんだけど、サーベラスと対戦できなかったんだ。それが寂しい……っていうか、残念な顔の理由かな」

「UIV そうでしたか……」

顔の顔から微笑が消えたので、ハルユキは慌てて付け加える。

「まあ、あいつだって中学生なら、色々リアルな事情もあるだろうしね。七月になったらもう期末テストも始まるし」

という台詞で自分にダメージを与えてしまい、軽くよろめいていると、顔は再度にこりと口許を綻ばせた。

「UIV きっと、すぐに会えるのです。それでは、嬉しいお顔の理由は何なのですか？」

「それは……」

言いかけて、ばくんと口を開ける。

一昨日の放課後に起きた一連の出来事——サーベラスとの突発的バトルロイヤル、アルゴン・アレイの乱入、そして《嬉しい顔の理由》であるところのアクア・カレントの登場とレギオン

梅郷については、今日の領土戦前に全メンバーに報告することになっている。昨日有田家に泊まっていた楓子さえまだ知らないのだ。

「……えーと、もうちょっとだけ内緒」

ハルユキの答に、遥はしばらくりと眼を見開いてから、可愛らしく頬を赤らませた。

『U—V 飼育委員会超委員長の私にも、ですか？』

「そ、その役職、井岡さんが勝手につけたやつだし」

そう言った途端、扉内にぶぶーっという不正解ブザー音が響く。

『U—V サッちゃんが委員名簿を改ざん……ではなく修正して、私の役職を（学校間交流生）兼（超委員長）に変更してくれたのです。だからもう公式の役職です！』

「え、ええー？」

——またあの人は、面白がつてイイカゲンなことを。

と思いつつローカルネットの飼育委員会専用ページを開くと、確かに委員長であるハルユキの上に、超委員長・四谷青蘭の名が煌然と輝いている。えっへん、とばかりに体模様の胸を張る顔を見つ、しばし考えてから止まり木の上のコノハズタに声を掛ける。

「おーい、ホウ。上司にも言えないことはあるよなー？」

すると、梅郷中飼育委員会の頂点に君臨する猛禽類は、かなりどうでもよさそうな動きながら、羽根を広げて二、三回ばさばささせた。それを肯定と解釈し、謎に向き直る。

「はら、ホウもあ言ってるし」

【U・V】 ホウさんを利用するのはずるいのです」

先ほどより五割増しの膨れっ面を作ってから、語は無声ながらも大きく破顔した。右手のブラシをぐいっと掲げ、左手だけで器用なタイプを続ける。

【U・V】 それでは、お掃除のあとで説明して頂くのです。さあ、終わらせてしまいましょう」

床のブラシ掛けとモップでの拭き上げ、シートの敷き直しと水浴びバットの洗浄を終えたところで、時刻は三時三十分を回った。語に《委員長》の称号を与えた井岡玲那は、所属するB組のクラス展示の準備が遅れまくりで大変なことになっているらしく、委員会活動は欠席。それでも最後に直接附りに来てくれただけ有り難いと言うべきで、もう一人の委員であるA組の浜島という男子生徒は初日以来まったく姿を現していない。

ゆえに、二人だけで委員会活動日誌に署名するとファイルをアップロードし、これで本日の活動は終了となった。

【U・V】 それでは、着替えてきますので少々お待ち下さい」

語が手提げバッグ片手にべこりと一礼する。いつまでも第二校舎一階トイレが更衣室代わりでは申し説ないが、ちゃんとした女子更衣室があるのは体育館と第一校舎だけで、どちらも裏

庭からはかなり遠い。

「こゝ、こゆっくう」

庭を見送り、ハルユキは樹下のベンチに腰掛けるとふうつとひと息ついた。

飼育委員を拜命してから、今日で早くも十二日が経過する。小屋の掃除やホウの体重測定にも慣れ、直接の餌やりこそまだできないものの、委員会の活動がすっかり日常の一部となった感はある。

最初に何年分もの腐った落ち葉が積もった小屋を見た時は、これを綺麗にするなんて到底できないと思つたし、ホウを見た時だってこんなに大きな鳥の世話なんて絶対無理だ、と思つた。そもそもハルユキにはいかなる種類の課外活動をするつもりもなく、委員に選ばれた経緯だつてオツチヨコチヨイゆえの意図せざる立候補だったのだ。

学校ではひたすら息を殺し、首を縮め、目立たないように、目立たないように。それが唯一にして絶対のルールのはずだった。黒宮姫と出会い、驚異の思考加速プログラム（フレイン・バースト）を与えられてからも、現実世界の自分は何かとつ変わらぬ……変われない、そう思っていた。

いや、実際のところは何か変わったわけでもないのだろう。相変わらずよく知らない生徒の視線には怯えてしまふし、授業中に指名されただけで額に汗が滲む。この飼育委員会だって、同じバーストリンカーでありレギオンメンバーでもある識が一緒だからこそ続けていられると

いう面は否定できない。

数日前、試合形式のバスケットボールで頑張りがすぎたハルユキがぶっ倒れて保健室に運ばれた時、自分の授業をエスケープしてまで付き添ってくれた黒書姫は言っていた。「現実世界でも、絶対的な境界と考える壁を、イメージ力の助けを借りて乗り越えることは可能だ」と。

ハルユキにとっての絶対的限界とは、突き詰めればこの自分そのものだ。チビで、デブで、勉強もスポーツもできなくて、自分を慮める不良たちに抗う勇氣もない。

そんなマイナスの自己認識が、自分自身を小さな檻に閉じ込めているんだ。と、黒書姫なら言うだろう。

だが、現実の自分に対してプラスのイメージを持ちたくとも、その根拠となり得る何かが見当たらないのだ。剣育小屋の排除や、バスケの試合でちよつとばかり頑張れたからといって、それは他の生徒なら誰だってできることだ。マイナス100がマイナス95になったくらいの話ではない。

去年の秋にバーストリンカーになって以来、ハルユキは加速世界だけでなく、現実世界でも多くの出会いを経験した。総委員長こと四壁宮論／アーダー・メイデンもその一人だし、倉崎楓子／スカイ・レイカー、日下部輪／アッシュ・ローラー、水見あきら／アタア・カレント、そしてもちろん黒書姫／ブラッタ・ロータス。彼女たちはデュエルアバターだけでなく、生身のハルユキにも手を触れ、励まし、背中を押してくれた。あなたにはあなただけの存在価値が

ある、と何處も何處も言ってくれた。

そんな言葉を疑うつもりは毛頭ない。みんなの期待に応えるために、これからも全力で頑張ろうと思う。

——でも。

もし、僕がバーストランカー・シルバー・クロウでなくなったら。加減世界の記憶を丸ごと失って、もとの何も持っていない有田春雪に戻ってしまったら。

そうになったら、あの時の、あの人たちのように。照明を落とした深夜のリビングルームで、僕が聞いているとも知らずに、抑えた、しかし失った声で言い合いをしていたあの人たちみたいに。僕をいらないと言った、父さんと母さんみたいに……。

不意に、ばさばさっ！ という羽音が聞こえ、ハルユキは顔を上げた。左側にある飼育小屋を見ると、金網の向こうで、ホウが灰白色の面翼をいっぱい広げ、赤金色のまん丸い瞳でハルユキを凝視していた。

体長二十数センチとフクロウ目では小柄な種だが、羽根を広げると実に堂々たるシルエツトだ。翼の形が、衝でよく見るカラスやムタドリとはまったく違う。獲物を捕らえるための脚もがっしりとしていて、小さくても猛禽類なのだと改めて思わせられる。

だが、その脚の片方には、種妻のような形のむこい傷痕が残る。前の飼い主が、個体識別用マイタロチップを挟み取った痕だ。何かの事情で邪魔になったホウを捨てたにあたって、改正

動物愛護法による処罰を逃れるために。

「……………お前も、いらないって、言われたんだったな……………」

ハルユキが呟くと、コノヘズクはゆっくり両翼を畳み、くるっと首を回した。まるで、それがどうかしたのか、と言わんばかりに。

捨てられたホウは、松乃木学園の敷地内で誰に保護されたのだが、傷からの出血により瀕死状態だったらしい。命を取り留めてからも、飼育部の廃部で住処を失い、受け入れ先が見つからなければ結局殺処分は免れなかった。だから、ホウが今こうして生きているのは、闇の懸命の努力があったればこそ、ということになる。

しかし、小屋の中のホウには、悔めきや卑屈さなど欠片もない。その姿はどこまでも気高く、美しい。もちろんハルユキが勝手にそう感じているだけなのだろうが、少なくとも彼は、誰かに必要とされるとかされないとか、そんなことは気にしているまい。自分の世界で、自分の生をシンプルに生きている。

「……………かいこいいな、お前は」

呟き、ベンチから立つと、ハルユキは両手を思い切り上に突き出して伸びをした。

自分に対するプラスのイメージの根拠を、誰かの視線や言葉に求めることがそもそも間違いだ。たとえ砂粒のように小さくても、自分の中にそれを見つけ、少しずつ積み重ねるしかない。幸い、日々には糧は山積みだ。明日の文化祭でクラス展示をちゃんと稼働させなくてはならな

いし、その後に襲い来るテストも乗り切らねばならないし——十五分後には、今週の領土戦^{テリトリバトル}だってある。一つ一つクリアした先に、必ず何かが見つかるはずだ。

——そう、これまでだって、きつとそうしてきたんだ。

背後から軽い足音が聞こえたので振り向くと、純白のワンピース型制服に着替えた麗と楓^{アキラ}が合った。四つも年下の少女は、深い寂知^{アノチ}を湛えた大きな両眼でハルユキの顔を正視すると、そこに何かを見出したかのようににこりと微笑んだ。

【U・V お掃除お疲れ様でした。領土戦もがんばりましょうー】

振られた文字列は簡潔だったが、ハルユキの唇させぬ通いや畏れを察した上で、あえてそう言ってくれたのだと思えた。頷くと、ハルユキもお腹に力を入れて答えた。

「うん！ 頑張ろうー！」

オンライン対戦格闘ゲーム、ブレイン・バーストの《領土戦争》——つまりレギオンとレギオンが戦域の支配権を争って戦うチームバトルは、毎週土曜日の午後四時に開催される。

攻撃側は、事前にB・Bコンソールから攻撃チームメンバーを編成・登録し、狙いのエリア内に移動——もちろん現実世界で——して待機。四時を回ってからリーダーが加速し、通常対戦用のマッチングリストを開くと、トップに支配レギオンの名前が出現しているので、それを流んでデュエルを挑む。

防衛側も、事前に防衛チームを登録し、領土エリア内で待機するのは一掃だ。しかし支配レジオンのアドバンテージで、隣接する領土ならば、生身が別領土に存在しても防衛に出撃できる。つまり、杉並第二戦域に存在する桜井中学校で待機していれば、北の第一戦域、西の第三戦域の防衛も可能——ということだ。

もともと、当然ながらグローバルネットへの接続は必須となる。学校内で生徒のグローバル接続が許されているのは生徒会室の据え置きマシンのみ、それも放課後に限られているが、しかしそこは期試験のこと、前者の制限はこっそり回避済みだ。ハルユキたちネガ・ネビュラスメンバーには生徒会専用機へのアクセス権が与えられていて、学内ローカルネット経由で専用機を踏み台にすることで、グローバルネットに接続できる。

ゆえにハルユキと議は、飼育小部屋のパベンチに並んで座り、そこから領土戦に参加することにした。一団の戦争は通常対戦と同じく最大三十分——現実時間で一・八秒だが、攻め込んでくるチームが多いとそのぶん待機時間も長くなるので、多少の準備は必要となる。事前に購買で仕入れておいたバタグジュースを口に手流すと、彼女も手揚げバツダから小さな紙袋入りの花林糖を取り出してハルユキにくれた。

「あ、ありがとう」

札を言って受け取り、小袋に印刷してある『五色かりんとう』の文字を見た途端、再び胸に燃しい気持ちが増え上がってきて、自然と顔が緩んだ。

「UIV かりんとう、そんなにお好きなのですか？」

不思議そうな顔で諺がそうタイプするので、僕でてこくこく頷く。

「う、うん、大好物なんだ。ありがとう、四葉宮さん」

好きなのは本当だが、笑顔の理由は、かりんとうと少し似た語感のバーストリンカーを連想したからだ。しかしせっかくここまで内緒にしてきたのだから、今それを悟られるわけにはいかない。表情を引き締めて、仮想デスタクトシブの時計を確認する。午後三時五十五分。

「それじゃ、そろそろミーティングが始まるから、生徒会サーバーに接続しよう」

ハルユキはそう言って、臨と同時に指を動かした。少し深いところに置いているアイコンをタップすると、個人認証が行われ、ネットワーク追加ダイアログが表示される。これでハルユキと諺は、座敷中ローカルネットの他に、黒雪姫が生徒会専用機内に構築した領土戦準備用クローズドネットにも接続したわけだ。

そのまま待っていると、三時五十七分になると同時に耳慣れた加速音が響き、視界にデュエル開始を告げる文字列があかあかと燃え上がった。しかしもちろん、領土戦の本音ではない。レギオンマスタリーの黒雪姫とハルユキによる通算対戦を利用して、防衛前のミーティングを行うのだ。

白銀のデュエルアバター、シルバー・クロウが（月光）ステージの白い地面を踏むと、少し離れた場所に紺色と生成りの二色をまとう巫女型アバターが降り立った。諺が操るアーダー・

メイデンだ。現実世界では同じベンチに座っていた二人だが、クロウは対戦者、メイデンは観戦者なので、初期出現位置は自動的に引き離される。

原則として、観戦者は対戦者の十メートル以内には近寄れないのだが、親子もしくはレゾナメンバーならばその制限は回避できる。ハルユキは誰か歩み寄ってくるのを待つ間に、近くにそびえる楯のように細い針葉樹を二、三本破壊して必殺技グーじを少し貯めた。ミーティンダはグラウンドで行われるので、裏庭から歩いて移動するのは少しばかり面倒くさい。

巫女アバターは、現実世界では飼育小屋だった超小型の神殿の前で立ち止まり、中を覗き込んで言った。

「やっぱり、ホウさんはこっちにはいないんですね」

「そ、そりゃ、ブレイン・バーストが再現するのは地形だけだし……」

とハルユキが答えると、向き直ったメイデンの赤いアイレンズがきらりと輝く。

「以前、現実世界の動物園にいる衆さんが、原始林ステージですっごく大きなマンモスさんになったことがある……という噂を聞いたのです」

「へええー！ それはちょっと見てみたいかも……じゃあ、今度、上野の動物園で実験してみようか」

「それは、デートのお誘いですか？」

「で……デ？ い、いや、その、そういうアレではなく……純粋にバーストランカーとして

の戦術的見地から……」

ハルユキがしどろもどろになっていると、メイデンが楽しそうにくすぐすと笑った。現実世界の闇はほぼ無音で微笑みだけなので、彼女の笑い声が聞けるのはこちら側だけだ。それすら、めったにあることではないが。

思わずハルユキも一緒になって笑いかけたその時、どこか遠くですずーんと重々しい崩壊音が轟き、同時に視界右上に表示されたブラック・ロータスの必殺技「グー」が急増した。黒雲姫が何か巨大オブジェクトを破壊したのだ。理由はもちろん、ハルユキの集合が遅れているからだろう。

びくっと首を縮めてから、慌てて背中中の翼を広げる。

「じゃ、じゃあ僕、先にグラウンドに行ってるから……」

翼を抱えて飛べればいいのだが、残念ながらギョウリーのメイデンを暴動させることはできない。手を振る闇を表面に残し、急角度で離陸する。

第二校舎と中庭、第一校舎をひと息に飛び越すと、青白い月光に照らされるグラウンド中央に顔身のシルエットが見えた。二つあるはずの大型照明灯の一つが、根元から断ち切られて消滅している。再び背中をブルリと震わせてから、着地と同時に深々と最敬礼。

「ど、ども、遅くなりました、すみません!!」

「いや、謝る必要はないさ。レギオンメンバー同士の仲がいいのは喜ばしいことだからな」

と応じる。漆黒のデュエルアバター、黒の主ブラック・ロータスの声は大変にとんがっている。よもやデート云々の会話が開こえたはずはないが、こういう時の黒雪姫の超感覚には加速世界の法則も適用しない。

更なる言い訳を試みるべきか否かを迷っていると、幸いなことに、周囲で立て続けにアバター出現サウンドが響いた。自動追跡機能によって、アーダー・メイデンとシアン・バイル、そしてライム・ベルがテレポートしてきたのだ。

「こんにちは、サッちゃん、チユリさん、黛さん」

謡が頭を下げると、チユリとタタムは挨拶もそこそこに、揃って顔の前で両手を合わせた。

「黒雪センパイ、ういちやん、ごめんなさいー！」

「すみませんマスター、ぼくとチーちゃん、まだ文化祭の準備が終わらなくて……」

予想していたことではあるが、それを聞いたハルユキはつい叫んでしまった。

「え、ええー!? いやあチユタクは領土戦不参加だ」

「だから、そのソエダクみたいな呼び方やめなさいってのー! しかたないでしょ、あたし今、舞台でクレープの試作してるんだもん。このミーティングは時間決まってるから加速する準備できるけど、領土戦はいつ始まるかわかんないし……」

とライム・ベルが両手を腰に当てて言うし、シアン・バイルも右手の杭打ち機で頭をかきながら続けた。

「ぼくもダンスの練習中で、しばらく抜けられそうもないんだ。ハル、今日はなんとかぼくら抜きで頑張ってみてくれないかい」

「そ、そりやもちろん頑張りはするけどさ……」

と答えたその時、左方で更なる出現音。ナレボートしてきたのは、銀色の車椅子に腰掛ける女性型アバターだった。革製な股体を白いワンピースに包み、同色の銅広靴の下からブルースターに輝く髪を長く垂らしている。レギオンのサブマスターを務めるスカイ・レイカー——倉崎楓子だ。

ヘルメス・コードでのレースを終て、長いあいだ寝われていた両脚を取り戻したレイカーは、もはや車椅子型強化外装を使う必要はない。しかし実のところ、彼女にとってあの車椅子は、ハンディキャップではなく機動力を数倍にも引き上げる強力な武器だ。地面が平坦かつ硬質なステージでないと性能を発揮できないが、もちろんその場合は下りればよい。

というわけで、こと領土戦では車椅子に乗って出撃するのを常としている楓子は、月光ステージの地面に敷き詰められたタイルの上を滑るように近づくと、軽く合流してからにこやかに言った。

「大丈夫ですよ、楓さん。チーコと楓さんが不参加なら今週は二人チーム二つで防衛に当たることになりますが、楓さんにはバートナーを自由に選ばせてあげますから」

「あ、そ、それはどうも……って、ええええ」

思わず後頭部に手をあててお礼を言いかけてから、改めてのけぞる。楓子が言ったのはつまり、彼女と諭、そして黒言姫の中から、チームを組む相手を選択せよということだ。もちろん三人とも実力は折紙付きだが、この状況で「誰でもOKです」などという返事は許されそうもない。

にこにこ顔のスカイ・レイカー、どこか真剣……あるいは必死な気配のアーダー・メイデン（理由はハルユキの演技次第では楓子とのタッグになってしまうからだろう）、そして両眼を冷たく光らせるブラッタ・ロータスをぐるぐる順番に見回してしようハルユキだったが、そこでようやく気が付いた。

タカムとチユリが不参加でも、防衛チームの合計人数は四ではなく五だ。なぜなら今日から、ネガ・ネビュラスには新たなメンバーが加わる、いや増えるからだ。そしてそれこそが、ハルユキが闇に内緒にし続けていた（隠しきの理由）だ。

ふうっと息を吐いてから、ハルユキはロータスに向かって軽く微笑かけた。

黒言姫も、それまでの不機嫌モードを解除して仄かな微笑の気配を漂ませた。右手の剣をゆるやかに持ち上げ、まず夜空の真ん中に輝く巨大な満月を示してから、ゆっくりと動かしている。ドラウンドを横切り、第一校舎を登った切っ先が、屋上の一点を示す。

メンバー全員の視線が集中したその場所に、いつの間にか、七人目がひっそりと立っていた。青白い月光を受けて涼しげに燃めく、流水のデュエルアバター――。

「えっ……………」

楓子が息を呑み、

「あ……あっ！」

鐘が細い叫び声を漏らした。チユリとタタムも驚き顔で固まっている。そしてハルユキは、ゴードルの下で満面の笑みを浮かべていた。

六人が無言で見詰めるなか、流水アバターは校舎の壁面を伝ってドラウンドに降り立つと、一歩一歩を大切に踏み締めるかのような動きで歩み寄ってきた。近づくとつれ、さらさらという水音が耳に届く。空中に舞う微細な飛沫が、月明かりを反射して銀色に輝く。

楓子と鐘が吸い寄せられるように数歩進み出ると、流水アバターは二人の手前で足を止めた。しばし沈黙を続けてから、水音に乘せて囁く。

「……ただいまなの、レイカー、メイデン」

その声を聞いても、楓子たちはすぐには反応しなかった。いや、できなかったのだらう。何秒かが経過してから、揃って幽き声を絞り出した。

「カレン……なの……………」

「レンねえ、ですか……………」

《西元憲》の一人、《水》のアタア・カレントは、その問いかけに確かな領きを返した。続いて両手を差し伸べると、手の甲に繋がる水の輪が左右に広がり、空中に大きなハートの形を描

いた。

楓子と隣が同時に飛び出し、同じく広げた両手でカレント——あきらの体を包み込んだ。

固く抱き合う三人の姿を、ハルユキが感無量で見詰めていると、すぐ隣にいたテュリが小声で訊いてきた。

「ねえ、ハル……あの人ももしかして、昔うちの幹部だった……」

「そうさ。アタア・カレントさんだよ。ついに、ネガ・ネビュラスに戻ってきてくれたんだ」「って、ちょっとハル、あんた知ってたの？ 知ってて内緒にしたのの？」

強化外装（タワイアー・チャイム）の角ッコで脳髓をぐりぐりされ、慌てて言い訳する。

「し、知ってたって言っても、カレンさんと会ったのはたった二日前なんだよ！ それに、こういうシーンってサブライズのほうが盛り上がるし」

「だからって、あたしたちにまで黙ってることないでしょ！ ねえタツくん……—あれ、どうしたの、タツくん？」

テュリと一緒に振り向くと、そこに立つシアン・バイルは、なぜか腕組みしながら頭を右に左に捻りまくっていた。

「……………アタア・カレント……………（四元流）の一人……………確かにそう聞いていたけど、でも彼女……用心棒（唯一の）で……………ばくはどうして、前に名前を聞いた時にそれを……………」

「お、おい、大丈夫かタタ……………はっ！ そつ、そうか、お前も記憶を——」

フェイスマスクに並ぶスリットから湯気が出そうなほど考え込んでいるタタムから視線を外し、ハルユキは感動の再会に授けられているあきらかに向けて叫んだ。

「あ、あの、お取り込み中すみませんカレンさん！ た、タタにもアレを、メモリ・フリーをお願いしますす!!」

去年の秋、ポイント全損しかけたハルユキは、神保町エリアであきらかとタッグを組んで戦いからくも危機を脱した。しかしその後、記憶を封印するという驚異の心意技（記憶滴下）によってアクア・カレントと出会ったことを強制的に忘却させられ、一昨日その封印を解除して貰うまでまったく思い出せなかったのだが——なんと同じ処置を、神保町に同行していたタタムも施されていたらしい。

戦場をバトルロイヤル・モードに切り替えた上で、ハルユキ同様に記憶を戻して貰ったタタムは、何度か頭を小刻みに振ってからようやく得心がいったように頷いた。

「なるほど……。『ア・ワン』、用心棒なんというリスカの高い役割を長く続けているのに、あなたがリアル割れと無縁な理由がようやく解りました」

タタムの言葉に、あきらは軽く肩をすくめた。

「安全の担保は、ふつうはリアルの顔写真だけで充分なの。いままで記憶封印まで行ったのは、最初から悪意を持ってコンタクトしてきたバーストリンカー数名と……」

一度口を閉じてから、微笑とともに付け加える。

「……新生木ガ・ネビュラスのメンバーであるあなたたちだけ」

「まったく、300ポイント貯まっただけで速攻レベルアップしちゃうとか、いかにもハルらしい話よね」

三角帽子を左右に振りつつそう言ったチユリは、あきらかに顔を向けると、実にストレートな質問を發した。

「それにしてもカレンさん、（記憶を封印する）なんて、心意技にしてもスゴすぎな効果ですよ。ね。いったいどういう仕組みなんですか？」

「私からしてみれば、ベル、あなたの必殺技のほうがよくばスゴすぎなの。——私の心意技のロジックについては、詳しく説明するとこの対戦が終わっちゃうからかいつまんで言うけれど……ブレイン・バースト・プログラムそのものに、バーストリンカーの記憶に干渉する力があることは、この場の全員が知っているとと思うの」

その言葉に、ハルユキは思わず「おお」と声を漏らした。

今のいまままで関連づけられなかったのは不甲斐ないが、確かにブレイン・バーストは、ポイント全損してしまった者のニューロリンカーから強制アンインストールされる時、加速世界にまつわる記憶を根こそぎ消滅れにしよう。ハルユキは、その実例さへ今年の四月に目の当たりにしている。

「早く一同をぐらりと見回し、あきらは続けた。

「私の心意技（記憶演下）は、その力をごく限定的に発動させて、私自身に関する記憶をプロットする。具体的な仕組みの考察については、また今度、時間がある時に話すの」

「まったく、水臭いわねえカレン。あなたにそんな力があるなんて、四元素のわたしたちも知らなかったわ」

楓子の台詞に、全身を流水に包んだアバターはさらりと答える。

「私が水臭いのは当たり前なの」

それを聞いてみんながひとしきり笑ったところで、黒雪姫が両手の長剣をキンツと打ち鳴らした。

「積もる話もあるだろうが、ともあれ我々ネガ・ネビエラスは新たなメンバーを迎えることとなった。ベル、バイル、そしてクロウの三人は、今後カレントと共に戦う場面も増えると思う。それぞれの能力特性を踏かした、効果的な連携を工夫してみてくれ。……といったところで、今日の領土戦についてだが、ベルとバイルが不参加ゆえ防衛に当たるのは五人だ。チーム分けは、すまんが独断で決めさせて貰う」

ハルユキは、少しばかり緊張しつつ次の言葉を待った。マスターらしく淀みない口調で、黒雪姫はきびきびと全員の担当エリアを指示した。

「南側の杉原第二、第三エリアには、私とレイカー。そして北側の第一エリアには、メイデン、

カレント、そしてクロウの三人を配置する。みんな、よろしく頼むぞ。(東京ミッドタウン・タワー攻略作戦)を前にして領土を奪われては、盛り上がりがないこと下水道ステージの如しだからな」

5

領土戦争の参加人数は、原則として防衛側チームの数に攻撃側チームが合わせる形となる。つまり、防衛側が三人なら、たとえ攻撃側が五人チームを組んでいても自動的に二人が除かれ、レベルの高い順に三人だけが戦場にダイブすることになる。

このレベルの例外が、防衛側が二人または一人の場合だ。攻撃側の最小数は三なので、たとえ防衛側が二人以下でも、その陣営で三人の敵軍と戦わねばならない。

なので、所属バーストリンカーが数十人にのぼるような巨大レギオン同士の領土戦ならば、相手チームの人数の読み合いという要素も生まれる。十人規模の大チームを三人チームで迎撃すれば敵の戦力を七人も無敵遣いさせられるし、全領土の防衛が不可能と判断される場合は、敵がもっとも多い人数で攻めてくると思われるエリアに一人だけを配置して、捨て戦でも価値ある一敗とすることも可能だ。

とは言え、現在の杉並エリアの情勢では、そこまでの戦術的オペレーションは必要とされない。第二期本ガ・ネビュラスが十人に満たない小規模レギオンであることは誰かが知っているので、攻めてくる方も三人より多いチームは組まないからだ。事前の読み合い要素といえば、攻撃側がいかにしてブラッタ・ロータスのいるエリアを避けるか、くらしいかない。理由は単

純に「おいそれとは勝てないから」だ。

それは逆に言えば、黒の王がいけないエリアならいい勝負にならなくてもいい、ということでもある。口の悪い敵だと、ロータスなしでクロウありのエリアを引いて「よっしや出たりだぜー」くらいのことを叫んだりするので、ハルユキとしては黒雪姫と別チームでも絶対に気を抜くわけにはいかない。

ゆえに、四時をはんの数秒回ったところで本日の第一戦が開始され、杉並第一エリアを舞台とする戦場に降り立った瞬間、ハルユキは意気軒昂に叫んだ。

「よし、頑張って俺対防衛しよう、メイさん、カレンさん!!」

しかし次の瞬間、がくつと肩を落としながら叫びてしまう。

「う、うへえ……このステージかあ……」

見回した周囲の地形に、ことさらに目立つ部分はない。道路は現実世界とよく似た灰色のアスファルトに覆われ、ビル群も全て同系色のコンクリート製だ。目立つのは路上に点在する大型マンホールくらいだが――しかしそれが、この「下水道」ステージ最大の特徴なのだ。

「……ローねえがあんなこと言うから、ほんとになつたのです……」

そう叫ぶアーダー・メイデンの声にも力はない。その隣の、第二期ネガ・ネビュラスのメンバーとして記念すべき領土戦初参戦となるアタ・カレントも、全身を覆る水流の勢いが少しばかり鈍っている。全員が士気が急降下なのもやむなしと言うべきで、下水道ステージは、自

然承・水属性の中でも不動の不人気ナンバーワンなのだ。

しかし、この場では最年長にしてバーストリンカー歴も最も長いと思われるアクア・カレントが、流石の矜持さを見せて言った。

「つらいのは、敵チームも一緒なの。精神力の勝負なら、なおさら負けるわけにはいかないの」「そ……そうですよ。下水なんかただの暗くて臭くてぬるぬるの土管ですよね！」

「……表現はともかく、その意気や良し、なの。というわけで、この領土戦のリーダーはクロウにお願いするから、よろしく」

「はい、任せましょう……って、え、ええ？」

今更のように悔け反るが、メイデンまでもがこくこく頷く。

「戦闘が始まったなら、私とレンねえは、クーさんの指示で動くのです。ナイスな作戦、期待していますー」

「……………は、はひ……がんばります……」

この期に及んでイヤだとも言えず、かつくんと頷いてから、ハルユキはさっそく視界右上に表示されている敵チームの陣容を確かめた。

人数は、順当に三人。上から、レベル5の（フレイズ・ハート）。同じくレベル5の（オーカー・ブリズン）。そしてレベル4の（ピーチ・バラソル）となっている。

全員、知らない名前でもない。それどころか、何度が討戦したことも見える。しかしハルユ

キは、三つのアバターネームを見た瞬間に小さく声を上げていた。

「えっ……なんで………?」

「どうかしたのですか?」

ハルユキの反応を見て、不思議そうに首を傾げる露に向けて、滑らかに説明したのはあきらだった。

「クロウが驚いた理由は……この三人が全員、赤のレギオン（プロミネンス）所属だから」

「そ、そうなんです。プロミとうちはいま無期限停戦中で、領土戦はお互いに攻め込まない約束になっているはずなんです。なのに、なんで急に……ニコ、じゃない赤の王からは何も言っていないのに……」

そこまで口走ってから、ハルユキは一つの可能性に思い至り、強く両拳を握った。

プロミネンス―ネガ・ネビュラス間の停戦協定は、六大レギオン間の永久不可侵条約と違つて一切の罰則を規定していない、言わば紳士協定だ。だから、条約を守ると言う（理性）を、何かを原因とする（衝動）が上回れば領土戦で攻め込んでくることはあり得る。

そして現状、考えられる幾つかの原因のうち、最もありそうなのは――

「ま、まさか……プロミのメンバーにまで、ISSキット感染者が……」

ハルユキが叫んだ途端、あきらと露の顔にも緊張の色が走った。まさかとハルユキは言ったが、十日以上も前の段階で、同じ六大レギオンであるドレート・ウォールに感染者が発生して

いる。そしてプロミネンスの領土である練馬エリアは、都内に三箇所確認されているISSキット発生源のひとつ、足立エリアとそう離れてもいないのだ。

大きく息を吸い、ハルユキは口早に言った。

「これまで、ISSキット感染者が領土戦に参加してきたことはありませんでした。でも、いつまでも不思議はなかったんです。……もし敵の三人全員がキットを装着していれば、遠距離では「ターク・ショット」、近距離では「ターク・ブロウ」の心意技二種を遠慮なく施展してくるはずです。どちらも無防備に喰らえば即死級の威力です。それと……」

視線をちらりとステージの北側に振る。

「……敵がキット装着者なら、下水道を通らないで、地上から一直線に攻めてくることも有り得ます」

本来、この下水道ステージでは、地上を自由に移動することはできない。ステージの各所に、高く頑丈なコンクリート壁が立ちはだかっているからだ。否が応でも下水道を使わせるための移動制限だが、ISSキットを持つ者には意味を持たない。二種の心意属性心意技は、どんなに分厚い壁だろうと容易く穴を穿てしてしまう。

防衛チームの三人は、しばし黙って杉並第一エリアの北方を見やった。

領土戦では、現実身体の位置に関係なく、攻撃側チームと防衛側チームは東西もしくは南北に分かれて配置される。今回、ハルユキたちはエリアを南北に貫く環状八号線の南端に出現し

たので、敵チームはこの道路の北端から攻めてくるはずだ。

他のステージならかなり遠くまで見送せるはずの環八通りだが、下水道ステージではそうもいかない。ほんの数メートル先で、黒い雨染みをまとうコンタリート壁が道路を横切っている。あの先に行くには、垂直壁面を上れるアビリティを使うか、地下の下水道を使うか、あるいは空を飛ぶしかない。

「……僕、ちよつと上から偵察してきま……」

言いかけた會澤を、ハルユキは途中で吞み込んだ。飛ぶためには必殺技ゲージを貯める必要があるが、何とも念の入ったことに、下水道ステージの地上オブリエクトは壊してもほとんどダメージできないのだ。その代わりに、地下のトンネルには、一つ壊せばゲージがどかんと貯まる謎のドラム缶がたくさん配置されている。万事に於いて、お前ら諦めて潜れ、という設計思想のステージなわけだ。

それでも強引に地上でゲージを貯めようとすれば、もう味方を殴るか殴られるかしかない。だが、領土戦の勝敗は、同じ人数が生き残った場合は残存体力ゲージの合計量で決まるので、無駄な被ダメージは極力避けねばならない。

シルバー・クロウ最大の力である飛行アビリティをいきなり封じられてしまい、がつくり肩を落とすハルユキに、あきらがほんの少し笑いを含んだ声で言った。

「浮き沈みの激しいところは、まるで変わってないの。大丈夫、偵察は私がする」

「えっ……ど、どうやって……？」

それには答えず、アクア・カレントは最寄りのマンホールに歩み寄ると、鑢^{くろ}び付いた蓋^{はたけ}の端^はを真上から蹴^けり付けた。くわあん、と金属音を響^{ひび}かせて円形の蓋^{はたけ}が跳ね上^あがり、路面を転がっていく。

出現した穴の直径は一メートル近くもあるだろうか。内壁の側面にハシゴが設置されているのを見るまでもなく、あの下が噂^{うわさ}の下水トンネルだ。耳を澄^{すま}ませれば、こぼこぼと重そうに流れる水音が聴^{きこ}えてくる。

アクア・カレントは、穴の上に右手をかざすと、指先を下に向けた。するとそこから、全身を流る水が二、三リットルぶんほど流れ落ち、マンホールの中に消えた。

「あ、あの、いったい……」

わけが解^とらず、ハルニキは眼を見開く。現象としては、カレントは貴重な流水装甲の一部をただ下水に捨てただけだ。量としては一割程度だろうが、全身を覆^{おほ}う水紋は明らかに薄^{うす}くなっている。

「レンねえにお任せ、なのです」

隣で誰^{たれ}が落ち着いた声を出した、その直後――。

静止していたカレントが顔を上げ、当たり前のように言った。

「敵チームは、下水道から接近してきている。三人全員が固まって移動している……あと数分

で、ステージ中央に到達する」

「へっ？ な、なんで解るんですか？」

「アビリティ（流体音感）。私の（水）が混ざった液体を、全て私の耳にする。続きは、移動しながら」

さりとて言い放つと、カレントは足許のマンホールに隠匿（かくもく）いなく身を投じた。ハシゴを使わずに、内壁を流れ落ちるようにしてあつという間に姿を消す。

「や……やつぱり、下で戦うのか……」

「でも、悪い展開ではないのです。地上の壁を心意技で壊さずにちゃんと地下を移動しているなら、ISSキットに寄生されている可能性は少し下がりますから。それに、領土戦ステージの真ん中には……」

論の言葉に、ハルユキも腹をくくって頷く。

「最大の拠点があるもんね。先に占領されると厄介、か……。——よし、メイさん、僕たちも行こう」

右腕を伸ばし、小柄なアードー・メイデンの体をひょいと抱え上げると、ハルユキはそのまま数歩移動してマンホールへと飛び込んだ。

このステージで領土戦を行うのは初めてだが、下水道ステージそのものが未経験というわけではない。マンホールの深さと内部構造は記憶している。真っ暗な縦穴を十メートルほど自由

落下し、広く薄暗い空間に出たところで背中の翼を広げてブレーキ。螺旋を描いて滑空し、先行したアタア・カレントの隣にドボンと着水する。

そこは、かまぼこ型の断面を持つ巨大な地下トンネルだった。直径は六、七メートルもあるだろうが、壁も床も地上と同じくコンタリートだが、カビだのコケだの菌の粘着だのにくまなく覆われ、大小の金属パイプも無惨に錆び付いている。照明は天井に懸え付けられた旧式の蛍光灯だけで、明かりの届かない暗がりでは、正体不明の小型生物がちらろちらろ這い回る。

平らな床には浅く水が流れているが、これが実に厭らしい灰色に濁っていて、足首あたりまで沈めているだけで大変な精神的ダメージがある。もし転んで、顔から突っ込んでしまった日には悶絶必至——というが、ハルユキはそこまで経験済みだ。

今日は絶対転ばないぞー と決意しつつ、右腕に抱いたままのメイデンに一応訊く。

「あの、メイさん、降ろしていい……かな？」

「……………だめ、と言ったらずっと縋っこしててくれるですか？」

「え、ま、まあ、敵と接触するまでなら……」

「それはいい考えなの」

と左側から言うや否や、あきらも体を預けてくるので、ハルユキは反射的に左腕で抱え上げてしまった。しかし、いかに小柄な下型とはいえ、二人を同時に持ち上げるとそれなりの荷重がある。

「あ、あの、この状態で走ると、かなりの確率で転んで顔からバシャーンですが……」

「大丈夫、あれを壊すの」

カレントが指差すほうを見れば、確かに、暗がりには紛れて円筒形のシルエツトが鎮座している。下水道ステージのポーナスアイテム、ドラム缶だ。転ばないよう慎重に近づき、キック一撃で粉砕すると、中から謎の発光ガスが湧き出して数瞬あたりを照らす。それを浴びたハルユキと、あきらと謎の必殺技ゲージも半分近くチャージされる。

「よし、これなら、お二人を抱えたままステージ中央まで飛べます！」

「お願い。私の《流体力学》はそろそろ切れる。敵チームが中央に到達するまで……予想ではあと一分三十秒」

「それだけあれば充分です！」

あきらに呼び返し、ハルユキは背中の金属翼を展開した。周囲空間での飛行は神経を使うが、敵の位置を追跡できていれば不意打ちを警戒しなくて済むので、かなりスピードを出せる。

翼を軽く振動させ、濁り水から両足が数センチ離れたところで、ハルユキは水平飛行を開始した。トンネルの直線部分はあつという間に終わり、前方に左右への分岐路が出現する。速度を緩める前に、耳許であきらが囁く。

「右なの」

「了解です！」

体を傾け、得意の高速直角ターン。翼の先端が連続的に水面を掠め、後方に次々と水柱が立ち上る。

「なんだか、映画みたいなのです！」

右舷の中で、闇が少しばかり興奮の沸く声を出す。そう言われるとまったくスピードを出したくなるが、それで壁に接触でもして、三人揃って下水にダイブでは目も当てられない。急ぎつつも慎重に、と自分に言い聞かせる。

その後も、あきらの的確な指示に従って右に左に曲がりつつ、数十秒も飛んだところで前方にやや明るめの光が見えた。必殺技「ダージ」とよく似た青い色合いは、蛍光灯ではなく（拠点）が放つライトエフエクトだ。

「あそこが中央。敵チームもあと数秒で到着する」

「着地しますー」

叫びざま、両翼をいっばいに広げ、軽く逆進をかける。速度を落としつつトンネルから飛び出すと、そこは円形の地下空間だった。

ハルエキたちが飛んできたのと同じ下水トンネルが八方から集合し、中央で灰色の湖を作っている。空間の差し渡しは五十メートル、ドーム状の天井までも三十メートルはあるだろうか。

湖の真ん中には小さなコンクリートの島があり、その上に青く光る金属リングが浮遊している。不思議な振動音を放ちつつ、ゆるやかに回転するそのリングこそが、領土戦ステージ特有

の（拠点）だ。リング内部では必殺技ゲージがオートチャージされるので、いかに拠点を占領していくか——占領したならばいかに防衛するか、されたならばいかに攻略するかが領土戦の基本戦略となる。

ことに、ステージ中央に存在する拠点は（要塞拠点）とも通称され、他の拠点より大きなチャージリングを備えている。小型アバターなら同時に三人も——回復速度はやや遅くなってしまうが——チャージできるので、ここを取れるかどうかが勝敗に直結することも多い。

ゆえにハルユキは、まだ無人の要塞を占領するべく、湖中央の小島に飛び込もうとした。しかし——。

「回避して——」

あきらの鋭い声が響いたのとはば同時に、反対側のトンネルの奥から高速で飛来するものがあつた。真っ赤な火炎で形作られた、増円と直線と円弧。つまり——8分音符。

「うわっ」

声を上げつつ左に急旋回降下する。炎の音符が振り撒く火花がシルバー・クロウの装甲に幾らか跳ね返つたものの、メタルカラーの耐熱性能が幸いしてダメージはない。8分音符は鋭い弾道曲線を描いて後方に飛び去り、コンタリートの壁にぶつかると、四つの32分音符に分裂してから大きな火炎の渦を作った。

視界の端にその様子を捉えながら、着水す前にフルブレーキ。拠点までは迫り着けず、その

二十メートル手前で潮に降りる。再び両足がドボンと濁り水に吞まれるが、さすがにこの状況で生理的嫌悪感など気にしてはいられない。あきらましくも頭も白らハルユキの胸を飛び出すと、左右に少し間を開けて懸架する。

「……いまの技は、確か、えーと……」

記憶を掘り返そうとするハルユキに答えたのは、正面のトンネルから勢いよく飛び出してきた小柄なデュエルアバターだった。

「あたしの《シアリング・ノート》をノーダメで避けるなんて、なかなかヤルな一っ！」

足許の汚水（くみず）を気にする様子もなくばしやばしやと走り続け、熱点の浮き島を頂点としてハルユキたちと二等辺三角形を作る位置で停止。そこでくると二回転してから、左手を脇に構え、右手を高々と伸ばしてビシッ！と決めポーズ。

全身を彩るのは、かなり鮮明な《遠隔の赤》だ。もちろん赤の王スカーレット・レインほどではないが、薄暗い地下空間にオレンジがかった朱色がくつきり浮き上がって見える。上半身の装甲はネクタイつきのブレザー、下半身はミニスカート形状で、二本のヘアパーツを長く垂らす頭部の左右には大きなリボンが装飾されている。

どことなく古の電脳アイドルを想起させるアバターを、ハルユキは過去に二、三度だけ見たことがあった。純真（まこと）エリアでギャラリ―した、通電対戦で。

「……《ブレイズ・ハート》さん……」

名前を眩^{くら}いたハルユキの声は、胸中の危機^きと緊張^{きんじやう}を映^{うつ}して、少し掠^{さら}れていた。

こうして直接^{じき}相対^{さうたい}すれば、もう寝^ねう余地^{よち}はない。彼女は、間違^{まちが}いなく赤^{あか}のレギオン（プロミネンス）のメンバーだ。ならば問題は、この戦^{いくさ}いが本人^{ほんにん}の意志^{いし}によるものかどうか、だ。

キメボーズを取り続けるブレイズ・ハートの体を、ハルユキは二、三歩^{さんぽ}踏みだしながら食^くい入^{いれ}るように凝視^{ぎんし}した。

ブレザーを脱^だした胸部^{きょうぶ}装甲^{さうきやう}は左右^{さゆう}に分かれ、内側^{うちがわ}にアバター素体^{そたい}が露出^{ろしゅつ}している。「E.S.S. キット」が寄生^{きせい}するならあの位置^{いち}だろ。両眼^{りやうがん}に力を込め、もう何度^{なんど}も目撃^{めくつ}している濃黒^{なりくろ}の半球^{はんきゅう}を探^{たず}す。

すると、クロウの鏡面^{きやうめん}ゴーグル越しにも視線^{しせん}を感じたのか、ブレイズ・ハートは両手^{りやうて}できつと胸^{むね}を覆^{おほ}って叫^{こゑ}んだ。

「な、何しろじろ見てるんだーっ！ マッタイラで悪^{あく}かったな——っ！」

「え？ い、いやいやさんな、そういうつもりじゃ……」

「なにーっ！ ならボタンコ好き^{すき}のヘンタイかーっ？ そいうやあんだの仲間^{なかつま}もかなりのボタンだなーっ!!」

というブレイズの台詞^{だいご}に、思わずメイデンとカレントの胸^{むね}を確認^{かくにん}しそうになったが危^{あや}うく堪^たえる。意志^{いし}力を振^ふり絞^{しめ}って視線^{しせん}を正面^{せいめん}に固定^{こてい}しつつ、

「ち、ちがいます、ボタンコ好きとかそーゆーのじゃないですー」

と叫んだハルユキに続いて、話も通じと張った声で宣言した。

「そうです！ クロウさんが好きなのは、胸じやなくて脚なのです!!」

「そう、そのとお……いい、いやいやいや!!」

「ふうん、そうなの。記憶しておく」

左側であきらまでそんなことを言うので、ハルユキは定めて逃げたくなったが、幸いそれを実行に移す前に話が相手には聞こえないポリウムで囁いた。

「ブレイズさんの様子からして、キットには寄生されていないようなのです。外見からも確認できませんし」

「え、ええ……そうですね。でも、となると問題は……」

ハルユキがそこまで言いかけた時、ブレイズ・ハートの左右に、追いついてきた二人の仲間が大きく水飛沫を上げて停止した。

右に並んだのは、たくましい両腕に巨大なツメを装備した黄褐色のM型アバター。そして左には、身の丈ほどもあるバラトル型強化外装を抱えた、青灰色のF型アバター。ヘオーカー・ブリズン」と（ピーチ・バラトル）、どちらもハートと同じくプロミネンスに所属するバーストリンカーである。

ハルユキはオーカーとピーチの胸部装甲も丹念に、そして爆力さげなく確認したが、やはりISSキットは見当たらない。ブレイズ・ハートが体の前から両手を下ろしたタイミングで、



胸に満ちて疑問を口にする。

「……あなたたちは全員、プロミネンスの人……ですよ。どうしてです？ プロミとうちは、無期服役中のはず……それともこれは、赤の王の意志……」

「レインのじゃない！ 攻め込んだのは、あたしたちの意志だ——っ！」

朱色のブレザーを着たアイドル型アバターは、ハルユキに最後まで言わせなかった。甲高い叫び声には、明確な怒りが籠もっている。ピーチ・バラツルも「そーだよそーだよー」と声を上げ、オーカー・ブリズンは両手のツメをがしやがしや開閉させる。

どうやらハートたちは、何か腹に据えかねる——しかも赤の王の定めた停戦協定を破るほどの——ことがあって、今日の領土戦で相違に攻め込んだ、ということらしい。だが、ハルユキにはその《何か》の中身がさっぱり思い当たらない。

ネガ・ネビュラスとプロミネンスが関わった事件は、今年始めに発生した《五代目タロム・ディザスター》の一件くらいだ。しかしあの時は、マスターたるニコ白らがハルユキに休当たりのソーシャル・エンジニアリングを仕掛け、他のレギオンメンバーは登場しなかった。四月の《ダスク・ティカー》事件の時は、ニコと副長のバドさんがハルユキとタタムを助けてくれたし、その後もずっと友好的関係を維持している……いや、もっと単純に、二人は大切な友達なのだ。

だからハルユキは赤のレギオンそのものにも興近感を抱いてきたし、交流の機会こそ少なく

ともメンバーに敵対的な行動を取った覚えは一切ない。だから、何がブレイズ・ハートたちをこれほど怒らせたのか、想像もつかない。

ちらりと左右を見ると、誰もあきらかに軽やかぶりを振った。彼女たちにも事情が解らないとなると、あとはもう直接訊くしかない。

「あの、原因は、何なんですか？ 僕たちがプロミに何かしました……」

「した、たろーっ！」

つぶらなアイレンズを、高温の炎を思わせるブルーに輝かせてブレイズ・ハートは喚いた。再びくるつと一回転し、右手の指をハルユキに突きつける。

「昨日のコトを、忘れたとは言わせないぞーっ！ 無制限フィールドの最奥エリアでエネミー狩りしてたプロミの二十人以上と、狩りを指揮してた赤の王スカーレット・レインを、ドでっかい神獣級でまとめてE.K.しようとしたくせにいーっ！」

「な……な……」

ハルユキは大きく仰け反り、次いで顔と両手を激しく左右に振り動かした。

「し、してない！ そんなコトしてないです！」

それを聞き、ハートの隣のピーチ・パラソルが鋭く両目を光らせる。両手で持った傘型強化外装をぎゅんぎゅん高速回転させながら、

「しらじらしーのよ！ 私もハトっちもオカくんも、ば——っちり見たんだよ！」

回転を止めたバランスを勢いよくハルユキに向け、「石突き部分に存在する砲口でびたりと狙いをつける。」

「確かにアンタたちはいなかったけど……その代わり、神獣族の背中に乗ってたのよーアンタたちのマスター……黒の王、ブラック・ロータスがー」

怒りに燃えるその声は、ハルユキの胸を大径ライフル弾の如き衝撃で撃ち抜いた。

広大な地下ドームが生み出す残響が薄れ、消えても、ハルユキは反応できなかった。その代わりに、アーダー・メイデンが一歩前に出ると、凄惨たる声で叫び返した。

「有り得ないのですー！ ロータスが、そんな不意打ちのような真似を……しかもエネミーを利用した攻撃なんか、するはずがないのですー！」

「黙れ！ 黙れ黙れだまれ——っ!!」

進った絶叫は、それまでのアイドル然とした甘さをかなぐり捨てた、どこか悲痛な色合いを帯びていた。体の前で両拳を握り、小さな体を激しく震わせて、ブレイズ・ハートは続く言葉を振り絞った。

「したじゃないか！ 二年前……先代の赤の王、レッド・ライダーを、卑怯な不意打ちで……殺したじゃないか——っ!!」

「……………」

ハルユキは、突如猛烈な息苦しさに襲われ、思わず胸を押さえた。仮想の空気を吸い込もう

とするが、喉が塞がる感覚は来らない。

ブラッタ・ロータス——黒雪姫が、無制限フィールドで赤のレギオンに神獣級エネミーによる攻撃を仕掛けたという話は到底信じられないが、過去に赤の王レッド・ライダーを不意打ちで全殲させたことは事実だ。その惨劇に至るまでには多くの因縁があったのだが、今ここでそれを説明する時間も、またその権利もハルユキにはない。

今度ばかりは、認めあきらめ反駁しようとはしなかった。沈黙するネガ・ネビュラスの三人に向けて、ブレイズ・ハートは少しだけトーンを落とした声を殺じた。

「……昨日のエネミー狩りには、二代目赤の王……スカーレット・レインも参加してたんだ。黒の王は、神獣級をけしかけただけで消えたけど、もしレインがドンチになってたら、また出てきてとどめを刺そうとしたに決まってるんだ」

それを聞いて、ハルユキはようやく望息感を振り払い、問い質した。

「じゃ、じゃあ、レイン……赤の王は無事なんですね？」

「あつたりまえた——っ！ あたしたちがついてるんだからな！ もう二度と、二度と、マスタ―を殺させるもんか——っ！」

ブレイズの宣誓に、ピーチは傘型ライフルを高く掲げ、オーカーは両手の爪をじやきんと開く。

二三年前、先代赤の王の退場に伴って、レギオンとしてのプロミネンスは一度崩壊したと聞

いた。幾つかのグループに分裂した元プロミメンバーと、周辺から攻め込んでくる中小レギオンのメンバーが互いに相争い、戦国時代のような様相になったらしい。

その大混乱の中で頭角を現し、勝利を重ね、ついには王の証たるレベル9にまで到達したのが、(不動要塞)、(蜂血の暴風雨)の二つ名を持つスカーレット・レインだ。二代目赤の王となった彼女を柱としてプロミメン스가再結成され、機馬エリアは落ち着きを取り戻したが、その新生レギオンには旧来のメンバーはあまり残らなかつたらしい。現在の六大レギオン中では最少となる、三十数名という規模がそれを証明している。

しかし、発言から推測するに、ブレイズ・ハートは旧プロミメンスからの経験メンバーなのだろう。そしてこの領土攻撃に参加しているからには、ピーチ・パラスルとオーカー・ブリズンも勢らく。

「……なら、ブレイズさん、あなたがたがこうして機馬エリアに攻め込んできた理由は……黒の王、ブラッタ・ロータスと戦うため、なんですか」

ハルユキの問いに、三人の攻撃者は決然と頷いた。

「そうだ！ 領土の中じゃ、通常対戦は挑めないからな！っ！ レインは、状況が掴めるまで動くなって言っただけど……あたしたちは、どうしても許せないんだ！ たとえ三対一でも、黒の王に勝てるとは思ってないけど、でも、でも、せめて一発！ ぶんなぐってやらないと、気が済まないんだ——っ!!」

叫ぶと同時に突き出されたブレイズ・ハートの右拳に、疾にも似た闘気が薄く纏らめくのを、ハルユキは確かに見た。

黒の王が、エネミーを使って赤の王を狩ろうとするなどということは有り得ない、絶対に。黒雪姫にとって、エコはもう単なる停戦中のレギオンの頭目ではない。リアルワールドに於ける、大切な友達なのだ。ハルユキがエコをそう思っているように。

だから、仮にブレイズたちが神獣級エネミーの背中にブラック・ロータスを見たというなら、それはネガ・ネビュラスでもプロミネンスでもない勢力の仕掛けた欺瞞工作だとしても思えない。しかし、今それを言葉で説明しても、怒りに燃える三人は受け入れないだろう。過去にレッド・ライダーを討ち取られた時からの宿怨が、彼女たちを衝き動かしているのだ。

「……残念だけど、このステージに黒の王はいない」

不意に、アクア・カレントが静かな声を発した。流水をまじう右手を伸ばし、ぱしゅつと飛沫を散らして振る。

「だから、王に代わって、私たちが証明する。ブラック・ロータスと、彼女が率いるネガ・ネビュラスは、決してあなたたちの王を騙し討ちなんかしないということを」

「どうやって証明するのよー 口先だけの言い訳なんて、興味ないんだよっ!」

すかさず叫び返したのは、ライフル傘を構えるピーチ・パタンルだった。今にも火を噴きそうな銃口に怯むことなく、今度はアーダー・メイデンが敢然と応じた。

「もちろん、言葉には頼らないのです。私たちはバーストリンカー。だから、拳と気合いで語るのです！」

聞ても、あきらと同じように右手を突き出し、可愛らしい拳骨を作ってみせる。

ハルユキは、自分も何か言わないと！ と考えたものの、先輩二人の宣言に付け足すべきことを残念ながら思いつけなかった。仕方なく、無言のまま二人に倣って右拳をぐいっと前に伸ばす。

並んだ二つの握り拳を見て、ブレイズ・ハートは反発的に何かを叫びかけたようだったが、ぐっとそれを吞み込んだ。少ししてから、抑鬱の類いた、しかし勇ましい声で応じた。

「望む、ところだーっ！ 黒の王の前に、まずあんたたちを脱散らしてやるからな——っ!!」
突き出したままの右手を開き、続けて叫ぶ。

「マイク・オ——ン——」

それがキーワードだったらしく、掌に赤い光が集まり、ひとつのオブジェクトを作り出した。強化外装としてはかなり小さい。先輩が丸くなった、全長二十センチほどの円筒は、確かにマイクそのものだ。

ブレイズと同時に、黒チームの連環型であるメイデンも強化外装を呼び出した。「弓箭の道は迷われぬ」という諺らしいキーフレーズが発せられると、左手に炎が集まり、上下に伸びて編身の長弓を生成する。名を「フレイム・コーラー」という、威力と精度を兼ね備えた強力な

武器だ。

最小単位である三対三の領土戦は、選抜前に散開してしまつて、最初から三箇所での一対一デュエルになることも多い。しかしこうして双方が固まった状態で出会えば、能力のシナジー効果や意思疎通のスピード……つまりチームワークが勝敗を分ける大きな要素となる。

その意味では、不利なのはネガ・ネビュラスの三人のほうだ。何せ、アーダー・メイデン＋アクア・カレント＋シルバー・クロウというこのチームは、これが初の領土戦なのだ。開発済みの三人連携など一つもない。

——それならいっそ、こっちからバラけてタイマンに持ち込むか？ それとも陣裏でコンボ技を狙っていくか……？

というハルユキの、利那の迷いを狙い撃つかのように、プロミチームが先手を取って動いた。いや、正確には、いつの間にか始まっていたのだ。ここまでただのひと言も喋らなかつたオーカー・プリズンは、単なる無口キヤラだったわけではなく、どうやら密かに技の発動準備をしていたらしい。

「——（エッジド・ケージ）!!」

いきなり、野太い声でオーカーが叫んだ。最大の特徴である巨大なツメを装備した両腕が、足下の濁り水に手首まで突っ込まれている。直感的に、地面を走るタイプの攻撃技だと判断したハルユキは、水中に眼を凝らした。彼我の距離は二十メートル近くある。どんなに高速な技

でも、見てから避けることは可能——

じやかつ——と重く鋭い金属音が、全方位で響いた。ハルユキたち三人を取り囲む形で水中から伸び上がったのは、元の数倍にも巨大化したオーカーのツメだった。サイズだけでなく、本数まで増えている。わずか二十センチほどの間隔で並ぶ三十本近いツメが、頭上で一点に集まり、閉じる。

あつという間に、ハルユキたちは鋼鉄のツメでできた檻に閉じ込められてしまった。考えてみれば、黄土色というのほぼ純粋な「閉鎖の質」。そんなアバターの必殺技が、単純素直な遠隔火力であるはずがなかったのだ。

「……攻撃の種類を察するのが、ちょっと遅すぎるの」

檻に触れるのを避け、ハルユキにびったり密着したあきらがひそっと囁いた。その口ぶりからして、どうやら彼女はオーカーの技が捕獲系だと看破しつつも、事前の宣言どおりにハルユキの指示を待っていたらしい。

いきなりの失点に、ハルユキは焦りを感じつつ叫んだ。

「す、すみません！　すぐ壊します！」

見たところ、ツメの一本一本にはさほどの強度はないようだ。パンチで破壊するべく右拳を握り締めたところで、今度は隣に止められてしまう。

「よく見ないとだめなのです。ツメは全部、内側に刃がついてます。普通に蹴ったら逆にダメ

「ジを受けるのです」

「うぐっ……………」

確かに、骨を構成するツメは全て、剣刀のように鋭いエッジを外ではなく中に向けている。いくらシルバー・タロウが切断耐性を持つメタルカラーでも、刃部分を磨けば無傷では済まない。側面を思い切り打てば折ることは可能だろうが、ツメとツメの間は二十センチしかないのでパンチの角度が取れない。

「そつ、そうだ……必殺技には、必殺技！」

ハルユキは右手に繞いて左手も握ると、両の拳を顔の前でクロスさせた。シルバー・タロウ唯一の必殺技（ヘッド・バット）は、モーションは大きいし溜めは長いし高速格闘戦の最中に繰り出してもまず当たらないが、動かない目標に対して使うなら効果は大きい。明らかに確認した必殺技「グー」も、ぶうぶうだが足りそうだった。

両腕を交差させたまま上体を反らすと、甲高いサウンドとともに光がヘルメットの額部分に集まり始める。それを見ていた先輩バーストリンカー二人が、またしても冷静なコメント。

「狙いは、悪くないと思うのです……が」

「使うタイミングが、いまいちなの」

——え。

とハルユキが内心で声を出したのと、二十メートル先でプレイズ・ハートが叫んだのはほぼ

同時だった。

「させるか——っ——（シアリング・ノ——ット！）」

右手のマイクに向かって、歌うように高らかな技名発声。それを受けたマイクが赤々と床き、まるで声そのものが点火されたかの如く、空中に巨大な炎の8分音符を生み出す。

「こうっ！」と聴りを上げて突進してくる音符を見て、ハルユキは瞬間的に間に合わないと感じた。

ここで心の声を無視して必殺技発動に固執するとどうなるか、くらいは想像できるので、素早く両手を下ろす。額に集まっていた光が空しく拡散するが、未練を振り切って叫ぶ。

「防衛姿勢に——」

同時にハルユキは、耐熱性能の高いメタルカラーである自分が二人の盾になるべく前に出ようとした。しかしそれに先んじて、

「了解」

とひと言囁いたアクア・カレントが、両手でタロウとメイデンを抜き寄せた。全身の凍水装甲がざあっと移動し、三人をまとめて包み込む。

直後、飛来した炎の8分音符が、刃の檻の天辺に触れた。それは四つの32分音符に分解し、檻の周囲に落下、一度パウンドしてから次々に爆ぜた。

オレンジ色の閃光が視界を塗りつぶし、次いで渦巻く火花が四方から押し寄せる。炎はツメ

とツメの隙間を抜け、檻の内部を満たす。厚さ三センチはある水膜が同時に熱され、ハルユキの体にも強い熱感が伝わる。

だが幸い、かなり熱めのお風呂くらいのもので水温上昇は止まった。炎は勢いを弱め、再び檻の外に流れ出していく。

「あ、ありがとうございます……さすがですね、カレンさん」

水膜に包まれたままなので、語尾をぼこぼこさせながらハルユキは札を言ったが、あきらは素早くかぶりを振った。

「あと一回同じ攻撃を受けたら、水が沸騰、蒸発してしまうの。下の湖から補給できるけど、かなり汚れてるから浄化に時間がかかる」

その言葉はつまり、アクア・カレントは失った水流装置をステージに存在する水分で補えるが、不純物が混ざっている水は補給前に浄化しなければならない、ということだろう。下水道ステージの濁り水は、そういう意味では最悪に近い。これ以上汚い水は（菌・雑菌）ステージの毒沼か、上位腐黒系（大群）ステージの血の沼くらいしか思いつかない。

「でも……向こうも、今みたいな大技をそうそう連発はできないはず……」

湖の半分で脱出方法を探しながら、ハルユキはそう口にした。ブレイズ・ハートの、火炎の音符を投擲する攻撃は、激手な見た目といい広い効果範囲といい、必殺技ゲージを相当に消費するはずだ。そしてこの下水道ステージでは、ドラム缶以外のオブジェクトを壊してもゲージ

は貯まらない。次の音符攻撃が来る前に、何らかの手段で必殺技ゲージを……。

そこまで思考が及んでから、ようやく気付く。あるではないか、ドラム缶より簡単に、しかも水久的にゲージを回復する手段が。

「しまった……」

思わず口走った時にはもう、ブレイズ・ハートが単独で右に走り始めていた。目指すはもちろん、地下ドームの中心に設置された大型エネルギー・チャージャー——（要撃拠点）だ。今はまだ中立状態だが、金属リングの中にアバターが入った状態で三十秒経過すると占領状態に移行し、必殺技ゲージのチャージ機能が開放される。そうなったら、ブレイズは炎の音符を飛ばし放逐だ。

拠点の占領だけは妨害せねばならない。刃の輪に閉じ込められたこの状態でそれが可能なのは、アーダー・メイデンの持つ長所だけ。しかし当然、敵もそれは予測しているだろう。大型ライフルを持つピーチ・バラソルが、何もせずに待機しているのはメイデンの射撃に備えているからに違いない。ならば――

「……カレンさん、三つ数えたら水を戻して、メイさんは弓でブレイズを狙ってください」
小声でそう指示すると、瞬とあきらはかすかに頷いた。

三、二、一、

心の中でゼロを数えながら、ハルユキは素早くしゃがみ込んだ。三人を包んでいた水膜が力

レントの体に戻ると同時に、いままでシルバー・クロウの際に入っていたアーダー・メイデンが左手の長弓を持ち上げる。右手で弦に触れると、全体が赤々と輝く火矢が生成され、一気に引き絞られる。

しかし、メイデンの弓を見た瞬間、ビーチ・パタソルも動いていた。

「させないんだよっ!!」

メイデンとブレイズを結ぶ線上までダッシュするや、傘をいっばいに開く。花びらのようなメタルプレートは二段階に拡張し、たちまち直径一メートル半にも及ぶ円形の盾を作り出す。メイデンの火矢がいかにも強力でも、通常攻撃で防衛型強化外装を破壊するのは困難だ。一箇所を繰り返し撃てば別だろうが、そんな悠長な真似をしている間にブレイズが拠点を占領してしまう。

しかし、ハルユキの真の狙いは、拠点に陣取るブレイズ・ハートではなかった。

しやがんだままぐるつと向きを変え、半分だけ展開していた背中 of 翼を全力で振動させる。普通なら前にすつ飛び、頭とあきらを巻き込んで対の艦に激突してしまうところだが、そうはならなかった。翼の先端が、ステージ床面の濁り水に深く沈んでいたからだ。

代わりに、金属フィンの高周波振動が水を巻き上げつつ微細な粒子へと変え、後方に巨大な濃霧の壁を生み出した。白い霧はビーチに向かって流れ、彼女の視界を奪う。当然、メイデンからもビーチと、その向こうの拠点にいるブレイズは見えなくなるが——ハルユキが指示した

のは（額う）ところまでだ。（撃つ）のは当然、別の相手。

「メイさん、オーカーを！」

「らじやし、なのです！」

ハルユキの指示を先読みしていたかのようなスピードで、闇が火矢の角度を変えた。刃の鋭さを保持中で動けないオーカー・ブリズンを照準するや、躊躇いなく矢を放つ。

オーカーからは闇のアタシメンが見えたはずだが、捕獲装置を暴動しているがために動けない。闇に真っ赤な軌跡を引いて飛来した火矢は、オーカーの、鳥かこのようなフレームに包まれた丸い頭を見事に捉えた。こうつ、と燃え上がった炎が、頭を包む。

「ムウウッ………！」

今日二度目の声を出しながら、オーカー・ブリズンが仰け反った。左右の腕が水面から引き抜かれると同時に、ハルユキたちを拘束していた刃の重も水に沈んで消える。

この機を逃すわけにはいかない。細かく指示している時間もない。ゆえにハルユキは、

「あと、任せます！」

指揮官としては失格かもしれない指示を叫ぶと、最後に残されたわずかな必殺技ゲージを消費して飛んだ。離陸直後にゲージは尽きてしまったが、ほんの二十メートルだけジャンプできれば充分だ。まだ霧霽に包まれて慌てているビーチ・パラソルを飛び越え、その向こうの拠点に突っ込む。現状のバー・インジケーターで示される、占領までの残り時間はあと二秒……一秒

「……」

「うおおおっ!!」

「のわ——っ!」

ようやく落下してくるクロウに気付いたブレイズ・ハートに、体ごと激突。ともかく相手を拠点から排除せねばならない。無我夢中でしがみついて拠点のある浮き島から押し出すと、勢い余ってブレイズともども濁り水に突っ込む。

「どや——っ! 離せ——っ! 汚い、臭い、ぬるぬるする——っ!!」

「こ、こっちだって嫌だ——っ!!」

叫び返しながら、暴れるブレイズを必死に押さえ込む。拠点ラングから遠い出しても、占領タイムが一気にリセットされるわけではない。段階的に減少するそれがゼロになるまでは、相手を拠点から引き離しておかねばならないのだ。

小柄で、アイドルっぽいデザインで、付け加えれば胸も平らなF型アバターに抱きつき拘束を仕掛けるのは実が引けるが、濁り水がぬるつくせいで少しでも力を抜くと脱出されてしまいそうだ。両手のみならず両足まで使い、必死に押さえ込みを続けていると——。

「こ、こ、こら——っ! ハトつちに何してるんだよ——っ!」

ようやく濃霧から抜け出てきたピーチ・パラソルが、アイレンズを三角に吊り上げながら巨大な傘を畳んだ。石突き部分の銃口ががしゃっと伸長し、強化外装はシールドモードからライ

フルモードに変化する。

「死ぬ、ヘンタイー だよ!!」

（ハトっち）を調節する可能性が頭からすっ飛ばすほど進上しているらしいピーチが、ハルユキを撃つべくライフルを構えた。

ブレイズが「わあ、撃つなあ——っ!」と悲鳴を上げ、ハルユキもとりあえず「ヘンタイ違う!」と叫んでみたが、ピーチの両眼に宿る殺意は消えない。

「ヘチヤージ・ショット!」

声と同時にトリガーが引かれると、銃口に一瞬光が集まってから、猛然と火を噴いた。ピンク色に輝く大口徑弾が、ちゅんっ!とハルユキのヘルメットを掠め、ついでにブレイズのリボンも掠めて、近くの水面に盛大な水柱を立てる。

「ひいっ! あ、あの、アレなんとかして!!」

ハルユキがそう叫ぶと、アイドル型アバターは組み伏せられたままの状況も一顧おれたかのようによろぶる首を振り、答えた。

「ピッちーがああなったら、ターゲットが穴だらけになるまで止まらないんだ……!」

「え、ええ……進上するスナイパーってどうなんですか……!」

というやり取りの間にも、ピーチはライフルのボルトハンドルを音高く引いて排莖すると、再度構える。ハルユキとブレイズはびくっと体を震わせ、思わず互いに抱きつく。

しかし、幸い、次の弾は発射されなかった。広大な地下ドームに、硬とした——そして少しだけ呆れた響きの脱じった技名発声が響いたのだ。

「(フレイム・トールレンツ)」

斜め上に射けられた器弓から、ひょうと火矢が放たれる。矢は放物線の頂点を過ぎるや数十本にも分岐し、ビーチ・パラソルの頂上で虹雲の雨と化す。

この大技に、バーサタ状態す前のビーチもさすがに我に返ったか、わああ!? と走鳴を上げた。ライフルの銃身を取り巻くように折り畳まれていたプレートを開き、再び傘に変わった強化外装の下に身を隠す。直後、炎の雨が轟然と降り注いだ。

技の効果範囲は意外に狭く、ハルユキたちまで届く火矢はなかったが、そのぶん圏内は大変なことになった。もちろん地面は水に満たされているのだが、矢は水面に落ちてすぐには消えずに燃え続ける。ビーチの傘にも大量の火矢が突き立ち、まさしく焦熱地獄の有り様だ。

「あ……あれが、ネガビュの(緑色弾頭)……」

体の下でフレイズ・ハートが震え声を出すので、ハルユキは思わず訊き返した。

「え、し、知ってるんですか？」

「プロミの中堅どころはみんな、噂ぐらいは聞いてるよ……(ICBM) スカイ・レイカーに抱えられて飛びながら、あの技でフィールドを火の海にして……最後には自分が火の玉状態で揚点に落っこちてきて……」

「う、うわあ……」

つい一緒になつて跳えながら、そういえばと思ひ出す。二代日本の王たるニコ白身が、昔の領土戦では至近距離に落ちてきたメイデンに酷い目に遭わされたと言つていた。確かに、あれほどの火力を持つアバターに接点を占領されたら、撃退どころか接近も至難だ。——と考えた直後、現実にはアードー・メイデンによる拠点占領が完了し、金属リングがレジオンカラーである黒に染まる。

話は再び弓を上空へと引き絞りながら、ハルユキに向かって叫んだ。

「ターさん、ビーチさんは私が足止めしておきます！」

続けて、後方からもあきらの声が届く。

「オーカーの相手は私が。クロウはリーダー同士、決着をつけて」

ちらりと後ろを見ると、相手のツメをぶんぶん振り回すオーカー・ブリズンを、アタア・カレントが流れるような高速移動で翻弄している。ベテランたる二人が足止めに徹すれば、そう簡単に逆襲されるはずはないはずだ。

ハルユキは顔を戻すと、組み敷いたままのブレイズ・ハートと眼を合わせた。視線による意思疎通が行われ、互いに相手の体を離すと水中から跳ね起きる。

「よおおし……こーなったら、ガチンコのタイマンで白黒、じゃない赤黒つけてやるぞー

っー」

「そ、その言い方だとこっちが黒星決定みたいですが……でも、望むところです！」

ハルユキが、水滴を散らしながらびしょと濡えを取ると、ブレイズも例の一回転キメポーズを披露。間合いは二メートルもないが、なぜか相手に下がる気配はない――。

「（遠隔の赤）なのに格闘戦？　と思ってるだろーっ！」

ハルユキの髪間をすばり言い当てたブレイズは、可愛らしいフェイスマスクにニマツと笑みを浮かべた。

「教えてやる！　遠隔の赤は、炎の赤！　そして炎の赤はな――……」

右手のマイクを口許にあてがい、とんでもない音量の声で――

「……熱血の、赤だぁ――っ！！（バーニング・ハ――ト）！！」

声が真つ赤なマイクに触れ、点火され、燃え上がった。

ブレイズがこれまで二度発動した必殺技（シアリング・ノート）は、声から炎の音符を作り出す遠隔攻撃技だった。だからハルユキは、反射的にマイクの正面を避け、左に動いた。

だが、今回生み出されたのは音符ではなかった。既いまでの赤に輝く、巨大なハートマーク。しかもそれは生成直後に崩壊し、ブレイズ自身を猛烈な炎で包み込んだ。長いサインテールの髪も炎に変わり、波打ちながら連立つ。これまでサファイア色だったアイレンズが、ルビーへと変わる。

「――シルバー・クロウ！！」

炎の精霊の如き姿へと変わったブレイズ・ハートは、甲高い金属質の共鳴音を轟びた声で叫んだ。

「お前が、お前のマスターを信じてるなら……その気持ちで、あたしの拳を止めてみせろ

っ!!

あまりにもアツい台詞の熱量に耐えかねたかのように、右手に握られていたマイクまでもが燃え上がり、巨大な炎となって拳を包んだ。

ブレイズの周囲では、ドーム床面を満たす水がぐらぐらと沸き立っている。これほどの高温をアバター本体に宿して、なんで無事でいられるんだとハルユキが視界右上の敵体力ゲージを見ると、果たしてまったく無事ではなかった。ブレイズ・ハートのゲージは刻一刻と減少中で、つまりこの炎は彼女の身をも焼いているのだ。

——てことは、逃げ回ってれば、そのうち自滅……?

と、ほんの一瞬にせよ考えなかったと言えばウソになる。いや、これが普通の対戦、普通の領土戦ならハルユキは躊躇わずにそうしていただろう。だが、ブレイズ・ハートたちは、敬愛する頭首にエネミー・キルを仕掛けられたことに怒り、奴に黒の主とぶつかっていれば到底勝てないと認識しながら、それでも一発殴るために杉並エリアに攻め込んできたのだ。

ならば、ここで逃げることは、己のレギオンマスターにして（親）でもある黒書姫を愛する気持ちにブレイズたちに劣ると告白するに等しい。ロジックではなくエモーションで、ハルユ

半はそり感じた。

「……信じてるに、決まってる!!」

ひと言叫び、右拳を握ると、腰を落として構える。もちろん領土戦を含む尋常の対戦で心算システムを使うのは最大級の禁忌なので、ブレイズのように拳を光らせることはできないが、それでも集中させた闘志がBBシステムのイマジネーション制御系に微細な信号となって伝わり、拳の周りを陽炎のように揺らめかせる。

ハルユキの構えを見たブレイズが、ニッとアイドルらしからぬ太い笑みを浮かべた。

「いい根性だーっ!」なら、小細工なしで……行っく、ぞおおおおお——っ!!」

煮えたぎる水を蹴立てて、一直線に突っ込んでくる。懸え上がる拳をぐるんと一回転させ、大迫力の右ストレートパンチを撃ち出す。

同時に、ハルユキも飛び出していた。ブレイズの大きなモーションとは対照的に、ほとんど振りがぶらずに体の捻りだけで右拳を放ち、蹴り足で加速する。

灼熱の隕石のようなブレイズの拳撃と、純白の光線にも似たハルユキの拳撃が、完全な同一軌道を描いて激突した。炎と光が駆け合ったライトエフェクトが広がり、少し遅れて衝撃波がステージを震わせる。足下の水改めお湯も圧力によって押しのけられ、コンクリートの地面が露出する。

いかに熱血アイドルとはいえシステム上は遠隔攻撃タイプであるブレイズ・ハートと、格闘

タイプのメタルカラーであるシルバー・クロウでは、打撃の威力や装甲強度に基本的な差がある。だが、必殺技（バーニング・ハート）によって強化されているブレイズの拳は、クロウの拳に押し負けせず、がっちりと受け止めてのけた。

こうなると、アドバンテージはブレイズに移る。炎に吞まれたクロウの拳はたちまち赤熱し、体力ゲージがゆっくりとだが減り始める。いかにメタルカラーが高い炎耐性を持つといっても、鋼の融点は鉄やタンダステンと比べればかなり低いので、このまま接触し続けていけばいずれは装甲が溶け崩れ、拳のみならず右腕の大部分を吹き飛ばされるだろう。

「……動かないのは、あたしの炎を甘く見てるからか？ それとも、ただのバカか——っ？」
ハルユキと力比べを続けるブレイズが、勝ち誇るような、それでいてどこか不満そうな口調で叫んだ。右手を失う熱さに耐えながら、反射的に叫び返す。

「後のほうですー」

真正面からのドツキ合いに応じたのも、こうして無類な力比べを続けているのも、戦術的には愚の骨頂だろう。だが、この状況こそが、ハルユキの望んだものだった。食い縛った前（まへ）の間から、ありったけの声を絞り出す。

「——でも、きつと、僕の（親）……黒の主ブラッタ・ロータスもこうしますー タレバーな機（こ）体（たい）なんか犬（いぬ）に喰（く）わせる、ステーキにダイブしたならひたすら対戦あるのみ……それがあの人の敵（てき）ですからー」

「……………」

急増、ブレイズがわずかに真紅のアイレンズを見聞く。

ハルユキとしては、「だから黒の王は、エネミーだけじゃかけて自分とはとっと逃げたりなんか絶対にしない」とまで言いたいところだったが、言葉だけでは悪いの金では伝わらない。あくまで拳で、拳に宿る闘志の炎で、ブレイズに伝えねばならない。

右手の装甲は、赤熱状態を過り焼いてオレンジ色に輝き、いよいよ融解寸前と見えた。体力ゲージの減りも加速し、すでに七割を切っている。

ここから、必殺技で強化されているブレイズの拳を押し返すのは至難の業だ。しかしハルユキの願望には、ひとつのイメージが存在した。シルバー・クロウと同じくらい小柄なのに、並み居る大型アバターと正面からぶつかり合い、一歩も引かない超硬のメタルカラー・アバター。ウルフラム・サーベラス。

サーベラスのパンチや頭突きの威力は、持って生まれたタンダステン装甲の性能だけに依拠するものではない。なぜあれほど強く、重いのか……それは彼が、打撃に自分の全てを乗せているから。デュエルアバターが生み出すエネルギーのありつたけを、インパクトの瞬間、一点にフォートカスさせているからだ。

それを可能としているのが、とんでもなく頑丈な関節部である。サーベラスは恐らく、攻撃の瞬間に全身の関節を固定し、ひとつの金属塊となつて敵に激突しているのだ。ハルユキが

黒雲龍に伝授された、全身を柔らかく構えて敵の攻撃を受け流す（柔法）とはまったく対極の技……言わば「剛法」。それがサーベラスの技を、一撃必倒たらしめている。

もちろん、タンダスタンほどの硬さも重さも、ついでに関節強度もないシルバー・タロウには、サーベラスの剛法をそのまま模倣することはできない。だが全身は無題でも、右腕一本をほんの一刻だけ金属の塊と化すことはきつと可能。心意システムを知る前に、魔都ステージの恐ろしいほど硬い建物の壁をただの真手で穿ったのだから、タロウの腕にはそれだけの強度があるはずだ。

ハルユキは少しだけ体を回転させ、ブレイズとのせめぎ合いを続けている右腕をまっすぐに伸ばした。手首、肘、肩、そして肩甲骨から延びる右の翼までを一直線に揃え、そこに鋼鉄のシヤフトを通すイメージ。ほんの少し関節が曲がったり緩んだりすれば、この後のアクションに耐え切れず、腕がへし折れる。

——サーベラス。君の技、使わせて貰うよ。

心の中で、狼の頭を持つデュエルバターに……いや、高円寺ルッタ商店街で利郎の悪戯を果たした年下の少年に向けて囁き、ハルユキはぐっと呼吸を止めた。感覚では、右拳の装甲が融解するまであと数秒。これが、最初で最後のチャンス。

「行くぞ、ブレイズ!!!」

ハルユキがそう叫ぶ前から勝負に出ることを察していたのだらう、ブレイズ・ハートも両腕

入れず応えた。

「来い、クロウ!!」

ブレイズの姿がひときわ明るく輝いた、その瞬間、ハルユキは、両手で激しく地面を蹴り付けると同時に、背中の翼をフルパワーで振動させた。大口怪の実弾ライフルが発射されるような大音響が轟き、クロウの右手首、肘、肩から大量の火花が散った。しかし腕は曲がりも碎けもせずに、サーベラスの剛拳が、いつもシアン・パイルの杭打ち機の如き威力とスピードでまっすぐ前に撃ち出された。

ブレイズ・ハートの拳を包んでいた炎が真円を描いて消散し、小柄なアバターは猛烈な勢いで跳ね飛ばされて、遠く離れたドームの壁に激突した。

三分後――。

アードー・メイデンの（火焰豪雨）に傘型強化外装を穴だらけにされたビーチ・パタノルと、アクア・カレントの詳細不明の技によって両手のツメを残らず切断されたオーカー・ブリズン、そして全身に焼け焦げを作ったブレイズ・ハートの三人は、横一列に並ぶと同時に頭を下げ、声を揃えて叫んだ。

「三番つたり三」

すでに一同は暗くて狭くてぬるぬるする下水道から脱出し、地上の環七道路に場所を移して

いる。残り時間は五分と数十秒、このまま領土戦が終われば体力ゲージの合計値でハルユキたちの勝ちだ。

それでも一応、バーストリンカーのたしなみとして最低限の注意力は保持したまま、ハルユキはべこりと会釈を返した。

「え、ええと……GG、じゃない、いい勝負でした」

すると、それを聞いたプロミネンスの三人は顔を上げ、ちらりと視線を交わしてから、一緒に微笑んだ——と言ってもオーカーの鼻輪マスクは、どこが眼でどこが口なのかいまいち解らないのだが。

反応の理由が解らずにハルユキが途惑っている、代表してビーチ・パラソルが言った。

「いまのバドさん語は、本人譲り？」

「あ、そ、そっか……一応、そういうことに……」

ゲーム内のみならず日常会話でも数多の短縮語を駆使するバドさんことブラッド・レバードは、赤のレジオンの幹部（三獣士）のひとりだ。当然、ビーチたちは日頃からバドさん語を耳にしているわけだ。

三人の肩から力が抜けた、この機を逃すまいとハルユキは続けて口を開いた。

「あの、戦国の前にブレイズさんが回ってた、無制限フィールドでのエネミー・キルのことですが……」

恐る恐るそう切り出すと、ブレイズ・ハートが右手を持ち上げ、軽やかぶりを振った。

「それ以上、言わなくていいよ。——正直、まだあなたの言い分を全面的に受け入れる気にはなれないけど……加速世界に、あんなに黒くてあんなに尖^{トビ}ってるデュエルバターが、ブラッタ・ロータスの他にいるとも思えないし……。——でも」

一度言葉を切ると、自分の右手に視線を落とし、そこに残るインパクトの感度を確かめるかのようにゆっくり握る。

「……でも、あんたが、自分のマスターを全力で信じてることだけは解った。あたしたちが、スカーレット・レインを信じてるように。だから、今は色々まとめて呑み込んでく。マスターが、そうしろって言ったから」

「あ、ありが……」

反射的にお礼を口にしかけたハルユキを、ブレイズは再び右手を広げて制した。

「その言葉は受け取れないよ。エネミー・キルの一件は棚上げしても、ブラッタ・ロータスがレッド・ライダーを不意打ちで全損させたことは紛れもない事実だから。こればかりは、レインやバドさんがどう言おうと忘れない。だから、あたしたち三人は、あんならネガ・ネビュラスとは馴れ合えない」

「……………」

レッド・ライダーの一件にも、君たちの知らない事情が——と口にしたい衝動に、ハルユ

キは耐えた。ブレイズが言ったとおり、事實は事實だ。黒雪姫は、レベル10への到達を望んで先代赤の王の首を落とした。それは彼女自身の選択であり、ブレイズたちが今も抱える恨みと憎しみは選択の結果だ。たとえ（子）のハルユキであっても、その因果に横から介入することはできない。

だからハルユキは、ただ無言で頷いた。

残り時間が二分を切ったのを合図に、赤のレギオンの三人は揃って身を翻した。領土戦はどちらかのチームが全滅するか三十分が経過するまで終わらないが、これ以上話すことはないという意思表示か、地下ドームから去るつもりらしい。

遠ざかるうとする背中に、アクア・カレントが静かな声を投げかけた。

「最後に、ひとつだけ教えて」

ブレイズ・ハートが立ち止まり、長いツインテールを揺らして振り向く。

「あなたは、黒の王が神獣級エネミーをけしかけて消えた、と言った。それは、地上を走って離脱した……という意味？」

予想外の質問だったらしく、ブレイズは水色に戻ったアイレンズを何度か瞬かせてから、素早く首を左右に振り動かした。

「違うよ。でっかいエネミーの背中から飛び降りたら、そのまま体ごと地面に突き刺さるみたいに、一瞬で消えたんだ」

六月第五週の領土戦では、最終的に四つのチームが杉並エリアに攻め込んだ。内訳は、青のレギオンが一、緑のレギオンが一、豊島区を拠点とする小規模レギオン（ボンドバググ）、そして赤のレギオンから一チーム。

ハルユキ・謡・あきらの防衛チームは、ボンドバググ及びプロミネンスの攻撃チームと戦い、ともに勝利した。そして黒雪姫と楓子の一人足りないチームも、青チームと緑チームに完勝。ゆえにリザルトは全エリアで防衛側の勝率百パーセントとなり、ネガ・ネビュラスの旗は守られた——と言っても、去年の十一月に領土宣言をして以来、攻め落とされたことは一度もないのだが。

所属人数だけ見れば小レギオンに分類されるネガ・ネビュラスが、領土戦で勝率五割以上をキープし続けられている理由は、もちろんレギオンマスターにして圧倒的攻撃力を誇る黒の王が自ら防衛にあたっているからだ。レベル差が絶対的な壁とはならないブレイン・パーストだが、さすがにレベル9のrだけは別格。（絶対切斷）の二つ名の通り、四段の剣であらゆる物を斬り伏せるブラツク・ロータスを倒そうとするなら、非物理系拘束技で動きを止めてから大量の遠距離火力を集中させるくらいしか手はないが、攻撃側の人数が制限される領土戦ではそ

れも難しい。

ゆえに、他の王たちが自ら攻めてこない現状では、陥落の可能性があるのは黒竜城が防衛していないエリアに限られる。実際、ハルユキ+タム+チユリの若手三人組チームの時はそれなりに負けもしているのだが、二戦一勝や三戦二勝でも勝率五割はギリギリクリアできるので、危ういながらも旗は守れている、というわけだ。もっとも、仮に黒竜城がいなくとも（四元流）が二人も加わっているチームで星を落とせば、それは指揮を任せられたハルユキの責任というものが。

そんな理由で、今週の領土戦タイムが終了し、指揮中の裏庭に戻ってきた道端、ハルユキはずるずるとベンチに沈み込んでしまった。

「はあぁ……………よ、よかった……負けなくて……………」

勝利の快挙とは程遠い合詞を聞き、隣に座る誰か灰かに苦笑する。

【UIV おつかれきまでした、有田さん。二つ目の対ポンドバグダ戦は、なかなかの作戦指揮ぶりだったのです】

チャット窓に標されたのは一見お褒めの言葉のようだが、最初の対プロミネンス戦は（なかなか）の域にさえ到達していなかったという指摘でもある。首を締めつつ、ハルユキは小学四年生の大先輩に対して言い訳を試みた。

「せ、せめて事前にリーダー指名しておいて貰えば、もう少し心の準備ができたのに……」

【UIV】いかなる状況にも臨機応変、なのです！」

「はひ、そうですね……。――でも、カレンさんが復帰してくれてほんとに良かったよ。領土戦のチーム編成も、かなり幅が広がるし」

と何気なく口にするや、露は小さな唇を可愛らしく尖らせ、上目遣いになってハルエキを睨んだ。その表情のまま、両手で密早くホロキーボードを叩く。

【UIV】有田さんは、いつから知っていたのですか？ 今日、レンねえがネガ・ネビエラスに戻ってくることを？」

と訪問されてしまえば、今更ごまかすわけにもいかない。なにせ領土戦の論に、「嬉しい顔の理由は内緒」と言っってしまったているのだ。

「お、一昨日の夕方……だから、まだ四十六時間くらいしか経ってないよ！ 僕もびつくりしたんだよ、バトルロイヤルの真っ最中にいきなりカレンさんが登場して、僕やアシユさんを助けてくれたんだから……。そ、それにほら、どんな状況でも臨機応変ってさっき西堂吉さんも」

【UIV】それは対戦中の話なのです！」

勢いよくタイプしてから――露はふつと表情を緩めた。

ハルエキを見上げる大きな瞳に反射する光が、少しずつ増えていく。曇り空の切れ間から注がれる夕陽の色の輝点は、やがて水滴に形を変えて頬に流れる。

ぎよつと両眼を見開くハルエキの視界に、ゆつくりと校色の文字が現れた。

「UIV きっと今度も、有田さんがいてくれたから、なのですね」

「え………、今度？ って………」

「UIV フーねえも、私も、サッちゃんも、有田さんが一生懸命がんばって下さったから、ネガ・ネビエラスに戻ってこられたのです。だからきっと、レンねえもそうなのです」

「ば、僕なんが、何もしてないよ………むしろ、師匠も四葉宮さんも、もちろん恩師先輩も、僕を助けるために戻ってきてくれたんだし………カレンさんだって………」

「UIV そこは、胸を張っておけばいいのです」

顔は右手で涙を拭くと、指先で揺れる透明な雫をしばし見詰めた。

再びハルユキに視線を移し、四つ年下の少女は、唇を丸く開けた。

口許が弾張り、小刻みに震える。細い首に臓が浮き上がり、引き撃るように動く。

「し、四葉宮さん………」

ハルユキは抑え声で呼びかけた。顔は、実兄でありバーストリンカーとしての（親）でもある四葉宮 寛也の事故死を目の当たりにしたショックで声を失っている。肉声で発音できるのは、長年の練習でどうにか可能となった、ブレイン・バースト関連のボイスコマンド二種だけのはずだ。

失語症とは、口ではなく脳の機能障害である。語の症状は（皮質下運動失語）と分類され、言語の理解や筆記は正常に可能な一方で、自発言語……つまり肉声による発話が困難となる。

大願の《中心前因》と呼ばれる場所で起きる現象が主たる原因だが、誤の場合は過大な精神的ショックが該当部位のニューラル・ネットワークに障害を引き起こし、それはブレイン・インプラント・チップをもつても回復できなかった。

だから、無理やりに本物の声で喋ろうとすれば、誤は肉体のみならず心にも大きな苦痛を感じるのはずだ。ハルユキは制止しようと両手を持ち上げかけたが、それより一瞬早く、誤の震える唇からかすかな——しかし確かな音が一つ零れ落ち、空気を伝わって、ハルユキの耳にまで届いた。

「あ……………」

続けて、「う」。「が」。最後に、「とう」。

四つの音を発し終えた時、誤の額には汗の珠が浮いていた。それでも気丈に微笑みを浮かべ、誤はそっとハルユキに頭を下げた。

溜みそうになる涙を必死に堪え、ハルユキは囁いた。

「……僕こそ……ありがとう、四葉君さん。今、この場所にいてくれて……本当に、ありがとう」

すると誤は頭を上げ、本来の年齢を思わせる無邪気な笑みを、顔いっぱい輝かせた。

午後五時三十分を回ったところで、ハルユキは止門前の未完成ダートをくぐって誤と別れ、



一人爆走についた。

黒雪姫もタタムもチユリも文化祭の準備が終わらず、それどころか学校全体がお祭り前夜の熱気に包まれているなかでソロ下校するのはなかなかに厳しいものがあつたが、強制下校時刻である午後六時以降も校内に居残るには、所属する展示グループが学校管理部に作業時間延長を申請し許可されねばならない。ハルユキの二年C組クラス展示班はとうに作業終了を報告してしまつたので、もちろん許可が出るはずもない。

とぼとぼ歩いて青梅街道まで出ると、ハルユキは道路の反対側にあるバス停をじーっと監視した。どうせ学校から追い出されたなら、昨日と同じくバスに飛び乗って中野エリアまで遠征といきたいところだが、残念なことにそれも黒雪姫に禁止されてしまつた。

理由は、領土戦争終了後に行われた反省会でハルユキが報告した、赤のレギオン所属のバーストリンカーによる惨状儀りの理由だ。経緯を聞き終えたと、黒雪姫はきっちり三秒間沈黙してから、「あやつのは業だろうな」と忌々しげに呟いた。

その言葉が何者を指しているのかについてはハルユキも思い当たるところがあつたが、黒雪姫に「一件については私が全て預かる」と宣言されてしまえば、取立て名前を出すことはできなかった。しかもレギオンマスターは、続けて主にハルユキに向けて言い渡したのだ。文化祭が終わるまでは、移送の外でのフリー対戦も観戦さえもしてはならぬ、と。

「……………まあ、たった一日の我慢だけども……………」

文化祭は明日日曜の午後には終わるので、その夜にはもうエリア外遠征も解禁、と解釈していい——はずだ、恐らく。そうしたら中野に行つて、ウルフラム・サーベラスと再戦して、そこでもう一度言うのだ。一緒に来い、と。

東通には次の七王会議も開かれ、そこでハルユキの習得した〈先学誘導〉アビリテイが〈聖霊鏡面〉アビリテイ同様の性能を持つと認められれば、いよいよ東京ミッドタワー・タワーの合同侵攻作戦が動き出す。〈四神スザク〉を除けばハルユキにとつて過去最強の敵となるであろう神獣級エネミー、〈大天使メタトロン〉攻略戦の先陣に立つのだ。その前に、サーベラスを複雑に絡め捕る不可視の糸を全て解き明かし、断ち切つてやりたい。

彼を助けない、というこの気持ちは、もしかしたら不慮で優勢で押しつけがましいかもしれない。パーストリンカーとしての純粋な戦闘力を比較すれば、レベル5のシルバー・クロウはレベル1のサーベラスと互角と言えるかどうか、というところだろうから。

でも、一昨日の夕方、人波を挟んで数秒間だけ対面したリアルのはは——彼の眼は、確かにハルユキに何かを訴えかけていた。

ならば、それに応えたい。何度でも手を差し出し、言葉を投げかけたい。かつてハルユキに対して、たくさんの人たちがそうしてくれたように。

「……………明日、きつと、会いに行くよ」

紫色に染まる中野方面の標識を見上げ、そつと眩くと、ハルユキは自宅マンション目指して

歩きはじめた。

マンションB棟のエレベータに乗ったところで、境界右上にメール着信アイコンが点滅した。昨日から海外出張中で明日夜まで帰らない母親からだろうと思いつきながらメーラーを起動する。文化祭を見に行けないことを一応謝るつもりかな、とそこまで先回りしたのだが、表示された送信者名は母親ではなく、たった一文字「N」となっていた。

「……だ、誰？」

首を捻りながら本文を展開すると、そこにもわずかに「五秒後に暴上」と書いてあるだけだ。いよいよ訳が解らず、頭を途に煩けているとエレベータが停止したので、無意識の歩行で外に出る。

すると少し遅れて、隣のエレベータの扉も開いた。これまた無意識の動きでそちらを見ると、廊下に勢いよく飛び出してきた何者かが、ハルユキにピタと右手の指を向けた。

「よつ、おひさ……でもないか。五日ぶり？」

「は……え……えええ？ な、ななんでここに？」

驚きのあまり仰け反りすぎたハルユキが、危うくバランスを回復させて前に戻ると、メール着信からきっちり五秒後に現れた送信者は呆れ顔で言った。

「ちゃんと予告してやったんだから、そんなに驚かなくてもいいだろ。だいたい、あたしがこ

「こ東るの何度目だつーの」

「え、ええっと……三、四……五……」

「ただの慣用表現だよ、いちいち数えんなー」

つかつかと近寄ってきて、ハルユキのお腹を軽く平手で叩くと、赤毛を頭の両側で結わえた女の子——赤の王スカーレット・レインこと上月由仁子ことニコは、にかつと腹中で笑った。そのまま共用廊下を右田家方面に歩いていくので、ハルユキはどうにか扉を再起動させ、慌てて後を追う。先に2305のプレートがついたドアに到着したニコが、ばばっと右手の指を走らせた通路に解錠音が響くので、またしても肉天。

「え、えええ？ まだウチの鍵持ってたの？ 一時電子錠の有効期限なんて、とっくに……」

「あー、こないだ泊めて貰った時、ホームサーバーにちよちよっとアレして永久電子錠に変更しといたからさ」

さらりと恐るべき台詞を口にしながらスニーカーを脱いだニコは、「お邪魔しまーす」と言いつつも勝手知ったる足取りで奥に向かう。廊下の途中で振り向き、また果敢としてハルユキを見ると、

「あたしはできとーにしてるから、先に着替えてきていいよ」

と優しい言葉を発してから、リビングに消えた。

「……………予告って、ふつう五秒じゃなくて五時間前にはするもんじやないのかよう」

仕方なく、そんなことを駈いてみるハルユキだった。

お言葉に甘えて制服をＴシャツとハーフパンツに着替へ、リビングに戻る。ニコは二人掛けのソファに横たわってクッションに頭を乗せていた。その堂々たるくつろぎっぷりに思わず笑みを浮かべた途端、横目で睨まれてしまう。

「なーにをニヤニヤしてんだよ」

「な、何でもナクシンです……む、変なでいい？」

「ん、あんがと」

顔顔をいてキツチンに向かい、グラス二つに麦茶を注いで戻ると、ハルユキはニコの向かいに腰を下ろした。そこでようやく、先刻から胸にささやかな違和感が居座っていることを自覚する。何度か首を捻捻ってから、ようやくその理由に思い当たり、寝転がったままのニコに訊ねる。

「そういえばニコ、今日はなんで最初っからノーマルモードなの？」

「へ？」

一瞬、眼をぱちくりさせた小学六年生の少女は、すぐにニンマリ笑って言った。

「なんだよ、やつて欲しいのか？」

勢いよく体を起こしてハルユキと正対すると、びしっと揃えた膝ひざに両手を載せ、これまでの「にやり」ではなく「にっこり」なスマイルを顔いっぱいに映かせる。

「——お兄ちゃんも、あたしのことが好きなんだねっ！嬉しいなっ！」

五日間のカレーパーティーでは発動しなかった、かなり久々の天使モードに精神を直撃され、しばし上体を泳がせてからブルルと頭を掻く。

「そ、そりや輝いじやないけど、いやそういうことじゃなくて、何か理由があるのになって思っただけだってば！」

そう口にした途端——ハルユキはようやく、自分がすでにその（理由）を知っていることに気付いた。いや、ニコが天使モードではない理由だけでなく、今日こうしていきなり訪問してきた理由までも。

大きく息を吸い込み、しばらく胸に溜めてから、吐息に集めて囁く。

「そうか……、そう、だよな。ニコがここに来たのは……昨日の、無制限フィールドでの出来事について話を聞くために、決まってるよね……」

すると、ニコは表情をノーマルに戻しながらゆっくり体を後ろに傾けて、とすん、とソファの背もたれに寄りかかった。クツションの反動を利用するように頷くと、どこか物憂げに言う。

「ま、それもあるけど……そいつは理由の三分の一だな」

「ん……じゃあ、あと三分の二は？」

「そっちも半分は解ンだらうが。ワビだよ、ワビ入れにきたの」

「わび……って、あ、謝るって意味？」

「あったり前たらうが。あんたと定茶で俺び滅びやってどーすんだよ」

「へ、へえ、ニコ、お茶のココロエとかあるの？」

「ナメんなよ、こう見えてもガアコの茶道クラブ入ってたこともあんだからな！」

「こともある……って、なら、もう辞めてるんじゃないですか……」

「うっせ！ 極めたから免許皆伝なんだよ！ ……………って」

そこでいつしか自分がソファから身を乗り出し、勢いよくまくし立てていたことに気付いたのか、ニコは何度か顔を赤くすると大きな苦笑を浮かべた。

「あーもう、なんであんだと話してるとこうなのかな。調子狂うつたらねーよ……これ以上脱線する前に、まずこっちからワビ入れっかん！」

きっぱり宣言すると、ニコは再び細い脚を揃え、両手を両膝にばしつと背を立てて置いた。続けて、小さな黒リボンで結わえた髪をなびかせて深々と低頭する。

「――（プロミネンス）のメンバー三名が、今日の領土戦で、停戦協定を破って（ネガ・ネビエラス）の領土を攻撃したことをレギオンマスターとして謝罪するーごめんなさいー」

前置きの物々しさと、結びの可愛らしさがややミスマッチな謝罪について微笑んでしまいうなり、ハルユキが慌てて表情を引き締めると同時にニコが顔を上げた。どう答えるべきか迷っているうちに、ニコがさらりと付け加えた。

「……………で、あんだんとこの黒いのに伝えといて」

「へっ？ ば、僕が？」

「つたりぬーだろが！ 下っ端職員（ボトム・スタッフ）のあんたにだけ賭ってどーすんだよ」

「し、シタツバ……。——そもそもそんなら、最初っから僕じゃなくて先輩に会いに行けばいいじゃないか！」

「しょーがねーだろ、知ってるのニコだけなんだもん。あーもう、そんじや職員は撤回（リトラクト）して怪人カラス男に格上げしてやつから」

「そ、それって格上げなの？ だいたいなんでヒュルキーが悪の組織側の……」

と、そこまで言いかけて、またもや果てしなく脱線（デフレーション）していることに気付き、ハルキは腹払い（ハラヘ）で発言を停止した。言いたいことはひとまず脇に置き、鎮く。

「……解った、今のは黒の王に伝えておくよ。でも、僕も、先輩も、他のレギオンメンバーも、領土を攻撃してきたブレイズ・ハートさんたちが一方的に悪いとは思ってない。あの人たちに、そうせずにはいられない動機があったんだ。だから……できればニコも、ブレイズさんたちにあんまり厳しい処罰（ペナルティ）は……」

「何言うのかと思ったら、まずソコかよ」

ふふっと笑ったニコは、両手を顔の後ろで組み合わせると軽く頷いた。

「さすがにお咎めなしじゃ済ませられねーけど、妻連のエネルギー狩り出撃回数二倍くらいにしようと思うてる。そもそもそれ言ったら、プロミ頭首のあたしだって、言葉オンリーで何の行動も伴わない謝罪だけして済むのかつつう厭だした」

「……………、行動？ と言いますと？」

なぜか丁寧語で質問してしまふハルユキを一瞥するや、ニコは再び姿勢を正し、握った両手を胸元に隠して破顔した。

「なーにお兄ちゃん、あたしに何かして欲しいの？ お掃除？ お洗濯？ それとも……」

「い、いやいやいやー 何もしなくていいです！ っていうが、だいたいさつきからニコがそうやって脱線させるから話が妙な方に行くんじゃないか」

「みょーな方って、どっち？ あたしはお家のお手伝いしか言っていないよー？ さてはへんな想像したんでしょー、ハルユキお兄ちゃんのお、えっち♡」

最後のはにかみスマイルを二秒ほど持続させてから、ニコはあっさりモードチェンジして続けた。

「今のが（行動を伴う露罪）ってことでいいよな？」

「う、うむ……そうやって次々切り替えられると、なんか頭がくらくらするんだけど……」

「なら、もっとべーすあつぷしてあげるねっ！ ——そんで、タロウ。本題の、あんたが最初に言いかけた（無制限フィールドでの出来事）だけだな……」

「ううう、は、はい」

頭を両手で抱えながら頷くと、完全に赤の王としての顔に戻ったニコは、鋭い眼光でハルユキを射貫いた。

「タロウ、あんた、事の真相に心当たりがあるんだろ？」

「え、し、真相………」

「あのな、あたしもあの神獣級の背中に乗ってたのが本物のロータスだとは思ってねえよ。見たのは短時間だけど、情報屋がぜんぜん通ったからな」

ニコの言葉に、ハルユキはどうにか思考を立て直し、これまで得ている情報を脳内で整理くまとめた。

ブレイズ・ハートたちによれば、赤のレギオンは昨日の金曜日、頭首スカーレット・レインを含む二十人以上の大集団で無制限フィールドに入ってエネミー狩りをしてた。場所は豊島エリア……つまり地盤近辺だ。そこに、一体のデュエルアバターを背中に乗せた神獣級エネミーが突如出現、攻撃してきた。背中のアバターはすぐさま地面に潜るようになって潰れ、ニコたちは荒れ狂う神獣級から辛くも逃げ延び、ゴータルからの機転に成功した。

そして、問題のエネミーに乗っていたアバターは、漆黒の装甲と、剣のように鋭い四肢を持つていた……。

「……それって、ニコの見た黒いアバターは、情報屋の強さが……黒雲雄先輩を超えていた、ってこと………」

ハルユキがおそろおそろ訊ねると、急に固らんや赤の王は首を横に振った。

「その逆だ。ロータスよりかなり弱かった……つつうか、あたしの眼にも王がほとんど見えな

かった」

《情報庄》とは、デュエルアバターに秘められた戦闘力や書かれた戦闘経緯までもを、アビリティ（視覚拡張）によって観測するニコ独自の尺度だ。彼女はその力で、純色の七王の中でも緑の王、グリーン・グランデと青の王、ブルー・ナイトが抜きん出た情報庄を持っていることを見抜いて、ハルエキに教えてくれた。

しかし、今のニコの言葉は、ハルエキには意外なものだった。なぜなら、ハルエキが想像している《偽ブラッタ・ロータス》の正体が当たっていれば、そいつの情報庄は七王に迫る規模であるはずだからだ。

「み、見えなかった……って、それはつまり、黒いアバターはレベル1とか2とかの弱米だった、ってこと？」

「……ううーん、そう言われつとそれも違うような気がすんだよな……。なんつうか、まるで、その場にいながら実体がない……みたいなの……」

腕を組んでしばし唖ったニコは、突然顔を上げると再びハルエキを睨んだ。

「おいクロウー、その言い方、やつばなんか心当たりがあんだろー」

「ええと、ええと……」

やや身を引いた姿勢で数秒間葛藤してから、ハルエキは観念し、こっくりと頷いた。

「う、うん。随すよ、知ってること全盛。でも……凄く長い話になるから、ご飯食べながらに

しょう……」

冷凍ビザでいい？ と訊こうとしたハルユキに皆まで言わず、ニコは「カレー！」と宣言した。どうやら、先日のカレーパーティーで登場した手作りカレーライスがなんだかんだ言っ
てかなりお気に召したらしいのだが、しかしその要求は難易度が高すぎる。

「い、いや無理だよニコ、だってあのカレー、実質的にはチユと四葉さんだけで作ったよう
なもんだし」

「なにも同じもん作れとは言つてねーよ。適当に材料切つて煮てルー入れりゃ何とかなんだろ
……あたしも手伝うからさっ、がんばろ、ハルユキお兄ちゃんっ」

——というやり取りでミクシロンが開始され、買ひ物フューズと調理フューズを経てどうに
かカレーらしきものが完成した時、ラビングダのアナログ時計は午後七時を回っていた。

ダイニンダテーブルに、こればかりは冷凍もので勘弁してもらったご飯と、具がじやが芋と
人参と玉葱、鶏肉だけのカレーがよそわれた大皿が二つ並んだところで、ハルユキはとりあえ
ず確認した。

「あの、ニコ、今日はもしかして……」

「泊まってく」

「そ、そうですか」

——昨日の、先輩及師匠のお泊まり会とかチ合わなくて本当に良かった！

としみじみ思いながら、声を抑えて頂きますを言う。スプーンを持ち、カレーとご飯をパラスよく乗せて、器を器る口へ。

「……………あ、あれっ……………これは、意外に……………」

「……………なんだ、ゼンゼンいけるじゃん」

好感的なインプレッションを述べ合って、同時にぐいっとスプーンを立てる。カレールーのパッケージにAR表示される参考調理動画をかなり簡略化して作ったわりには、ちゃんとカレーの味とするのが凄いことのような当たり前のような。

——などと考えてから、ハルユキはようやく半年前の（四代目災禍の鎮事件）の折にニコから貰ったプレゼントのことを思い出し、二さじ目をすくいながら首を傾げた。

「あれ、でも、ニコって料理得意なんじゃなかったっけ？」

「……………そのスプーンに乗っかってる、あたしが切ったニンジン見りや解るだろうーがー あんたの腕と大差ねーよ、イヤミのつもりか？」

ノーマルモードから赤の王モードへと変化したそうになるニコを見て、慌てて否定する。

「ち、ちち違ひよ！ だって、前にニコがくれたクッキーすごく美味しかったから……………」

それを聞いた途端、ニコの眉間からタテジワが消え、代わりにほっぺたが少しだけ赤くなっ

「ま、真顔でそーゆーこと言うなよなー……あ、あれだよ、お菓子系は別なんだよ。パドがセミプロでさ、色々習ってっから……」

「へええー そうだったんだ……」

プロミネンスの副長でありニコの保護者的存在でもあるブラッド・レバードことパドさんは、練馬区板台にあるケーキショップでアルバイトをしている。ハルユキは、メイド風の制服を着たままエレバイを駆る彼女の様子を思い出しながら、続けて言った。

「じゃあ、パドさんはカウンターだけじゃなくて厨房にも入ってるんだね。凄いなあ、将来はそっちに進むのかな」

「はあ？ あんた何言ってるんだ、パドはあの店の……」

そこまで言ったニコは、なぜか口を開けるとにんまり笑った。

「まあいいや、ともかくあたしの料理スキルはお菓子限定なんだよ、それも簡単なやつだけ」

「でもあのクッキーすごくサクサクで、でもしつとりもしてて、ほんとに美味し……」

「だーかしらー！ その話はもういいよ、冷める前にさっさと食うぞ!!」

まくし立てるや勢いよくスプーンを動かし始めるニコを、ハルユキは我知らず微笑みながらしばらく見話めていたが、やがて自分もチキンカレーを山盛りすくうと口いっぱいに頬張った。ニンジンもジャガイモも不恰好で、少しだけ煮えすぎだったが、でも一人で食べる冷凍ディナーより何倍も美味しいと思えた。

二人とも一回ずつお代わりすると小型の鍋はきれいに空になったので、協力して後片付けをし、交番でお風呂に入り、ソファに並んで宿願を終わらせると、時間はあつという間に夜九時を回ってしまった。

ハルユキの平均的就寝時刻は十一時前後だが、ニコが大きな欠伸をしたので、今日は僕も早めに寝ようと考えながら立ち上がる。明日はいよいよ文化祭当日なので、たっぷり睡眠を取っておくに越したことはない。

「ウチの母親、明日まで帰ってこないから、そっちの寝室使っていいよ」

ハルユキが言うと、バジヤマ代わりのロングTシャツ姿のニコは「ほわあーい」と二度目のあくび漏じりに答え、大人しく母親の寝室に向かった。廊下でおやすみの挨拶を交わし、ドアの向こうに小さな背中が消えると、ふうつとひと息。

反対側にある自分の部屋に入り、枕元の目覚まし時計をボイスコマンドでセットしてから、どきつとベッドに横たわる。以前は、睡眠時はニューロリンカーを外すようにしていたが、最近では付けたままのことが多い。理由は、ごくたまにだが、寝ている時にレゴオンの仲間たちからコールが入ることがあるからだ。大抵本ボケで妙な反応をしようが、それでも呼びかけには応えたい。夜半にふと心細くなり、誰かとの繋がりを感じてみたい気持ちは、ハルユキにもよく解る。

――ゆえにハルユキは、部屋の明かりを消し、窓を閉じ、意識が眼の隅に沈みかけた頃に

聞こえた声が、オンラインのボイスコールかと思ってしまった。

「おい、もう寝ちったのかよ、タロウ」

「は……う、ううん、まだ起きてまふ……」

「……そんなら、もっと話あんだけど」

「はひ、どうぞ……」

暗闇の中で目をしばしばさせながら、ネットワーク越しであるはずの会話の続きを待っている――。

ぼすんー という音とともにいきなりベッドが揺れたので、ハルユキは仰天して三センチほど飛び上がった。

「のわ!? な、ななナイトライト、オン」

慌てて電夜灯を点け、体を左に回転させると、目の前に輪う方なきニコの姿があった。右手で頭を支えて横向きにベッドに寝そべり、なぜか不機嫌そうな顔つきでハルユキを睨んでいる。

――もしかして、ボイスコールじゃなくてダイブコール? これはニコのアバター?

といまだ完全覚醒に至らない頭で考え、とりあえず触ってみようと右手を伸ばしかけたが、寸前で爽やかな石鹸の香りに気付く。アバターにも匂いを設定することはできるが、この香りは明らかに有田家浴室に常備されている石鹸のものなので、それをわざわざニコが再現する理由がない。ということ……

「……は、本物？」

「つたりめーだろ」

「……な、なんで……あ、そっか、大丈夫だよ、母さんの部屋はオバケ出ないよ」

「ちっげーよー」

左手でハルユキのお腹に一撃叩き込んでから、ニコは言った。

「あのさ、考えてみたら、あんた野心なことをさっばり話してなくねえ？」

「か、野心？ というと………」

柔らかいオレンジ色の間接光に照らされるニコの顔を数秒間まじまじと見てから、ハルユキはやつと思ひ出した。確かに数時間前、カレーを作る前に発言している。「長い話になるからご飯食べながらにしよう」と。そしてその長い話とは——赤のレギオンを、神獣級エネミーで襲撃した、謎の黒いアバターについて、だ。

「あ……あつ、そうかー そうでしたー」

ベッドの上で体を起こし、本館的に正座に移行して、ハルユキは頭を下げた。

「こ、ゴメン、忘れてた！ べつに誤魔化そうとしたわけじゃないんだよ、ただその、カレーが意外に美味しかったから食べるのに夢中になっちゃって……。もちろんちゃんと話はずるよ、じゃあえーと、とりあえずリビンダに……」

「めんどくせえ、いいよこのままで」

腰を浮かせかけたハルユキの言葉を通り、ニコはごろんと仰向けになると瞳を閉じた。

——このままと言われてもか、としばし葛藤してから、ハルユキもやむなく再度座り直した。考えてみれば、五日間もこのベッドで一緒に寝ているのだ。二回目ならいいのかと言われればいいはずがないが、赤の王の仰せとあらば、従わないわけにもいかないような気がするようないないような——

「つつても、実は、あたしもある程度見当はついてんだ」

不意にニコがそんなことを囁いたので、ハルユキは思考を中断して顔を見た。

いつの間にか奪取した枕に、リボンを解いた赤毛を載せたニコは、両眼を天井に向けたままそつと唇を動かした。

「あの偽ロータスの正体じゃなくて、目的のほうだけだな。あいつは多分、プロミのエネミー狩りを形勢しようとしたわけでも、あたしを狩ろうとしたわけでもねえ。狙いは多分……見る、ことだ」

「み、見る……？」 觀察……ってこと？」

「そうだな。もつと言えは、戦力評価……プロミ・メンスの主力メンバーと、そしてあたし、スカーレット・レインの、な……」

そう口にした瞬間、ニコの——二代目赤の王の顔に、今日エレベータホールに現れてからいちばん鋭しい表情が浮かんだ。ハルユキは一度息を吞み、小声で確認した。

「で、でもニコ、問題の黒アバターは、戦闘が始まる前に地面に潜って消えた、って……」

「ああ、消えたけど、恐らく逃げたわけじゃねえ。どこか近くから、あたしたちがエネミーと戦うのを見てたんだ。——くそっ、最初からそうと気付いてりゃ、使わなかったのに……」

「使う……？ な、何を？」

「あたしの強化外装……（インビンシブル）の、いままで隠してた力を、さ」

その言葉の意味を理解した時、ハルユキは自分の体がぶるっと震えるのを止められなかった。二代日本の王の、（不動要塞）という二つ名の由来となつてゐるのは、もちろん武装コシテナ群を全展開した時の巨大な姿だ。（インビンシブル）なる固有名のそれはニコがレベルアップのたびに段階的に獲得していった強化外装の集合体であり、現在の加速世界で最大の遠距離火力を持つと評される。ハルユキも、要塞モードのレインと戦つたり肩を並べたりしたことは何回かあつて、その圧倒的威力は我が身で嫌というほど味わつてゐる。

しかし、ニコの言葉を聞く限りでは、あの外装全展開状態ですらもレインの全力ではない……まだその先がある、ということになる。

「隠してた……力……って、どんなの……？」

思わず身を乗り出し、試ねたハルユキに、

「教えるか、ばーか」

ニコは当然ながらそう答えたが、すぐにこく薄い笑みを滲ませて続けた。

「つて言いたいとこだけど、あんたにもちつとは関わりがあるからな……。——ほら、半年前の鐘事件の時、あたしとあんたとロータスとハカセで他行行って、バナナ野郎に待ち伏せ喰らったろ？ あんとき、外装野郎だはいいいけど黄色の奴らに張り付かれて、ブザマなところ晒したからさ……」

「で、でもあれは仕方ないよ、あんな人数がいたらどうしたって接近され……」

「仕方ないで済むほど甘え世界じゃねーことくらい、あんたももう知ってるだろ！……んで、あたしもちつとお山で修行してきたってわけだ。あんたを見習って、な」

「修行……ど、どんな……？」

「ヒント終了！——ともかく、あたしは昨日、くそでっけえ神獣級エネミーから仲間を逃がすためにその奥の手を使って、そいつを見られた……。へたすると録画までされちゃった、つてワケだ」

そこで一度口を閉じると、ニコは再び寝返りを打ち、正面からハルユキを見た。

「——あたしの話は以上だ。じゃあ、今度こそあんたにも聞かせてもらうぜ……。あの、影みてるな偽ロータスの正体を、な」

「……………うん、解った。あくまで予備だけど……」

ハルユキは頷くと、まずは正座モードを解除しようとした。しかし早くも両脚が軽く痺れていて、こてんと転がってしまふ。もう一度起きようかとも思ったが、ニコがまるで気にしてい

ない様子なので、ベッドに横たわったまま大きく息を吸い、その名前を口にした。

「ニコが見た黒いデュエルアバターの名前は——『フラック・バイス』。いま加速世界に『Sキット』をばらまいてる集団、『加速研究会』の副会長を名乗ってる」

「……………フラック・バイス……………」

小声で繰り返すニコの表情を、ハルユキは至近距離から凝視した。

ハルユキがいままで、バイスの名前をニコやバドさんにも伏せていたことには理由がある。怖かった……嫌だったのだ。同じ『フラック』のカラーネームを頂くあの後援アバターが、敬愛する黒の主とわずかにでも関係があると思われるのが。

沈黙に耐えきれず、ハルユキは自分から口を開いた。

「ニコ。ブレイン・バーストで、複数のアバターが同じ色になることがあるのかどうか、知ってる……………」

「……………あたしの知る限りじゃ、『色かぶり』が発生したことは一度もない。クロウ、あんたはそのフラック・バイスの名前を、体力ゲージかマッティングリストで確認したのか？」

「え、ええと……………」

言われて、これまでの遭遇シーンを脳裏で順に確認してから、ハルユキは小刻みにかぶりを振った。

「——ない。バイスと出くわしたのは、基本的に全無無制限フィールドで……………唯一の例外が、

ヘルメス・コード競走レースだけど、あの時は現れてすぐ消えたからゲージが出なかった……。僕もメガビュのみんなも、バイスの名前をシステム表示で見たことはないよ」

「ブン、なるほどな。なら可能性としては、そのブラッタ・バイスつつう名前は……ほんとのアバターネームじゃなくて、ただの自称ってことも有り得るわけだな」

「えええ!? ブラッタ……（純色の黒）を、勝手に名乗ってるってこと!?」

「それが事実なら、もう自称どころか憎物（オウモノ）つつうレベルだよな」

ちっ、と軽く舌打ちしてから、ニコはヘルムキの体越しに鋭い視線を投げかけた。つられてそちらを見ると、窓から差し込む青白い夜光がビルトインの書架に複雑な影を落としていた。視線を戻し、ヘルムキは説明を再開した。

「……ブラッタ・バイスは、体の薄板（ウツク）を自在に変形させて、他のアバターの影絵を作る能力を持つてるんだ。僕も、先輩になりましたあいつに騙（だま）されそうになった。それと……ステージにできる影に沈み込んで、その中を自由に移動する力もある。だから、ニコたちが見た、（エネミーの背中から飛び降りて地面に突き刺さった）っていうのは……」

「ステージに大穴開けたわけじゃなくて、影に沈んだだけだった……ってことか」

「うん。だから、影を伝って移動して、近くからニコの戦闘（せんとう）を観察してたってことは……十分に有り得ると思う。付け加えれば、あいつはブレイン・インプランド・チップの力で知覚（ちかく）を任意に減速（げんそく）できて……だから、無制限フィールドでニコたちを待ち伏せられたんだと思う」

「そり……か。加速研究会……のヤツだったのか……………」

傾いたニコは、徐々に全身の力を抜き、ぼたりと仰向けになった。数秒してから、囁き声で話し始める。

「……………きつきの、色かぶりの話だけだな。あたしは……何度か考えたことがあるよ。自分の色を渡せるアイテムはないのかな、ってさ」

「い、色を……渡せる……………」

「別に、遠距離攻撃に越きたから青くなりたいとか、支障したいから黄色になりたいとか思ってるわけじゃねーよ。ただ……あたしの色が、もう少しだけ濃くなればな、って。緋色から……………純粋な、赤色に」

「に……ニコ……………」

ハルユキは、驚きのあまりただ名前を呼ぶことしかできなかった。

デュエルアバターに与えられる色は、システムがランダムに決定したものではない。B.B.プロダムが深層イメージを読み取り、ひとつの色として表象するのだ。ゆえにカラーネームは、パーストリンカーにとって、ある意味では本名にも等しいものとなる。

そんな、自分の《心の色》を否定するに等しい言葉を口にしたニコは、ベッドの上で体ごと縮めるようにして俯いた。唇が何度か震え、いつそうかすかな声がかき落れる。

「……半年前、黄の王イエロー・レディオは、災禍の鎖を解き放ってまであたしをおびき出し、

レベル9サドンデスルールを利用して加速世界から退場させようとした。その理由……動機は、なんだと尋う……？」

「それは……もちろん、自分がレベル10になるためじゃ……」

「多分、違う。あいつは、口で何を言っている、心の中じゃレベル10なんかこれっぽっちも望んでないんだ。あいつはただ、あたしが目障りだから狩ろうとした。それだけなんだ」

「でも……赤のレギオンと貴のレギオンは東京の西と東で、領土もぜんぜん接してないのに……」

「邪魔なのはプロミじゃなくて、あたし個人さ。レディオには……我恨ならぬいんだ。赤じゃない、緑色のあたしが、純色の王を名乗っているのが。そして多分それは、他の王連中も多かれ少なかれ思っていることなんだ……」

「そ、そんな……」

ハルユキはわずかに上体を浮かせ、懸命に首を横に振った。

「そんなこと、先輩は絶対、絶対……」

するとニコは仄かに苦笑し、なだめるようにハルユキの胸に左手の指先を触れさせた。

「ああ、ロータスは例外だ。なんだってあいつは王連中をまとめて狩ろうとしたんだからさ。すげー賢だよな。ほんとにすげえよ……」

消える寸前、その声は深くわなないた。小さな手がそつとハルユキの右胸に押し当てられ、

バジャマ代わりのTシャツを穿った。

「……………あたしが、先代の跡を継いでプロミの頭首になったのは、半分拍子上げられたみたいなもんだけど……………でも後悔はしてない。レギメンはいい奴ばかりだし、そのおかげでバドとも出会えたんだしな。だからあたしは、今のプロミを……………練馬エリアを守りたい。けど……………」

そこで言葉を途切れさせると、ニコはシーツの上で体をすらし、ハルユキの胸に強く顔を押し当てた。

「……………自分でも、もう解ってるんだ。あたしは……………あたしは、弱い！」

振り絞るような声に、ハルユキは心臓を撃ち抜かれたかのような感覚を味わった。必死に手を伸ばし、ニコの強い左肩を包みながら言う。

「そ、そんなことない、ニコはあんなに強いじゃないか。そうじゃなきゃ、レベル9になれるはずが……………」

「なったから、解るんだ。オリジネーターの青の王と緑の王だけじゃない、紫の王も黄の王も、そして黒の王も、一対一の本気で戦ったら、あたしじゃ……………勝てない……………」

顔を上げたニコは、濡れた瞳をハルユキに向けると、泣き笑いのような表情で続けた。

「……………教えてやるよ。半年前、チェリーが災禍の鎧に取り付かれた時、あたしは強引な手段であんたのリアルを盗って、この家に乗っ込んだ。あんたの飛行アビリティで、鎧を摘まっても

らうためだったけど……でも、ほんとに、それだけじゃないんだ。あたしは……復活した黒のレギオンに、加速世界に帰還した黒の王ブラッタ・ロータスに、心の奥底でビビってたんだ。

最初に攻めてくるならきつと練馬だって……黒の王が自ら乗り込んできたら、あたしはきつと勝てない、って……。だから……まだレベルが低いシルバー・クロウのリアルを割って……攻撃されないように、保険かけとこうって、そんな、車注で、小技いことを、あたしは、考えて……

見開いた大きな瞳から、ついにぼろりと大粒の涙が零れた。それでもなお口許には自嘲の笑みを刻んだまま、ニコはか細い声を連ねた。

「そしたら……そしたら、さ。あんたも、ロータスも、いい奴で……あたしの話をちゃんと聞いて、ここに泊めてくれて……一緒に飯食べて、一緒にゲームして、一緒に寝て、それがすごく嬉しくて、安心したけど……でもあたし、あの日からずっと、あんたやロータスに離れなくていい。自分が強いフリして、対等なクチきいてきた。でもほんとにあたしは、純色じゃない、紛い物の赤なんだ。王を憎みしてるのは、あたしも同じなんだ！」

「ち……違う、違うよ、絶対違う!!」

右手を乗客の背中に戻し、強く引き寄せながらハルユキは叫んだ。

「ニコは紛い物なんかじゃない。誰よりも強くて、勇敢で、立派にレギオンを率いてるじゃないか！ 今日の領土戦で会ったプレイズさんたちだって、ニコのことをすごく信じて、懸っ

でた。そんなニコが、偽物（ごぶつ）なんてこと、あるはずが……」

「でも、あたしじゃ、あいつらを、守れない!! チェリーを……たったひとりの（義）さへも守れなかった、あたしには!!」

血の滲（にじ）むような声で叫んだニコは、もう一度額をハルエキの胸に押し当てた。Tシャツを握る小さな拳（こぶし）に、自らを割り砕（くだ）かんばかりの力が込められる。

「……感じるんだ。加速世界に、何かが起きようとしている。ISSキットとか、メタトロンの出現よりも大きな何かが。六大陸オンの相互不可侵条約だって、たぶん永遠には続かない。もし……レディオオや他の王（おう）がもう一度、もつと本気であたしとプロミを潰（つぶ）しにきたら……」

「それでも……それでも、ニコは負けないよ! そのために、あんなに無敵な（要塞モード）より強い力を、頑張（がんば）って身につけたんだろ?」

「レベル9同士が、本気の殺し合いをしたら……最後の最後には、あらゆるルールが吹っ飛び、何でもありの心意戦になるんだ。あんたも知ってるだろ、あたしが攻撃型の心意技を使えないことを。……あたしのデュエルバターを生み出したのは、恐怖なんだ。ハリネズミみたいな武装の殻（か）に包まれて、外の世界を必死に遠ざけようとしている……それがあたしの本質なんだ。心意でどんなに射撃や逃げ足を強化しても、それじゃ……奴らの（破壊の心意）には、絶対勝てないんだ……」

徐々に語気を弱めながらそこまで言い終えたニコは、左手の力を抜くとばかりとシーツに落

とした。寒さに耐えるかのように、両手と臍を抱え込んで小さく丸まる。

もつともつと、幾らでも言葉を掛けて動ましたいのに、ハルユキの口は強張ったまゝ動かなかった。確かにニコはかつて、ハルユキとタタムの前で言ったことがある。自分に使える心意技は《射殺拡張》と《移動拡張》に属するものだけで、《攻撃拡張》と《防御拡張》の技は習得できない、と。

それは、実のところハルユキも同様だ。現在習得している《光線剣》と《光線槍》は射殺拡張の、そして《光速翼》は移動拡張の心意技で、攻撃力・防御力を強める技は一つもない。

にもかかわらず——ハルユキは、大きく息を吸うと、言った。

「……なら、僕が守るよ」

右の掌が触れる華奢な背中が、かすかに震えた。

「ニコがピンチになったら、いつでも飛んでいく。それで、オリジネーターもどきるくらいの破壊の心意で、誰だろうとぶっ飛ばす」

「……………あんたに、そんなの使えんのかよ」

密着していなければ聞き取れないほどか細かったが、それでも少しだけ拳銃の調子を取り戻したニコの言葉に、ハルユキは深く頷いた。

「ネガティブパワー比べなら誰にも負けないよ！ 王どころか、対戦ステージ丸ごと大爆発さ



せて強制終了になっちやうくらいのがガ・デストロイな技を……まあ、これから開発するんだ
けど……」

「あのなあ、それじゃあたしも巻き込まれんだろ」

眩きながら、ニコは指こまらせていた体をゆっくりと緩め、顔を上げた。

両眼は赤くなり、睫毛にもたくさんのお水滴が溜まっていたが、口許には仄かな笑みがあった。左手を持ち上げ、今度はハルユキのはっぱたを軽く握む。

「……ほんと、単純な奴だなあ。これがウソじゃあ、あんたをプロミに寝返らせる作戦だったらどーすんだよ」

そう言つてにつこり笑った海城、両頬を銀色の光が転がり落ちた。宝石のように綺麗なその掌が、偽りの涙であるはずがなかった。

しかし、年相応の泣き顔を見せたのは一瞬で、ニコはハルユキの頬を放すと、二人の間を十五センチほどあった間隙を躊躇いなくゼロにした。素足の爪先がハルユキの脚に触れ、滑らかな額が左頬に押し当てられる。

「ん、あ、あの、ええと」

このベッドで一緒に寝るのは初めてではない、とは言つてもこれほど接近したことは皆無だったので、ハルユキは今更ながらに上すった声を出してしまった。しかしそれ以上何かを言ったり動いたりする前に、

「……………ありがとな」

という声が、唇の動きとともに伝わり、ハルユキの内部にしみ込んだ。頭がすうつと静かになり、上昇しかけた心拍も落ち着いて、やがて不思議な穏やかさがハルユキを包んだ。

「……………うん」

肯定なのか否定なのか自分でも解らない回答を口にしてから、ハルユキは無意識の動きで右手を下ろした床毛に触れさせ、そつと撫でた。ニコはいつそう全身の力を抜くと、ごくナチュラルな声で囁いた。

「こんなこと、バドにも言えないからさ……ごめんな、色々吐き出しちゃつて」

「いいよ、話し相手くらいなら、嫌々でもするからさ……あ、もちろん、守るって言ったのも本気だけど」

「ふふ、期待してっからな、わりとマジで」

笑み混じりにそう答えると、ニコは一瞬だけ上目遣いにハルユキを見てから、すぐに顔を戻して言った。

「……………いっぱい話聞いてもらったお礼に、ついでに教えといてやるよ」

「え……………何を？」

少しだけ首を傾けると、思いがけない言葉が返ってくる。

「あたしや、バドや、ネガビユの女どもが、あんだのことをかまう理由」

「は……はい？」

ばちくりと瞬きしてしまいが、実のところそれは少し……いやかなり興味のある話だ。なぜならハルユキは今も、レジオンの女性陣に好意的に接して貰うたびに、心のどこかで『どうしてこんな僕を』と思っでしまっているからだ。

しかし、少し間を置いてからニコが発した言葉は、これまた予期だにしない内容だった。

「これは、言葉で言っても伝わらねーかも知れど……あたしたち女性型のバーストリンカーは、現実世界にいる間はいつも、ほんの少しだけど（悲憤）を感じてるんだ。さっきあたしと言ったのとは違う種類の」

「きょう……ふ？ 何に、対して……？」

「そうだな……他の人間、もっと言うとも現実世界の男性型に対して、かな」

「え……えむがた、って、男のこと？」

「ああ。加速世界のデュエルアバターにいる時、あたしたちは硬い装甲に守られてる。F型でもM型と同等以上に戦えるだけの力を持ってる。でも、対戦が終わって現実世界に戻った瞬間、その力は消える。バーストリンカーとして長い時間を過ごしていればいるほど、生身の自分がいかに弱く無力か……それを感じちまうんだ」

「……生身の……無力さ……」

先に言われたとおり、確かに今のハルユキにはなかなか感覚的に理解しづらい言葉だった。

もちろんハルユキだって、現実世界にいる時、シルバー・クロウみたいに空を飛べればと想像したことはある。クロウのように強ければ、と思ったことだってあるかもしれない。しかしそれは切実なものではない、単なる夢想で……。

——いや、そうではない。ハルユキは、生まれて初めて加速したあの時、強く強く望んだはずだ。

梅郷中学校のラウンジで、黒霧殿にBBプログラムの持つ驚異の力を教えられたハルユキは、まっさきに訊ねた。「フレイン・バーストを使えば、ケンカに勝てますか」と。あの時ハルユキは確かに、自分を虐める梅郷をとことんまで叩きのめしたいと渴望した。生身の自分の無力さを、痛いほど知っているからこそそう思ったのだ。

もし黒霧殿が、あの不良たちを速やかに排除してくれなければ、ハルユキは今も望んでいたかもしれない。現実でもクロウのように戦えれば、と。そしてそうできないことに、いつも悔れを感じていたかもしれない……。

——と、そこまで考えてから、ハルユキはやっと現在の状況を再認識した。ごくん、と生聲を呑んでから、こわこわ訊ねる。

「え……じゃあ、ニコは今……僕にも、その恐怖を……？」

「そこだよ、あたしの言いたいのは」

辛いニコは、「ハルユキお兄ちゃん、コワイ……」的な心臓に悪いモードチェンジを見せる

ことなく、逆にハルユキの頬をばよばよつつきながら囁いた。

「……あんたは、あたしに恐怖をまるで感じさせないんだ。多分、パドや、ロータスや、レイカーやメイダンにとってもそうなんだと思う。これって、けっこう凄いことなんだぜ……何せあたしは、学校の敷地内で、同じクラスの男子と何かのはずみで二人きりになったりするだけで、ちよつとだけ不安を感じちまうからさ。何をされるはずもないって、頭では解つててもダメなんだ」

「……ソーシャルカメラがあつても、怖いのか……?」

「ああ。どうしても、感じずにいられないんだ。自分が装甲に守られてないこと……。必殺技も、強化外装も、何ひとつ持っていないことを。加速世界で積み重ねた時間の長さに比例して、その恐怖も大きく育ちまう。いずれは、現実世界にいる時はいつも、この怖れにつきまとわれることになるかも……」

「そ、そんな……」

ハルユキは、ニコの表情を少しでも減らせそうな言葉を懸命に探した。だが、さっき何度も口にした、「ニコは強いよ」という励ましも今はかりは意味を持たない。加速世界で最強に近い力を得ているからこそ、現実世界で不安を感じてしまふのだから。

何度も口を少し開いては聞かせる繰り返している――。

その様子を眺めていたニコが、なぜかくすすすと嬉しそうに笑った。

「いいんだ、なにも言わなくて。さっき教えたろ、あんただけは怖くない。って。それだけじゃない。あんたと……ハルユキと一緒にいると、あたしの中に溜まった恐怖がすうって小さくなってんだ。くっついてると、安心できるんだ。縋り固まった負の心意が……あつたかい光で、浄化されてくみたい……」

「……………え、えと……………」

最早どう反応していいかも解らないハルユキに、ニコは言葉どおり全身を預けるように寄りかかり、続けた。

「さっと、ネガビュの古書庫中も同じこと感じてるよ。このあいだのカレーパーティーん時の、あいつらの顔とさたらさ……完全に警戒解いて、楽しそうに笑いやがつて、まったく……」

「……………そ、そうなのかな……………」

自分ではまったく自覚のない話であり、ことに黒書庫や親子に因してはびしびし厳しいことを言われるシーンばかり悪い出されるので、ハルユキは首を知れた。そのまま、ニコの台詞の意味をしばし考えてから、ん？ と眉を寄せる。

「えっと……………ニコ、それってつまり、僕が見た目からして絶対安全、人畜無害っぽいキャラだから、ということ……………」

だとすればそれは一途リアルな顔としてどうなのか。などとガラにもないことを考えかけたところで、ニコの両手が伸びてきて、ハルユキの顔を両側から挟んだ。

いつものように、左右に思いつきり引つ張られると予測したのだが、ニコはその体勢を保持したまま機やかな笑顔で言った。

「違うってば。このまあい顔の身身……心の話さ。ハルユキはいつも一生懸命に、全力であたしたちのこと考えてくれてるって解るから、そばにいと安心できるんだ。——あたしだって、これでも思ってるんだ……いつか、ちゃんとお礼しないとさ、ってさ」

「そ、んなこと……僕は別にその、具体的には何も……」

「いいんだよ、近くにいてくれば、それだけで。だから……変わらないでくれよな。レベルが上がって、ハイランカーになっても、お前はお前のまんまでいてくれよな。そしたら……たとえ、あたしがいつか……」

そこで言葉を切り、ニコはハルユキの頬に添えていた両手を首許まで動かした。黙いて顔も近づけ、まるでハルユキの心臓の鼓動を聞こうとするかのように触れさせると、微笑んだまま瞳を閉じた。

——多分、明日の朝起きたら、ニコはいつものニコだろう。涙はもちろん、弱みなんかひとつも見せない、絶対火力の赤の王に戻っているだろう。

——でも、僕は忘れない。ニコは赤の王であると同時に、二つ年下の、ひとりの女の子なんだってことを。そして、そんなニコを、守るって約束したことを。

緩やかに水位を増していく颯りの酒に沈み込みながら、ハルユキはそう心に刻んだ。目を瞑

ると、かすかな息づかいが耳に届いた。聞き入るうちに思考が狂散し始め、途切れるその寸前、音源が少し移動して、頬に何かが触れる感覚があったような気がしたが、それが事なのかどうかハルユキには解らなかった。

7

気象庁の宣言を待たずして梅雨が明けってしまったかのような、爽やかな朝日と微風を、ハルユキは体中で浴び、吸い込んだ。

自宅マンションを出てすぐの、環状七号線の参道だ。音波なら高田寺駅に向かう人流が途切れない時間帯だが、今日ばかりは閑散としている。もちろん、日曜日だからだ。

代わりに、ハルユキの隣には、まだ半官服状態と思しき赤毛の少女がひとり。「ふわああー」という鳥事な大あくびを微笑ましい気分で隠れていると、いきなりギロツーと一睨みされてしまう。

「レディーのあくびをタダ見してんじやねーよ」

「す、すみません……」

ほらね、いつもの赤の王でしょ！ などと考えつつ首を縮めたハルユキに向かって、ニコはずいっと右手を突き出した。

「なら、さっさと消えせ」

「え、ええ？ あくび見物料？」

「ちっげー……よー 決まってるだろーが……あんたんとこの、文化祭の招待パスだよー」

「あ、そ、そっか……………って、え、ええええ!? 来るの?」

「昨日、最初に言っただろー あんたン家に来たのは、領土戦のこと謝るのが三分の一、EK未遂のこと訊くのが三分の一だって」

「……………で、残り三分の一が、今日の文化祭…………?」

「イエスー ほら、早くバス二枚ー」

ニコが、突き出したままの右手の人差し指と中指だけを器用に動かすので、ハルユキはまたしても目をぱちくりさせた。

「え…………二枚? ニコと、あとは誰が…………」

その時、環七の反対車線を、省エネEVのそれとは一線を画す、実にかっこいいモーター音が通り過ぎた。反射的に向けた視線がちらりと捉えたのは、見覚えのあるディーブ・レッド。音源は一度視界から消えたが、すぐ先の信号で高速度ターンを決め、こちら側の車線を北上してくる。

りゅううーん、と頭生ブレーキの作動音を響かせながらハルユキたちの目の前で停止したのは、以前ハルユキも乗ったことのある大型エレクトリック・バイクだった。メッシュジャケットにジーンズ姿のライダーは、もちろん赤のレギオンの副長、ブラッド・レバード。

バドさんは、左手でヘルメットのシールドを跳ね上げると、その指をひらっとハルユキたちに振ってみせた。

「Hi」

「く、ども、おはようございます」

「おはよ、バド。わりーな、ひこっかわの車線で待っとけばよかったな」

「NP、この国がいまだに左側通行なのが悪い」

さらにと体制を批判してから、バドさんはハルユキに手を差し出した。後ろに乗り、という意味ではもちろんあるまい。

梅郷中文化祭の招待状は、生徒一人あたり二通配布される。ハルユキはすでに一通を日下部^{ひげべ}に渡しているが、残りは使うあてもなく放置したままだ。確かに一度はニコとバドさんを招待しようかと思っただが、その後、世田谷区^{せたがや}下北沢にある学校の文化祭が襲撃——もちろんバスストリンカー的な意味で、だが——されたという話を聞き、意志決定を保留したまま今日を迎えてしまった。

しかし考えてみれば、襲撃グループのリーダーであるマゼンタ・シザーは世田谷第二エリアから東に侵攻すると宣言しており、真北にある梅郷中はまるで別方向だ。今日の文化祭が狙われる可能性は限りなく低い。

残る問題は、ハルユキが輪に加えてニコとバドさんまで招待したと知った時のネガ・ネビュラスメンバーの反応だが……全員が、思わぬ顔ぶれの来校を喜んでくれる可能性だってあるのではなからうか。いやいやそれを言うなら、全員がリアルでは顔を合わせないまま文化祭が終

了する確率だってないとは言えない。何せ黒雪姫もタカムもチユリも、自分の所属グループの出し物で手一杯のはずなのだから。

というような思考を瞬時に導かせ、ハルユキはやや強張った笑顔ながらも頷くと、仮想デスタトップに指を走らせた。

いかにバイクが大きくとも法的に三人乗りはできないので、ニコたちとは開場後に現地で合流することにして先行してもらい、ハルユキは後参で登校した。

普段は頭の芯にわずかな眠気が残っているのだが、今日はお祭りの高揚感に加えて、朝早く起きてクラス懸示ファイルの修正をしていたせいもあってすっきりした気分だ。ウィークデーとは雲間気の満ち道路を少し速めのペースで歩き、青梅街道を横断して少し進むと、行く手に梅郷中の正門が見えてくる。

門柱のすぐ内側には、文化祭実行委員会を中心とした制作班の力作である文化祭ゲートが誇らしげにそびえていた。今年のテーマは《時》であり、それに沿ってアナログ時計の文字盤をモチーフとしたデザインだ。ゴールドの合戦紙で仕上げられた見事な出来映えだが、制作班は今日の晴天に胸をなで下ろしていることだろう。

正門に近づくと、何種類もの生徒が記念撮影の順番待ちをしていた。普段は学校内での視界スタリーションショット保存は禁止されているが（もちろん黒雪姫を除く）、今日はエリアを脱って

許される。いまゲート内に並んでいる男子生徒たちの撮影終わりに素早く通過するべく、ハルユキがタイミミングダを計りつつ歩いていると――

「おつ、有田！ お前も入れよ！」

と大声で呼ばれ、危うくつまずきそうになった。見れば、右手を振り回す長身のボウズ頭は、同じタラスの石尾いしおというバスケット部員だ。その周りも二年C組の運動部系男子で、内心ウヒエーと思ってしまうが、ここで走って逃げないくらいの特長力はこの数ヶ月で身につけている――はずだ。恐らく。

下腹に力を込め直し、「う、うん」と答えながらゲートに駆け寄る。石尾たちはこの時間から早くもお祭りチンションに突入しているらしく、ハルユキを列に加えるや「イエーイー」とビースサイン。どうにか同じボーズで笑顔を作ることになったハルユキは、撮影者と交替でタラスメートたちを撮ると、画像を交換した。

「バスケットはフリースローゲームやってっから、後で来いよな！」

と叫ぶ石尾に「行くよー」と答え、その場を離脱。昇降口に向かって歩きながら、ふうーっと長く息を吐く。

この後の予定は、まず教室でタラス展示用プログラムの起動と最終確認。九時半に文化祭が開催するので、正門までニコとバドさんを追えに行く。十時前には日下部ひげ部員も交校するはずなので合流して、三人をチユリの所属する女子陸上部のタレーブ屋あたりに案内――

「ここでようやくハルユキは、そのスケジュールだと輪とニコたちが不可避的にリアルで対面してしまふことに気付いた。当然、双方を紹介せねばならないが、いったいどう言えばいいのか。「こちらはグレウオのアッシュ・ローラーさん、こちらはプロミのスカレット・レインさんとブラッド・レバードさん」などと説明すれば、一瞬で空気が凍り付く……だけでは済むまい、恐らく。」

だからと言って、一方を案内してもう一方を放っておくのもあんまりな話だ。やはりどうにかして、互いにバーストリンカーだと悟らせないような紹介の仕方を工夫するしかない。

「……となると、友達のことって言うしかないよな……ゲーム友達、までいくと危険かな……ならばカレー友達……いやいや……」

懸命に考えつつ靴を履き替へ、廊下を第一校舎方面へと歩き始めたハルユキの背中を、誰かが後ろから軽く叩いた。

「文化祭の当日だというのに何を悩んでるんだい、ハルユキ君？」

「ええと、それが、後先考えずに招待状を渡しちゃいまして……」

「ほう？ 誰にだ？」

「はい、一枚が……って、わあ？」

胸をきく生徒会副会長の姿を視認し、軽く飛び上がってから高速で頭を下げる。

「おつ、おはようございます(オオウラナヒ)先輩！」

ところが学内ローカルネットへの侵入すらなかったからな。——ただ、噂では、昨日の土曜日に
も……」

そこで一度口を閉じると、黒雪姫は背中を廊下の壁に預け、鋭い視線を南——世田谷方面へ
と向けた。

文化祭開幕まで一時間を切り、校内の空気はいよいよ期待と緊張がないまぜになった高揚感
に満たされつつある。いまだ準備中らしいグループが殺気だった表情で走り回る傍らで、笑顔
の生徒たちが頭を寄せてホロウインドウを覗き込み、巡回経路を検討している。

ハルユキとしても、去年の文化祭ではいじめっ子たちに出くわさないよう終日ビクビクして
いたので、今年こそ全力で楽しみたいという気持ちほもちろんある。だが今は黒雪姫の言葉が
気になり、全身を緊張らせつつ訊き返した。

「ま、まさか……昨日も、下北沢近くの学校に襲撃が……？」

「いや、調べたところ、世田谷第一エリアにある中学、高校で、昨日文化祭が行われた学校は
存在しなかった。だが……マゼンタ・シザーとその配下がエリアに出没したのは事実のようだ。
彼らが何の目的もなくグレート・ウォールの領土に侵入するとは思えないし……」

「となると……次の襲撃のための下見、とかでしょうか……」

「可能性はあるが、この時期に文化祭を行う学校はかなりレアだからな」

「普通は九月、十月ですもんね。梅郷中はなんで六月なんでしょうね？」

「それは昔から我が校に語り継がれる由緒ある話だ。梅の一字と梅雨をかけたという説もあるが、だとすれば取えて雨の多い時期に設定したことになり適不尽感まりない。しかしその一方で、文化祭の日は六月なのに不思議に晴れるという話もあつてこれまた大いに矛盾だということ……いや、そうではなくて」

喧騒いで脱線を修正すると、黒雪姫は美談をひいっとハルユキの顔に寄せて囁いた。

「つまり私が言いたいのは、この時期に文化祭を行う学校がごく少数であるならば、マゼンタたちが今日この梅郷中まで遠征してくる可能性も考慮すべきということだ。招待状も、少数ながらネットで取引されているようだしな……」

「へえ、アドホック提議じゃないと転送できないのに、ですか？」

「その程度の制限ならいかようにも迂回できるさ。私は住基ネット認証も導入して、招待客を生徒の家族・親族のみに制限すべきだという意見書を毎年上げているんだが、その都度管理部に却下されてな。ま、今年に取つて言えば、ルーズな制限のおかげで親子や隣、あきらも招待できたんだから良しとするがね」

「あ、よかった、師匠たちは先輩が招待してくれたんですねー」

「……ふうん？ やけに嬉しそうな顔をするじゃないか。やはり、キミが誰を招待したのかもこの場で聞いておくべきかな」

黒雪姫が少々じっとした目つきでそんなことを言うので、今度はハルユキが喧騒いして話

を本筋へと戻した。

「え、ええと、ともかく襲撃には要注意、ということですね！ いちおう、レギオン全員が事前にタフダ登録しておいたほうがいいですね。じやあ僕はせん……」

「私と楓子、静とあきらでよからう。タタム君はチエリ君と組んでもらうから、キミは招待したお友達さんの誰かと組みたまえ」

「……ハ、ハイ、了解です……」

こっくんと頷くや、黒雪姫の視線が氷属性を告げる。

「ほう。やはり招待したのはバーストリンカー、しかも他校の生徒か。これは紹介して貰うのが楽しみだな」

「むぐつ……いや、その、それは……」

あつさり誘導尋問に引っかけかり、冷や汗を滂ませたところで、九時のチャイムがハルエキを救った。

「あつ、ぼぼぼく、タラス展示の最終チェックに行かないとー そそそれじゃ先輩、また後ほど連絡差し上げますのでー」

「そんな逃げ方ができるようになるとは、キミも成長したものだな」

なおもタールにそう許してから、黒雪姫はやれやれというように微笑すると頷いた。

「では、また後でな。二年組の展示、必ず観にいくよ」

「は……はい、大したもんじやないですけど、でもお待ちします！ それでは！」

最敬礼してから振り向くと、ハルユキはダッシュで二階への階段を上った。

教室前の廊下は、カラフルなプラスチックモールや合成紙テープで飾り付けられ、すっかり平日常の装いだっただった。二年A組の出し物はおばけ屋敷、B組は喫茶店と文化祭の定番だが、それだけに集客力も高そうだ。

対してハルユキの属するC組は、「二十年前の高田寺」という題目の作り型展示を行うのだが、内容も飾り付けも地味のひとつである。クラス展示担当がたった七人しか残らなかったため、端から大掛かりな企画は不可能だったという事情はあるにせよ、あまりにヤル気のない出し物では見に来てくれるお客さんに申し訳ない。

ゆえにハルユキは、メンバーの了解を取ったうえで展示に多少の工夫を追加していた。足早に教室へ駆け込むと、すでに他の六人は集合済みで、やべつと言を締める間もなく声が飛んできく。

「有田くん、おそーい！」

と叫んだのは、生沢という、C組のクラス委員長を務める女子生徒だった。書道部に所属しているが、人数が少ないクラス展示室も自主的に手伝ってくれているという、大変マジメでいい人である。

生沢は、横並びにした髪を一振りしてから更にまわし立てた。

「展示ファイル修正したいって言ってる持ち帰っちゃったから、起動できるの有田くんだけなんだよー 早く動作確認しないと開場に間に合わないじゃない！」

「ごっ、ごめ……」

フルパワーで謝罪しかけたハルユキの肩を、横からぼんぼんと叩く者がいた。岡という、髪を校閲ぎりぎりまで脱色した男子生徒で、こちらは重々たる煉宅邸だったはずだ。

「まあまあイインデコ、遅刻したつっても三十秒じゃんよ。有田っちも色々忙しんだよ、さっさと教館んそこ通りがかったら、副生徒会長と……」

「わー！ は、早く起動チェックしようしよう！ すぐ準備するからー」

試みて割り込みをかけると、ハルユキはまず教室を見回した。机と椅子は全て運び出され、代わりに大型パネルでコの字状の通路が作られている。裏の七人がいるのは、通路の入り口付近だ。

そこまで確認すると、仮想アスタトップに手を伸ばす。今朝の七時前に修正作業が完了したばかりのファイルを、まずは学内ローカルネットにアップロード。次にA/R表示用プログラムを走らせると、視界に接続を受け入れるか誤ねるダイアログ窓が浮き上がる。

ハルユキと同時に、他の六人も指を動かし、イエスボタンを押した。すると、しゅんっという効果音が響き、教室全体の見た目が書き換えられた。

樹脂タイル張りの床は、灰色のアスファルト舗装に。天井は、すっきりと晴れた青空に。そ

して東西の壁と南の窓は消滅し、低いガードレールに変化する。その向こう側には広い道路が展開され、遠景には古めかしいビル群が生成される。

「お……おお？」

そんな声を上げた岡が、目の前のガードレールに駆け寄ろうとしたので、ハルユキは慌てて叫んだ。

「あ、危ないよ！　そこ、ほんとに壁だから！」

いちおう衝突防止のために、ガードレールの上に「ここに壁があります」という警告幕を浮かべておいたのだが、岡はそれを邪魔そうに避けると歓声を上げた。

「スゲー、車走ってっしー　しかもほとんどガソリン車……おわ、あれ35のGT-Rじゃね？　音かっけー」

いまにも不可視の壁に変換しそうな岡のシャツをハルユキが懸命に引っ張っていると、後ろで生沢委員長の声がした。

「なるほど、壁や床に3Dグラフィックをマッピングしたのね」

「う……うん、昔の写真を表示するなら、背景もそれっぽくしてみようと思って……」

「ということは、これは二〇一〇年代の風景？」

「前後十年くらい混ざっちゃってるけどね。みんなが集めてくれた当時の写真を立体化ソフトに流し込んで作ったんだ。車はアリモノのデータを……あ、もちろん写真も見られるよ」

岡から手を放し、ハルユキはガードレールと反対側の壁に向き直った。大型パネルも上書きされ、年季の入ったレンガ壁に変わっている。その表面に触れ、ウインドウを操作すると、無数の写真がボスター状に出現した。メンバーが自宅から、あるいは知人に当たって集めてきた、三十年前の高円寺界隈の風景だ。

当初予定していたのは、白いパネルの表面にこれらの写真をA/R表示するだけの展示だったのだが、それでは少々味気ないと、ハルユキは教室を丸ごと上書きすることを考えたわけだ。しかしいざ実行してみると、これではなんだか……

「……これじゃ、写真が脇役で背景が主役みたいね」

感じたとおりのことを生況に口にされ、ハルユキは反射的に首を縮めた。

「こ、このん、勝手なことして。写真の邪魔だったら、背景元に戻すから……」

「何言ってるんだよ、チローいいじゃん！」

と喚いたのは、いまだガードレールに貼り付いたままの岡だった。

「フルダーならいくらでも昔のクルマ運転できっけど、青梅街道走ってつとこ見んのもなんかリアルでいいなー。なあ有田っち、ハチロクねえの？」

「え……どっちの？」

「最初のヤツに決まってるだろー！ オレ実車見たことねーもん、いやこれもナマじゃねーけど、でも走らそうぜー」

「わ、わかったよ、ちよっとデータ探すから……でも、その前に生沢さんと……」

話を、と思つて再度振り向くと、委員長はもうそこにいなかった。他の班員四人と一緒に南側のガードレールに移動して、道路越しに見える街並みを見上げている。

その隣まで歩き、恐る恐る話し掛けようとしたその時、生沢が左手を持ち上げて南東方向を指差した。

「見える？ あそこ、十二階建てのマンション」

頭を向けると、現在より全体的に少し低めの街並みから、吉びた集合住宅が頭を突き出して
いる。

「へ？ う……うん、下の方が見えないから階数は判んないけど……」

「十二階建てなの。あそこ、十階に、私、昔住んでたんだ。とっくに引越して、マンションも建て替えられちゃったんだけどね」

「へえー、そうなんだ……」

と、答える以上のことは何もできずに固まっていると、生沢は体ごとハルエキに向き直り、
言った。

「ありがと、有田くん。私、人数を言い訳にして、クラス展示はとにかく出し物を作ればそれでいいやつて考えてたみたい。でも、これなら、お客さんもきっと喜んでくれると思う」

「あ……じゃ、じゃあこれ、このまま使ってもいいの……？」

「もちろん、ねえみんな？」

生沢が背後に回しかけると、残る四人の班員たちも口々に賛意を示した。——岡だけは、いまだガードレールに貼り付いたまよ、昔のスポーツカーが爆音を上げて走り過ぎるたびに容声を上げていたが。

ハルユキはほつと肩の力を抜くと、よかった、と思いながら生沢たちに向かって頭を下げた。開場時刻である九時三十分が近づき、ハルユキは再び正門のグートへと移動するべく地下を足早に歩いていた。

いよいよニコ＆バドさんと目下郡輪の双方と合流するという趣向に挑まねばならないのだが、頭にあったのは別の思考だった。

もし自分が女のバーストリンカーだったら。さっき、旧車好きでちょつとワルい雰囲気の人に接近された時、恐怖を覚えたのだろうか。岡がけつこうイイ奴なのだと感じても、な特。

ハルユキがそんなことを考えてしまう理由はもちろん、昨夜ニコに打ち明けられたからだ。加速世界で長い時間を過ごしたド型バーストリンカーは、現実世界にいる時は常に無力さと、それゆえの怖れに付きまとわれるのだ、と。

思い当たる節がなくもない。かつての黒雪姫は、学食ラウンジやローカルネットのVRスペースにいる時でさえ、他人を寄せ付けないビリビリした空気を身にまとうていた。その理由は、

もしかしたらデュエルアバターを長期封印していたがゆえに蓄積させてしまった恐怖だったのかもしれない。

そんな怖れを、ハルユキが溶かしてくれるのだ、とニコは言った。もちろん、そういうことができるという自覚はまったくない。むしろいつでも自分のことだけで精一杯で、近しい人を気遣えずに失敗してばかりだという気さえする。

でも、これだけは誓える。

——僕は、先輩や、師匠たちレギオンの先輩も、チユとタクも、ニコとバドさんも、そしてもちろん目下郎さんも、もう絶対に傷つけない。僕が原因で悲しい思いはさせない。みんなが、いつでも笑顔でいられるように、できることはなんでもする。

手始めに、まずは今日の文化祭、思いつきり兼しんで貰うんだ。

靴を履き替えながらそう決意すると、ハルユキは前庭を小走りに横切り、正門に近づいた。そして、午前の陽光を浴びて金色に輝く文化祭ゲートの傍らに、赤基調の私服で揃えたプロミススの二人を見つけ、右手を上げ——ようとしてびくっとフリーズ。なぜなら、赤い二人からはんの一メートルばかり離れた場所に、緑系のコーディネートで決めた女子を一名発見したからだ。

ふわふわしたショートヘアと、斜め掛けにしたボシエットを見るまでもなく目下郎編である。ダレート・ウォールに所属するバーストランカー、アッシュ・ローラーが溺愛する妹にして、

ある意味では本人。

赤のレギオンと緑のレギオンは、もちろん相互不可侵条約を取り交わしている。だからニコたちと論は正面切って敵対する関係ではないのだが、それも互いが大レギオンのメンバーだという共通認識があつてこそだ。いやその前に、現状ではあの二人と一人は、すぐ隣にいるのがバーストリンカーだということすら知らないのではないか。だとすると、何らかの原因でそう知れた瞬間、対戦が始まってもおかしくない。

それだけは、何としても回避しないと―― まずはメールか何かで、どっちかを移動させて距離を……。

と、考えたその瞬間。周囲を物珍しげに見回していたニコと論の視線が、何の因果か、同時にぴたりとハルユキを捉えた。

ニコと論は、これまた同時に笑みを浮かべ、同時に右手を持ち上げてハルユキに向けて振り――そして同時に顔を動かすと、至近距離に立ち自分と同じアクションをしている人間を二秒ほどかけて眺めた。

この時点でハルユキは、超大型の（走って逃げたい）に襲われたが、どうにか撃退に成功すると腹をくくって前に出た。かくなる上は、ニコたちが何らかのアクションを起こす前に事態を收拾するしかない。クレバーな戦士など大に喰わせろ、黒幕もそう言っていたではないか。まあ、その言葉が、往々にして討ち死に前提のパンサイアタックを意味するのも確かだが。

うおおお——

と内心でかつこい雄叫びを放らせつつ、ハルユキはダッシュで三人の前まで移動すると、笑顔全開で言った。正確には、言おうとした。

「お、お待ちせー 早かつ……」

「おいハルユキ、この女誰だよ」

「あの、有田さん……こちら、どなた……ですか？」

ざろりと底光りするニコの両眼と、うるると揺れる輪の両眼による十字猛火を浴びせられ、ハルユキは再び硬直した。正面に立つバドさんが、真顔で呟いた。

「GL」

かくなる上は、正面突破を図るはかなし。

という決死の判断に従い、ハルユキは当初考えていたとおり、ニコたちと輪を「自分のゲーム友達である」と紹介した。

真っ先に反駁したのは、このところ足繁く有田家を訪れ、現在ハルユキが心血を注いでいるゲームはたつたひとつであることをよく知っているニコだった。輪の正面まで移動すると、カトジーンズのポケットに両手の親指をひっかけ、くいっと顎をしゃくる。

「どうだよ」



それだけで、輪も相手の正体を察したようだった。いや、あるいは最初から、互いに何かを感じていたのかもしれない。薄いグリーン系のシフォンチュニツクの裾を揺るようにして、小声で答える。

「あの、緑……です。そちらは……」

「赤だよ。……おいハルユキ、念のため訊いとくけど……」

じろつと脱ぎまれ、ハルユキは「あれ、ニコっていつ僕の名前呼ぶようになったんだろう」と考へる間もなく頷いた。

「は、ハイ、なんでしょう」

「こいつ、アタマじゃねえよな？」

「あ、あたま……？」

頭を捻りかけてから、ようやく質問の意味が、「こいつはダレート・ウォール頭首、つまり緑の王ダリーン・ダランデじゃねえよな？」であることを悟る。

「ま、ままままさか！　ちまち違うよぜんぜんまったく」

「ふーん。ま、ならいいや……いや良かねーけど、この文化祭の間はいいことにしといてやる。ハルユキには後でセツキコーだけだな」

「……ハイ、甘んじてお受けします……」

確かに、異なるレギオンに所属するバーストリンカーを文化祭に招待し、あまつさえ同じ場

所で待ち合わせて強制的にリアル割れさせてしまうなど、不用意極まる行いだ。ハルユキは、三人に改めて謝罪するべく、順番に顔を見てから頭を下げた。

「ほんと、考えなしでごめんなさい。このことが原因で何か不都合が起きたら、僕が全責任を負うので……」

だが、そこで、右方向から伸びてきた小さな手がハルユキのシャツの布地をきゅっと握った。顔を上げると、輪の柔らかな笑顔がすぐ近くにあった。

「そんなに、誇らなくて、いいです。お友達が増えるの、私、すごく嬉しい……です」

「あつコラ、何してんだ緑の！」

すかさず叫んだニコが、左方向からシャツを掴んで引っぱる。あわわと右往左往をするハルユキを、少し離れた所からしばし眺めていたバドさんが、珍しくふふっと声を出して笑った。

自己紹介を済ませ——ニコは「ニコ」、緑は「リン」、そしてバドさんは少し考えてからなぜか「ミキア」と名乗った——ひとまず平和裏に四人バータイーが組まれたところで九時半となり、実行委員長による全校放送で文化祭の開幕が宣言された。

学校中からわあっという歓声と拍手が湧き起こり、それが収まると、アップテンポなBGMに乘せて放送部女子部員による公開生放送が開始される。スピーカーではなくローカルネット経由のストリーミングで再生なので、ハルユキは仮想アスクトップのコントローラから音量を少し落とすと二人に向き直った。

「それじゃ、改めて……（うさぎ）梅郷中学校文化祭にようこそ。今日はいちにも、僕が案内させて貰います。何か、最初に見たいものの希望とか、あるかな？」

（うさぎ）途端、すかさずニコが「クレープー」と叫ぶ。

「……それは見たいものでなく食べたいものでは……」

「うっせ、朝飯抜きだからもうハラベコなんだよ！ だいたいあんたがシリアル用の牛乳切らしてるのが……」

「わ、わー！ わーかりましたー！ じゃあ、最初は陸上部のクレープ屋台ということでー」

「……賛成、です」

「K」

そういうことになったので、ハルユキは三人を引き連れてまずは第一校舎の東端にある食堂へと向かった。

広い食堂も、今日は要机が全て壁際に片付けられ、代わりに色とりどりの屋台が軒を連ねている。複製店用スペースは屋外のグラウンドにもあり、そちらが一等地なのだが、チユリたちの女子陸上部はくじ引きに負けてしまったようだ。

とは言っても、開場直後にしては学食もかなり混雑しており、目指すクレープ屋にもすでに数名の行列ができていた。ハルユキたちが最後尾に並ぶと、ウサギ耳のかぶり物をつけた女子生徒が「いらっしやいませー！」と笑顔で手作りの写真入りメニューを差し出すので、思わず

真剣に見入ってしまう。

意外にも十種類を越えるトッピンダがあり、しかも値段が一律ということで、ハルユキが持ち前の優柔不断さを発揮しつつメニエーをぐるぐる眺め回していると――。

「なによハル、来なさいとは言っただけ開場ダッシュしなくてもいいのに」

という声が聞こえた。がばつと頭を上げると、鉄板の向こうに、小さなおたま片手に呆れたように笑うチユリの姿。しかしハルユキが手感したとおり、その表情は約三秒で消滅する。無論、ハルユキの同行者に気付いたからだ。

「はー、へー、ふうーん、なるほどねー」

「いや、その、これは、レギ……グループ間の視線を隠るための、その」

「はいはい、わっかりましたよーだ。――で、ご注文は決まりましたかー？」

やはり頭にウサ耳を載せ、白いエプロンをつけたチユリが幸いプロ意識を取り戻してくれたので、ハルユキはそそくさとチヨコバナナをオーダーした。

ニコや糖たちとは違ってそうにやり取りしつつチユリが生地を焼き、相棒の女子部員がトッピンダしてくれたクレープを受け取って、ニューロリンカーにチャージしてある小遣いから代金を支払う。四人分のクレープが揃うと、並んでいる客がいらないことを確認してから、ハルユキは屋台の脇に回り込んで小声でチユリに訊ねた。

「チユ、ここのお役目は何時まで？」

「んーと、午前は十一時までかな」

「そっか。じゃあ、十一時十五分からの剣道部の出し物、オレたちと一緒に観に行こうぜ」
すると十余年来の幼稚園は、ニコたちのほうをちらりと見やつてから、しようがないなあというニュアンスの笑顔で頷いた。

食堂に先駆けした特権で、ラウンジの丸テーブルをひとつ占拠すると、四人はそこでクレープを食べることにした。考えてみればバドさんはセミプロのパティシエール、ニコはその弟子なので、洋風スイーツの評価基準はかなり高いはずだ。

二人が一口ずつ食べ終えるのを待つて、ハルユキは恐る恐る「どうですか？」と訊ねた。するとバドさん改めミヤアさんは、ごく真剣な表情で頷くと、ひと言「GJ」。ニコのほうは左手でサムズアップした、だけでもりもり食べ続けている。

どうやら合格らしいと安心しながら右側の輪を見ると、シンブルないちごクレープを、ニコとは対照的なスローペースで少しずつ口に運んでいた。少し心配になり、ハルユキは顔を寄せると囁いた。

「えと、もし口に合わなかったら、遠慮なく言ってくれば……」

僕が食べるから、と緩けようとしてこれではただの食いしん坊だ、さうしてチュリに作り直せなんて偉くて言えない、と口半開きで固まっていると。

「あ、いえ、そうではないんです。とっても、とっても美味しい、です」

輪はいつもの柔らかな笑みを浮かべてそう答えると、まだ七割近く残っているクレープに視線を戻し、申し訳なさそうに続けた。

「……実は、ちょっと朝ご飯を、食べ過ぎてしまって……。大丈夫と思っただんですけど、お腹いっぱいになり、なっちゃったみたいです……。よかったら、有田さん、これ……」

焼き加減に輪が差し出すいちごクレープに、反射的に手を伸ばそうとして、ハルユキは今日何度目かのフリーズに陥った。クレープは皿盛りではなく手巻きなので、黄金色に焼けた生地には輪の可愛らしい前髪が刻まれている。それを自分の大口で上書きしてしまうことに倫理的な道義的問題がありやなしや。

というハルユキの意図を察してか、輪が一瞬眼を見開いてから、消え入るような声で言った。

「あ、ご、ごめんなさい、私、気付かなくて……。嫌ですよね、食べかけなんて」

「そ、そんなことないよ！ 僕はぜんぜんいいんだけど、り、リンさんが気にするかなって……」

「き……気になんて、しま……せん。いえ、あの、悪い方には、です。だから……これ……」
 頬を赤くしながら輪がもう一度差し出したクレープを、ハルユキが受け取る直前、横から伸ばされたニコの手がかっ掴った。

「ぐだぐだやってんなら、あたしが貰うー！」

眼光炯々そう宣言されれば、ドウゾ、と言うしかないハルユキだった。ニコはふんつと鼻を

囁らすと、いちごクレープをわずか三口で消滅させ、お冷やをんぐんで飲んでから悪いついたように叫んだ。

「言っとくけど、食いしん坊キヤラだからじゃないからな」

「じゃあ、なにキヤラなんだよう……」

奪われてしまった悲しみに耐えつつ問うたハルユキに、ニコではなくバドさんが答えた。相変わらずの無表情ながら両の頬を和らげ、

「やきもちキヤラ。……で、あなたは鈍感キヤラ」

「なっ、何言ってるんだバド……じゃない、ミヤアー　っつーかいつまでここに居るんだよ、とつと何か顔にいこーぜ」

ひとしきり喚き、ずんずん歩いていってしまうニコを、ハルユキたちは顔を見合わせてから追いかけた。

腹ごしらえを完了した四人は、まずは第一校舎三階の一年生タラス展示から攻めることにして、廊下の途中にある階段を上った。三教室とも実に真面目かつ遊び心に欠ける内容で、申し訳ないと思いつつも高速で見て回り、二階へ。

A組のお化け屋敷では、ハルユキの左側にボジシヨニングしたニコが爆笑しよくりな一方、右側の輪が涙目でさーっとかっついてくるので、どう反応していいのか判らないまま騒ぎを繰り返していった。

B組のコスプレ衣装なる出し物は、ハルユキ的には少々興味を引かれなくてもなかったが、クレーブを食べたばかりなので通り過ぎて二年C組へ。入り口手前で立ち止まり、自分がこのクラスに所属していてあまつさえ展示作品の制作班であることをどう切り出したものか迷っている。

「ここ、確かあんたの組だよな？」

あつさりニコに言われてしまったので、何で知ってるんだようと思いつつも頷く。

「う、うん。展示作るのも手伝ったんだけど、正直あんまり大したもんじゃないから、期待しないで……」

「あら、そうなんですか？」

——という柔らかな声に聞き覚えはあれど、バータイメンバーの誰のものでもないことは確実だったので、ハルユキはしゅぼつと振り向いた。

すると、ニコたちの背後から近づく人影三つ。

水色のワンピースを着たロングヘアの女性は、間違いないスカイ・レイカーこと食時楓子。

彼女にすっかり手を握られ——あるいは捕獲されている、松乃木学園初等部の制服姿の少女はアーダー・メイデンこと四葉宮崎。

そして、二人の隣には、スリムジーンズにボーダー柄のカットソーという相変わらず中性的な服装で、赤い縁の眼鏡を掛けた女性——恐らく——がひっそり立っていた。昨日レギオンに

正式復活したばかりの、アクア・カレント……水見あきらである。

厳しくも優しくもやっぱり厳しい（義）である楓子を見た輪が、左手できゅっとハルユキのシャツを握んだ。赤の王ニコは更なる快レギオンとの接近遭遇にやれやれと言を握り、そしてバドさんはニコの胸で直立したまま、ネガ・ネビュラス（四元素）の誰かをじっと見つめているようだった。

バドさんの様子が気になったが、勢やかなる女子十六名＋まるっこい男子一名のアンバランス集団に周囲から視線が集まりつつあったので、ハルユキは輪をぶら下げたままひとまず楓子に向かって頭を下げた。

「おはようございます、来て下さったんですね師匠！ お一人も、ようこそです！」

「もちろんよ、楓さんのためならどこにだって！」

にこやかに不穏な台詞を口にしてから、楓子は少し視線を動かした。

「それにしても、輪まで来ているとは知らなかったわ。わたしにも内緒だなんて……」

そこで一度言葉を切ると、楓子は笑みを薄れさせ、唇をひそめた。

「……輪、少し顔色が悪いみたいだけど……」

「あ、あの、大丈夫です！ ちょっと、朝ごはんも、タレーフを、食べ過ぎてしまつて！」

そう答える輪の横顔は、確かに少しばかり血色がよくないように見えた。だが、もともと血色が薄いところに、LEDライトの白っぽい光が当たっているせいとも思える。

楓子もそう判断したのか、頷くと言った。

「それでは、こんなところに大勢で固まっていたら迷惑ですし、まずは彌さんのタラス展示を鑑賞させて頂きましょう」

結果から言えば、二年C組の出し物（三千年前の高円寺）を、三人から六人に倍増したタストたちは皆楽しんでくれたようだった。

最初にタラス委員長の生況が危ふんどおり、中にいた時間の七割方を主役の展示写真ではなく背景の3Dグラフィックス鑑賞に費やされてしまったのだが、そこにも意外な楽しみがあった。輪とバドさんが並んで立ち、音のバイタが通り過ぎるたびに車輪の当てっこをしていたのだ。初対面のうえに別レギオンに所属する二人が距離を縮める一助となれたのなら、頑張っ

て展示ファイルのカスタマイズした甲斐があったというものだ。

たっぷり時間をかけてお手軽タイムスリップを体験した六人は、教室を出るとハルニキに向かつて小さく拍手してくれた。不意打ちにうっかり涙ぐみ、ニコに散々バカにされたことも、きつと文化祭が終わればいい思い出になる——はずだ。

などと考えながら、集団の先頭に立って廊下を階段方面に戻ろうとした、その時。

隣接するB組の教室から出てきた女子生徒が、出会い頭に大きな声を出した。

「あつ、イインチャヨ！　ちーっすー」

その職名でハルユキを呼ぶ生徒は、学校内にたった一人しかいない。足を止めたハルユキは、最近ようやく普通に会話できるようになった気がしなくもない相手、飼育委員の井岡玲那に挨拶を返した。

「ち、ちーっす。そっか、井岡さんはB組のクラス展示の……」

そこまで言いかけた玲那を、玲那の両手がぱしっという音をさせて直る。顔の前で掌を合わせた玲那は、思いがけない言葉を口にした。

「イインチョ、ホウの世話サボりまくっちゃってマジゴメンー 来週からは、チョー気合入れてやるから!」

平常時の五輪増しで巻きの入ったロングヘアを勢いよく揺らして低頭する玲那に、ハルユキは慌てて声をかけた。

「そ、そんなに謝らなくていいよ、クラス展示の準備が大変だったんでしょ?」

「つつても、ホウは毎日おなかすくんだしさー。クラス展の準備あるからつつって、サボっていいわけないし。いちお祭り前にホウの顔は見に行ってただけだし、なんつーか、気持ち的にすげー落ちるっつーか……」

【U・V そのお心があれば、井岡さんは立派な飼育委員さんなのです】

という文字列が視界下部に表示されたので振り向くと、顔が両手を持ち上げたままにここに笑っていた。玲那もようやくハルユキが一人ではないことに気付いたようで、

「超イインチヨも来てんじやんー 来週はホウの世話マジちゃんど……」

と調子を續り返しかけたところでぴたりと口を止めた。視線が左右に一往復してから、何とも言えない表情でハルユキを見る。

「いいーんちょ、ツレゼーんが他校の女子じやね？ マジどーなってんの？」

「ど、どーもなってますんー え、えーと、そんじや、来週からまた委員会活動がんばろうってことで……」

早口でまくし立てつつ緊急事態を図ったハルユキだったが、玲那はなぜかにんまり笑って行く手を遮った。

「せっかくだしー、ウチの喫茶店寄ってけば？」

「い、いやその、さっきクレープ食べたばかりで……」

丁重にお断り申し上げるべく言いかけたところで、今度はハルユキが気付いた。B組の出し物は「コスプレ喫茶」のはずだが、玲那は梅郷中の制服の上から「C A F E どうぶつ王国」とプリントされたエプロンをつけているだけで、あまりコスチューム・ブレイクがあるようには思えない。

——という愚考を表情から読んだか、玲那は「そこ気になるっしょ」とニンマリ笑って左手で教室の入り口を示した。ここまで勧められればスルーもできないし、確かに何がどうコスプレなのか興味を引かれもする。

ハルユキが恐る恐るもう一度振り向くと、ニコが全身でやれやれ感を表しつつ言った。

「そーなる気がしてたよ。ほんじやま、行きますか」

「K」

とバドさんがすかさず領いた理由は、日頃メイド風のコスチュームで働いているゆえに、実はB組の裏面内容が気になっていた——からかどうかは定かでない。

玲那の、七名様ごあんないーの声に押されるように入り口をくぐった途端、ハルユキは両眼を何度も瞬かせた。玲那の他に数名いるウェイトレス校の女子生徒たちも制服にエプロン姿で、丁寧に飾り付けられた教室内は、かなり本格的な喫茶店らしきを醸し出している。しかも、AR表示使いまくりのC組と違って、レンガ壁や木の窓枠をプリントした合成紙を貼り付けているので相当に手間がかかっただろう。四つあるテーブルも、生徒用の机を合体させた上にもちゃんとタロスを掛けてある。(どうぶつ王国)なる店名の理由は、そこかしこに飾られた大小さまざまなスイグルらしい。

八人掛けの大きなテーブルに案内して貰ったハルユキは、玲那に向かってついつい無類なコメントを発してしまった。

「飾り付けすごいけど、ARテクスチャ使うわけにはいかなかったのコレ……?」

「あたしらもそー思っただけだし、タロスの割り当てリソースがもういっぱいいっぱいさあ」

「へ？ ど、どっかにAR使ってるの？」

きょろきょろ店内を見回すが、それらしき映像は見当たらない。強いて言えば、教室の後ろ側がステージ風に高くなっていて、そこで客の生徒が四人ばかりポーズを取って写真撮影中なのが気になるが、背景はただのレンガ壁だし着ているのも校舎中の制服だ。付け加えるなら、玲那の他に数名いるウェイトレス役の女子生徒も、制服にエプロン姿。

だが、同じくステージを見ていた楓子が、何かを合点したように頷いた。

「ああ、なるほど、そういうことですか。それで（コスプレ喫茶）……なかなか面白いアイデアですね」

「そーゆーコト、ワンドリンクで何度でも撮影できっから！ っと、えー、ご注文はあ、何になさいますかあー？」

ハルユキには理解不能な会話だったが、店員モードの玲那をそれ以上問いつめることもできず、卓上のメニューを見た。これはさすがに出来合いのソフトドリンクかと思いきや、並んでいる名前には『仔猫のいたずら』だの『お昼寝ライオン』だのとこちらも凝っている。説明文によれば、各種フレッシュジュースとフレーバーシロップを使ったオリジナルのノンアルコール・カクテルらしい。

一問があれこれ騒ぎつつオーダーを完了すると――ハルユキは強制的に『夕焼けカラス』、バドさんは自主的に『約の本盛り』を注文した――、教室の片隅に設けられた厨房から数分

でドリンクが届いた。

色とりどりのそれを——『夕焼けカラス』はマンゴージュースに黒タピオカを浮かせたものでけっこう美味しかった——わいわい言いながら飲み干したタイミングで、ちょうど撮影スタートが空いたので、玲那に促されるまま席を立つ。

女子六名はどうやらコスプレ喫茶の謎を解明済みらしく、迷いのない足取りで歩いていくが、ハルユキはまだ何かなにやらだ。皆にくつついてステージ前まで移動したものの、最後尾で首を左右に捻っている、くいつとシャツを後ろから引っ張られた。振り向いたハルユキの耳に、玲那が小声で囁く。

「イインチョコ的には、振られるより振るほうが楽しいかもよ？」

「へ？ あ……う、うん」

確かに、女子六人と並んでステージに上がるよりも、カメラマンとして構図を工夫するほうがよほど性に合っている。それに集合写真は、あとで黒雪姫やチユリ、タカムと合流してからまた振るはずだ。ハルユキは頷き、様子たちに向けて言った。

「それじゃ、僕が振りますんで！ もうちょっと中に詰めてください……日下部さん、少し右に……はい、それでOKですー」

境界スタリオンショットアブリを起動し、いざ撮影、と思った瞬間。

板垣アスタロトツブのど真ん中に、『魔法の時間！』という文字の並ぶウィンドウが出現した。

下部には、A表示の許可を求めるイエス／ノーボタン。魔法とはなんぞやと肩を寄せるが、壇上の六人はこの展開を手割していたようで、一斉に指を動かしている。

それならば、とハルユキも右手を持ち上げ、イエスボタンを押した。直後――。

ばわわん！ という大きな音とともに、ステージが七色の煙に包まれた。もちろん本物ではないが、反動的に仰け反ってしまふ。煙はほんの数秒で消え去り、その中から再び華麗な女性パーストリンカーたちが姿を現した。しかし。

「のわあ!?」

ハルユキは再び上半身を後ろに傾けて叫んだ。なぜなら、六人の外見が、顔と髪と体つきを除いて激変していたのだ。それまでの私服に代わってふさふさした毛皮や羽毛が全身を包み、頭には大きな耳が生え、腰からはシッポまたは尾羽が伸びている。ひとことで表現するならば、**〔動物化の魔性〕**で変身したかのような――。

「……あ、ああ、それで魔法の時間、なのか……」

ようやく状況を半分ばかり理解したハルユキは、改めてステージの六人を注視した。全員、異なる動物に変身したようだ。左から、輪は灰色の子鹿。楓子は青い大鷲。銀は白いオコジ。ニコはピンクのうさぎ。あきらは薄茶色のビーバー。そしてバドさんは、黄色に黒いヒョウ柄の、豹だ。

お互いの変身した姿を楽しそうに品評する女性陣をほけーっと眺めていると、不意に異なる

気付きが訪れ、ハルユキは再び声を上げた。

「あっ………！　もしかしてみんな、さっき飲んだドリンクと同じ動物に変身してる……？」

「そーゆーこと。てゆーかソレ、メニユー表にばっちり書いてあつけどね」

やや呆れ顔でコメントした玲那は、思いついたように付け加えた。

「イインチロ、あれっしょ。ゲームD^{エス}してもマニエアル読まない派」

「そ、その通りです……」

照れ笑いで答えつつ、内心はつと胸をなで下ろす。動物化魔法はステージ上でしか発動しないらしく、カメラマンのハルユキは制服のままだが、仮にカバダのゾウだのドリントを飲んで皆と一緒にステージに登っていれば、今頃ひどい有り様になっていたはずだ。

「……それにしてもコレ、すごいARプログラムだね。動く人間の体に、マーカも使わないでテクスチャをびったり乗せるのはけっこう難しいと思うけど……」

変身の動きが一段落すると今度は技術面が気になり、ハルユキはそう呟いた。騒動で言えば、C組のクラス展示で披露した壁や窓の映像化よりもかなり上だろう。

玲那はハルユキの言葉を聞くと、半分自慢げ、半分決まり要そうに言った。

「あたしもムズカシーことはよく解^とってないんだけどさ、アネキがけっこうでーシロップのバイヤーやってさ、そこで開発した就職用のプログラム借りてきたんだ。ついでにあの着ぐるみのデータも」

「な、なるほど……」

増野の言った〈ショット〉の前に省略されている単語は恐らく〈ゲーム〉でも〈PC〉でもなく、ファクシオン方面の何かだろう。というあたりまで何とか蓋隠したハルユキがこくこく頷いていると、

「おいしいインチョーさん、ご歓談すみませんがあー、そろそろ撮影して貰っていいですかねえー」

というニコの声が聞こえ、慌てて機嫌をステージに戻す。

「あ、ご、ごめんー すぐ換るから……位置はそのままでもいいよ、それじゃ連続で三枚行きますー」

叫び返し、今度はこそカメラアプリの撮影ボタンを押す。視界に大きく3カウントが表示され、0と同時にカシヤッ！ という類似シャッター音が響く。

〈視界スクリーンショット〉とは言うが、さすがのニューロリンカーも現状ではアイボールセンサー……つまり肉眼が捉える映像をそのまま記録することはできず、リンカー前部に内蔵された小型レンズでの撮影となる。ゆえに連続撮影中は、カメラマン役は極力静止していなくてはならない。

のだが、一枚目の写真を撮影したところで、あることに気付いて危うく俯きそうになった。慌てて首を固定してから、視線だけ動かして確認する。仮想アスタロップ下部に表示されたま

まの、着せ替えARプログラムのウインドウに、オブションメニュー展開ボタンが存在するようだが、何気なく触れてみると、ずらりと選択型メニューが現れる。

大部分は『ミラノ・コレクション2047春夏』『ロンドン・コレクション2047秋冬』といった感じの名前で、やはりファッション業界の気配が漂うがハルユキには理解不能だ。最下端までスクロールすると、『アニマル・ファースーツ』という項目があり、そこに選択中を意味するチエタマークが入っている。

恐らく（動物着ぐるみ）を意味するのであろうことくらいは解るので、なるほどと内心だけで領いてから、ハルユキはメニュー最下部にもう一つ項目が存在することに気付いた。名前は、『アニマル・ファースーツS』。

……スーパー？ スペシャル？ ストロング？

眉を寄せつつ考えるが、こればかりは推測不可視だ。そこでちょうど二枚目の写真を持ち終ったので、どうせならこつちも試してみようと、ハルユキは指を持ち上げてストロング着ぐるみ、かもしれない項目に触れた。展開中の試着データを直接切り替えますか、という確認窓が出るので、イエスポタンを――

「あつ、イイインチョコ、それだめだってー」

と隣で玲那が叫んだ時にはもう、ぼちっと押していた。

一秒後、ステージで盛大な悲鳴が――実際には、悲鳴らしい悲鳴を上げたのはユコだけだった。

たようだが——発生した。

顔を上げたハルユキが目撃したのは、いままでの動物着ぐるみ姿から毛皮部分が八割以上も消滅し、代わりに濃黒アタセムが貼り込まれた六人の姿だった。それは最早（最早）動物っぽい水着、もしくは（チームに出てくる獣人モードの美少女）以外の何ものでもなかった。

「こ、コラ、早く戻せ!! ぶっ飛ばすぞ!!」

とニコが鬼の形相で叫び、

「これはちよっと、はすかしい、です……」

と輪が涙目になり、

「……………」

あきらとバドさんが無言のまま冷たい目つきになり、

「あらまあ、これは後でかろーくお仕置きねえ」

と微笑みながらコメントする楓子の後ろに、顔を真っ赤にした輪が隠れる。

というステージの有り様を見て、ハルユキは完全なるパニックに陥った。しゃっくりのような声を漏らしながら、試着データ・セットを元に戻そうとする。だが、慌てるあまり両手を振り回してしまい、右手より先に左手がデスクトップ上の別のウインドウを押して……。

視界に、3、2、1、とカウントが表示されたのちに、カシャッ! とシャッター音が響き渡った。



《アニマル・ファーストS》のSがセクシーのSであることを玲那が教えてくれたのは、金（きん）
 てが終わった後だった。

フルパワーの護押と写真データの強制消去、という一連のプロセスが終了したところで、時
 間はずいぶん十一時となった。

急いでもう一度学食まで移動し、エプロンは脱いだもののウサミミをつけたままのデユリと
 合流。どうぶつ王国にデユと先輩がいなくてよかった、よかったと考えるべきだ、などと思ひ
 ながらハルユキは八人に増えた一行を先導して剣道場へと向かった。

道場の入り口に飾られた看板には、『SAMURAI×DANCE』なる中々に期待と不安
 を煽る筆文字が躍っていたが、入ってみれば立ち見席は既にほぼ満員だった。どうにか八人分
 のスペースを確保して、五分後の開演を待つ。

その間にハルユキは、隣に立つ輪の横顔に何度か視線を送った。コスプレ喫茶にいる間も、
 楽しそうではあったものの、やはり普段より口数が少ないように思えたのだ。しかし意が全て
 晴（は）れ、照明も絞られているので道場内は薄暗く、顔色の良し悪しまでは解らない。

「……あの、目下郎さん。もしまだ具合悪いみたいだったら、速（すみ）に帰（かえ）ってくれればすぐ保
 健室に……」

思い切って囁（ささや）きかけると、輪はハルユキに顔を向けて微笑（わいしょう）んだ。

「ありがとうございます、でも、大丈夫……です」

「そう……」

頷き返したハルユキは、ふと編の立ち姿のどこか一部分にかすかな違和感を覚えた。あれ、と眼を瞬かせたが、その時、場内の明かりが完全に消えた。

低く重い太鼓の音が、どこからか聞こえてくる。それは徐々に音量と激しさを増し、一瞬の盛り上がりを経て、びたりと止まる。

静寂を切り裂く強烈なスポットライト。いつの間にか、剣道場の中央に着物姿の男子剣道部員が十数人、腕組みの仁王立ちで整然と並んでいた。着物と言っても、部活用の剣道着ではない。濃紺の袴に水色の袴をつけた、江戸時代の武士スタイルだ。さすがにチョンマゲのかつらまではつけていないが、額には撞いの白鉢巻きを纏めている。

前列センターのポジションに立つのは、誰あろうタタムだった。今日だけは眼鏡を外し、髪を後ろに撫でつけているので、目元のハカセ感も欠片もない。客席から「マエズミくん！」と黄色い声飛び、ハルユキは思わず左にいるチュウの様子を窺ってしまったが、演舞が上手くいくか心配でそれどころではないらしい。

再び静寂が戻ると、タタムはゆっくり腕を解き、右手を左腰に持っていた。そこに差し込めるのは、竹刀でも木刀でもない。黒塗りの鞘から伸びる柄を握り、しゅらん！と抜き放つと、眩い銀光が宙に躍った。

もちろん金属ではなく、プラスチック系素材にメタリック塗装を施したイミテーションの刀なのだろうが、タタムの重厚感溢れる動作のせいで本身にしか見えない。両手で握った刀を、じりじりと大上段に振りかぶる。

そこでぴたりと静止し、緊張感が限界まで張り詰めた次の瞬間、大太鼓の轟きに合わせてタタムは刀を鋭く振り下ろした。一拍置いて、残る部員たちも一糸乱れの動きで抜刀、振りかぶって上段斬り。

そこからの群舞は、圧巻のひとつだった。大太鼓の乱打に乗って、侍たちは気合いとともに踏み込み、剣を振り、ジャンプし、ターンする。時には完璧に同期し、時には少しずつ時間差をつけて、縦横無尽に踊り回る。

いつしかBGMもビートの利いた和風ロックに変化し、観客席からは手拍子が湧き上がる。ハルユキも、汗の珠を散らして躍動するタタムを見詰めながら、一心に両手を打ち合わせた。セクターを任されたのは長身とルックスを買われてのことだろうが、おそらく下馬評のとおり、夏の大会が終われば次の部長だという理由もあるのかもしれない。

タタムの左斜め後ろでは、小柄な侍が真剣な表情で舞っている。視線はタタムを捉えて離さず、動きについていくように一生懸命のようだ。能美征二、かつての「暗殺者」ダスタ・タイカーである。無制限フィールドでのサドンデスマッチに敗れてブレイン・バースト・プロダラム及び加速世界の記憶を失い、バーストリンカーではなくなった。

彼に取り憑いていた暴力的なまでの略奪衝動は消え去り、現在では真面目な剣道部員として、タクムのことを「拓実」^{（拓実）}と慕っているらしい。物理加速コマンドを使っていた頃の圧倒的強さは消えてしまったはずだが、もともとの才能もちゃんとあったのだらう。ダンスの動き一つ一つのキレや確かさは、ほとんどの部員を上回っている。そして何より、あどけなさの残る顔には、いかなる羨みも憎しみも存在しない。能美にとって、ブレイン・バーストはきっと、呪いのようなものだったのだ……。

——いや、きつと、僕がそう思いたいだけなんだろうな。

クライマックスに向かって激しさを増す音楽に合わせ、力いっぱい両手を叩きながら、ハルユキは頭の片隅で考えた。

ブレイン・バーストは、あらゆるバーストリンカーにとって、「敵い」であり「呪い」でもある。その二面性こそが加速世界の本質と言ってもいい。あの場所には、善意と悪意が等しく存在する。ハルユキとて、悪意によって導かれたならば、かつての能美のように憎しみに憑かれたバーストリンカーになっていただろう。そしてその一方、ダスタ・テイカーを全損させたことで、ハルユキは能美があの世界で見つけた……将実見つけられたかもしれない善意を奪い去ったのだ。

ブレイン・バーストに、二度目のインスツールが許されていたなら。

身勝手な感情と知りつつ、ハルユキはそう思わずにいらなかった。もちろん現在ではほぼ

見ず知らずのハルユキが誘ったところで、能美は怪しげなプログラムのコピー・インストールなど受け入れないだろう。何より、いまの能美は加速世界の救済など必要としているまい。

それでもなお、別の道も有り得たのだ、という思いは去らない。

《親》にまでは干渉できないが、せめて加速研究会よりも早く能美と出会っていれば。BICの動画トラップだのの介在しない、純粋な対戦だけをひたすら繰り返すことができれば。いつかは、巨大な鉄えを抱えていた能美とも解り合えた。そう信じていた。

舞台では、二人ずつ向き合った侍たちが、少し怖くなるほどのスピードで剣を打ち交わしていた。発せられる金属音は当然スピードカーから流れるS.E.だろうが、リズムにはわずかな狂いもない。相手を次々と入れ換えつつ整列が続き、合戦の混沌めいた様相を呈しかけたところで、一気に整列しての上段構え。音楽も盛り付けもびたりと停止し、少し遅れて手拍子も収まった、次の瞬間。

イエアアア——!! という太い雄叫びに乘せ、全員が一斉に剣を振り下ろして、侍ダンスは終わった。

スポットライトの下で笑顔になるタタムと能美を見詰めたが、ハルユキは全観客と一緒に思い切り手を叩き続けた。

「マジ凄かったよ、タタ。どれくらい練習したんだ？」

ジャージに着替えたタカムが一行に合流するや否や、ハルユキは訊ねた。見事にセンターの大役を果たしおおせた幼稚園児は、はにかむような表情で答えた。

「いやあ、けっこうぶっつけ本番を感じだったよ。来月末にはもう部大会があるから、あんまりダンスの練習に時間割くわけにもいかなかったし……」

「にしちヤーサマになってたじやない。衣装とかライティングも腐ってたし」

チエリのコメントに、タカムはいっそう照れた表情で首を縮めた。

「そっちは女子部が頑張ってくれたからね。振り付けから何から、全部。さすがにあの絶好はちよっと恥ずかしかったけどね……」

「そーでもなかったぜ、ハカセ。あつちでもカミシモ着て戦えば、もうちっと勝率上がるんじやねーの」

にひひ、と笑いながらニコが言い、

「そ、それは褒めてるんですか」

タカムが応じると、一同から朗らかな笑いが上がった。音聲を出して笑うことのないバドさんと、どこか似たところのあるアタ・カレントー——あきらまでもが、並んで笑顔を見せているのがハルユキには嬉しかった。

時刻はもうすぐお昼だったので、今度は屋外の蕎麦店を巡って昼食タイムにすることにして、総勢九人にまで育った集団は昇降口から外に出た。黒雪軍も合流できればついに十人パーティ

「だが、生徒会の出し物の調整にもう少し時間がかかるらしい。あと十五分でそっちに行けるというメールを受け取ったので、待ち合わせ場所を通信しておく。」

そこでふと、開場前に黒雪姫に言われたことを思い出し、ハルユキは楓子の傍まで移動すると囁き掛けた。

「あの、師匠、今のところ、襲撃っぽい動きはないですよわね？」

「そのようですね。わたしも二度ほどマクチング・リストをチェックしましたが、異常はありません。まだまだ泊所は禁物、ですけど」

「はい。でも、いくらキット・ユーザーでも、今の掩蔽中のリストを見ればびびって撤退すると思いますけどね……」

何せ、ちよつとした小規模戦域全体のリストに匹敵する十人ものバーストランカーが名前を連ねているうえに、レベル6、7、8が一人ずつ、そしてレベル9の王が二人も存在するのだ。さしものマゼンタ・シザーも、この状況で臨み込んでくるとは思えない。

ハルユキの楽観的な台詞に、楓子の前にいたあきらが限壁に触れながら応じた。

「逆に言うと、王二人を同時に攻撃するチャンス、でもあるの。キットを感染させることだけが目的なら、敵北覚悟で特攻してくることも有り得る」

「りょ……了解です。僕もこまめにリストをチェックして、なるべくなら先に見つけて先制攻撃できるようにします」

「その意気はいいけど、ポイントの無駄遣いには気をつけるの」

あきら——アタア・カレントにそれを言われると実に重みがあり、ハルユキは無言でこくこ頷いた。

（四元堂）たちとそのような会話をしたものの、ハルユキは、内心ではやはり今日の襲撃はあるまいと予想していた。マゼンタたちの拠点である世田谷からは距離もあるし、状況的にも襲撃者側のリスタが大きすぎる。ヘタに手を出せば、返り討ちだけではなくリアルを割られるかもしれないのだ。ISSキットを受け入れながらも極めて理性的だったマゼンタが、無謀な襲撃を強行するとは思えない。

しかし——。

ハルユキは、三日前に感じた小さな危機を、忘れてしまっていた。

マゼンタ・シザーによる襲撃は存在した。しかもそれは、文化祭が始まった時にはすでに終了していたのだ。

そうと悟ったのは、左斜め後ろを歩いていた日下部絢が、ハルユキにもたれかかるように声もなく倒れたあとのことだった。

最初は、ブレイン・バーストとは無関係な、本物の体調不良だと考えた。

思い返せば、輪は朝から顔色が優れないようだった。本人は朝食を食べ過ぎたからと言っていたが、單なる消化不良が何時間も続きはしないだろう。気配りの至らない己を責めながら、ハルユキはタクムに手伝ってもらって、取り急ぎ輪を第二校舎一階にある保健室まで連れて行った。

幸いベアドは全て空いていて、輪を一番奥に寝かせたものの、養護教諭である堀田先生の姿がない。部屋を見回すと、デスクの上に、「一時外出中。職員室にいます。間もなく戻ります」というホロタダが回転している。ハルユキは先生を呼びに行くために部屋を飛び出しかけたが、タクムの「僕が呼んでくるからハルは目下部さんについて」という言葉に引き留められ、やむなくベアド脇に戻った。

「僕さんのせいじゃないわ」

という声に顔を動かすと、女性陣でただ一人付き添った楓子が隣に立っていた。大膽して保健室に押しかけるわけにもいかないので、他の大人には前庭の噴水そばで待機して貰っている。楓子が同行したのは、もちろん輪の（親）だからだ。

「……わたしが気づくべきでした。輪はこう見えてけっこう無理をする子だったこと、よく知っているつもりだったのに……」

「いえ……僕、午前中から、日下部さん具合悪そうだなって思ってたんです。なのに、あちこち連れ回しちゃって……」

きつく唇を噛み締め、目の前のベッドに横たわる輪を見やる。髪は青ざめ、呼吸も浅く忙しない。数時間も調子が悪かったのなら、ただの貧血などではないだろう。季節外れの風邪か、それとも……。

白貴の念にかられつつ、そんな思考をぐるぐると巡らせていると――。

不意に、輪が薄く眼を開け、消え入るような声で囁いた。

「……………ごめんない、有田さん。ごめんない……………梶子師匠……………」

「あ、謝ることないよ日下部さん。僕こそ、無理させちゃってごめん……………もうすぐ、保健の先生が来るから……………」

ハルユキは、大きくなろうとする声を懸命に抑えてそう応じた。しかし輪は、青ざめた顔を小さく左右に動かし、言った。

「これは……………風邪とかじゃ、ないです。私の体は、なんとも……………ないんです。苦しんでいるのは、私じゃなくて、デュエルアバター……………。――兄さんは、昨日、ISSキットを、寄生させられて……………しまったんです……………」

アツシュ・ローラーがマゼンタ・シザーに乱入されたのは、土曜日の午後のことだと論は語った。場所は、世田谷第一エリア。学校を出て、環七通りでバスに乗り、ニューロリンカーをグローバル接続した直後だったらしい。

防衛不可能の遠隔技（ターク・ショット）を連射するマゼンタ相手に、アツシュは苦戦したが、心算攻撃を躊躇わない敵に心意なしで対抗することは不可能だ。ついに走れなくなったアツシュに、マゼンタはハサミを用いた（手術）を施し、ISSキットを強制的に寄生させてしまった。

本来なら、即座に根子に連絡し、対応策を相談すべき場面だ。だが、論のたった一人の兄、日下修輪太の人格を持つアツシュ・ローラーは、対戦が終わる直前、愛する妹に向けて念じたのだという。一日くらいなら優勝で耐えてみせる。だからお前は、明日の文化祭、思いっきり楽しんでこい、と。

「……私……兄さんの言いつけを破って、闘匠に連絡しようって、何故も思いました。でも……私……感じてたんです。兄自身が、有田さんの学校の文化祭を、何日も前からずっと楽しみにしてたこと……だから……私……」

震える声でそう呟くと、論は白いタオルケットの下から右手を出し、首のニューロリンカー

にそつと融れた。

そこでようやくハルユキは、午前中に輪と会った時に受けた違和感の原因に気づいた。

日下那輪は、普段バステルグリーンのニューロリンカーを使用している。そして対戦をする時だけ、メタリクタグラーのものに取り替える。兄・輪太が使用していたニューロリンカーで、ブレイン・バースト・プログラムはそちらにインストールされている。

だから、対戦する必要のない今日の文化祭では、輪は自分のニューロリンカーを着けているべきなのだ。しかし朝に正門で合流した時から、輪の首には兄の端末が装着されていた。その理由はもしかしたら、渋谷区の病院で眠っている輪太に文化祭の雰囲気を伝えたくったから、かもしれない。

だが、I S Sキットの真の恐ろしさは、その精神的寄生が加速していない時も、それどころかニューロリンカーを外していても着実に進行するところにある。輪の対戦用端末に侵入したキットは、昨日輪が帰宅し、就寝し、今日検察中に赴いて、文化祭を見物する間もじわじわと成長し続けていたのだらう。

「……これ以上寄生が進む前に、急いで浄化しないと……」

ベッドにかがみ込み、外壁に植着状のクラックが走る輪のニューロリンカーを監視しながら、ハルユキは喉から声を押し出した。人格変容が進んでからでは、キットの解除が困難になる。先日長田谷エリアで出会ったショコラ・バベッターの親友二人も、ショコラの必死の呼び

かけに、当初はまったく耳を貸そうとしなかったのだ。

——いや、それ以前に、キットに支配されてしまったアッシュ・ローラーなど見たくない、絶対だ。

ハルユキは勢いよく頭を上げると、左の楓子^{アキ}に向き直った。ネガ・ネビュラス副長たる彼女も大きな衝撃を受けている様子だったが、ハルユキと接触が合うや鋭然^{鋭い}と傾いた。

「楓さん、まずはアッシュの状態を確認しましょう。ですが、ローカルネット経由で対戦するとサツちゃんたちまでギヤラリーで引き込んでしまうので……」

「直結対戦ですね。ケーブル、一本ならあります」

小型のデバイスを探り、XSBケーブルを取り出す。楓子のボーチからも同じものが出てきたので、これで三人を直結できる。壁際^{壁際}にあった折りたたみ椅子を二つ広げ、腰掛けると、ハルユキはケーブルの一方を自分のニューロリンカーに挿し、もう一方を輪に向かつて差し出した。

「目下部さん……いい？」

騒ぎかけると、輪はいまだ苦しそうながらも、ほんの少し微笑^{ほほえみ}んで見せた。

「あの時と……逆、ですね」

言葉の意味はすぐに解った。十日前、六代目タロム・ディザスターとなつてしまったハルユキはレギオンの仲間たちの前から逃亡^{逃亡}しようとしたのだが、マンションの一階で初対面の輪に

阻止されたのだ。輪はハルユキを、地下パーキングに駐めてあった楓子の自動車のリアシートに押し倒し、強引に直結した。ハルユキを、救うために。

「……必ず、お見さんを助けるから」

ハルユキが噁くと、輪はかすかな笑顔のまま鎮き、首を右に傾けた。露わとなったニューロリンカーの直結端子に、ハルユキは右手のプラグをそっと挿入した。

ほぼ同時に、ハルユキのニューロリンカーにも左側から楓子のケーブルが接続される。二重のワイヤード・コネクション警告が表示された時、廊下を足早に近づいてくる複数の足音が耳に入った。タタムが英訳教諭を通して戻ってきたのだろう。

ハルユキはちらりと楓子に視線を向け、同時に頷いた。通信対戦は最長でも一・八秒。先生が到着するまでには確実に終了できる。

「スターターはわたしが」

楓子はそう宣言すると、ハルユキに翼を囁えさせず、すぐさま加速コマンドを囁いた。

「バースト・リンク」

仮想の雷鳴が轟き、眼前の輪と保健室の風景、そして午後に向けていよいよ盛り上がる文化祭の喧噪を青く凍らせていった。

せめて陽性のステージで有れかし、というハルユキの願いは半分だけ叶えられた。

足が平面に触れる前に、アコイデオンの主体の脈やかな音楽が聞こえてきたのだ。オールド格闘ゲームなら各ステージ専用のBGMがつきものだが、ブレイン・バーストでは音楽つきステージはかなりレアだ。

陽気なようで、たまに音が外れるせいか少しおどろおどろしい雰囲気のあるBGMを聞きながら、ハルユキは素早く病院を見回した。屋外——恐らく梅郷中学校第二校舎の屋上。ギョウリユーえに、対戦者二人からかなり離れた場所に実体化したのだ。

空は暗いが、地上の梅郷中学校は暖色系の明かりに包まれている。二階ほどの高さに闇雲に張り巡らされた電線から幾つもぶら下がるのは、現実世界ではもうお目にかかれない大型白熱電球。じじ、じじ、とノイズを放ち、時折細りなく明滅する光の下では、実体を持たない人型のシルエットが三々五々蠢いている。輪になって踊ったり、集団でそろそろ歩く人影は様のように細く、背丈も一メートルほどしかないのに、音楽と同じく賑やかさと妖しさが入り交じった光景だ。

校舎の壁沿いにはみすばらしい屋台がぎっしりと並び、やはり実体のない影の店主が色々と妙ちきりんな代物を売っている。現実世界の文化祭と雰囲気似ているようで、どこかが決定的に異なるこれは、《奇祭》ステージだ。属性は中位の暗黒系。

暗黒だけあって行動阻害型ギミックがあれこれ仕込まれているトリックキーなステージだが、今回は戦闘が行われない可能性もある。ハルユキは屋上の端までダッシュすると、ガイドカー

ソルの指し示す方向を見下ろした。

双方の対戦者も、すでに保健室から外に出ているようだった。ハルユキが陣取る第二校舎と第一校舎に挟まれた前庭の昇降口側に、車椅子に腰掛ける細身のデュエルバターが見える。周囲をうろちよろする小さな人影たちを意に介さず不動を保つのは、ネガ・ネビュラス副長、
 〈鉄腕〉スカイ・レイカーだ。

彼女の足踏める方向にアツシュ・ローラーがいるはずだが、指向性に欠ける白熱電球の光は届く距離が短く、前庭の正門付近は暗闇に沈んで見過せない。しかしいつものアツシュなら、対戦が始まるや否や盛大にエンジンを鳴かしつつ「ヘイヘーイー」とやるはずだ。沈黙を保っている時点で、すでに本来の精神状態ではないのだと判断せねばならない。そう考えたハルユキは、いてもたってもいられずに屋上から身を躍らせた。

ギャラリーゆえに、三層分の高さを落下しても衝撃はない。保健室の意の外側に降り立ったハルユキは、レイカーと状況を話し合うために車椅子に近づこうとした。

しかし、その直前――

カッ、と強烈な光が正門あたりの闇を切り裂いた。

光源の色は、見慣れたハロゲンランプの黄白色ではなかった。赤信号か、いっそ血のような深紅。垂直に伸びる照射範囲から、黒いシルエツトたちがわらわらと逃げ惑う。

続いて、内蔵機関の駆動音がステージに轟いた。それも、いつもの陽気なVツインサウンド

ではない。どろどろと低く湿った怒りは、大型生物の威嚇音のようですらある。

不吉な光と音を浴びせられても、車椅子上のスカイ・レイカーは震動たにしない。流体力学状のヘアバースと白いファンビースの裾だけをかすかに揺らしながら、じつと前方を監視している。

その静けさに焦れたかのように、ついに赤いヘッドランプが動いた。

最初はゆっくりと近づき、徐々に速度を上げ、電球の明かりの下に入った瞬間、エンジンが猛々しく吼えた。その加速はバイクの域を超えていて、ハルユキの眼には、黒と銀をまとう大型獣の跳躍としか見えなかった。

比較すれば遠かに小さな車椅子に座するスカイ・レイカーだが、迫り来る巨体を見てもなお動こうとしない。両色のアイレンズを少しだけ締め、タイミングを計っているようだ。しばらく前の領土戦で、レイカーはアッシュの突進攻撃を、ぎりぎりまで引きつけてからバツダッシュしつつバイクのブレーキレバーを思い切り握って前転させる、という神業で防いだことがある。

しかし今回も同じ方法が使えろとは思えない。バイクの加速が段違いだし、レイカーの後方わずかにメートルにはもう昇降口の扉があり、そのうえ奇襲ステージは建物内進入不可なのでバツダッシュするためのスペースがまるで足りない。

「し……師匠!!」

ポリウムを抑えながらも、ハルユキは叫ばずにいられた。なかった。

だがレイカーは、車椅子の両輪に柔らかく手を置いたまま一点に留まり続ける。至近距離に迫ったヘッドライトがレイカーの全身を血の色に染め、エンジンの轟音が響きスカートをはためかせる。

猛然と回転するバイクの前輪と、車椅子の車輪が接触しようとした、その刹那——ついにレイカーが動いた。正確には、ハルユキが見たものは幾重にも連続して燃えくばる残像でしかなかった。車椅子は、ハルユキにも視認できないほどのスピードで、回転しながら左へ逃れたのだ。

レイカーが操る車椅子の、静止状態からの恐るべきダッシュ力は、他のデュエルアバターが自前の足で発揮するスピードを遥かに凌駕している。ほとんど短距離アサルトにも等しい機動力だが、それは前進か後退にしか使えないとこれまでハルユキは思っていた。何せ車椅子の車輪は本体に固定されて、舵を切ることができない。当然真横には動けず、停止している所から左右にダッシュするためにはまず旋回、しかるのちに前進する必要がある。

なのに今、レイカーの車椅子は、どういう理屈なのか連続旋回しながらすすぐ左へ滑ったのだった。その挙動を大型バイクは追いつけず、一瞬の火花だけを放ちて通り過ぎ、閉ざされた異端口へと突き進んだ。激突を予感し、ハルユキは歯を食い縛った。

だが、衝撃も燃発も生まれなかった。壁面の真面で、バイクは獣のように一瞬身を沈める

や急角度で跳躍したのだ。校舎の壁にタイヤが接触すると、そこで激しいスピニング。九十度回転してから、びたりと停止する。

垂直の壁に金属の巨体が貼り付いたまま動かないさまは、重力感覚がおかしくなりそうなほど異様な眺めだった。確かにアタセル・ローラーのバイクは《壁面走行》アビリティを持っていて、こんなふうには壁の途中で止まったことはなかったはずだ。

いや、それを言うなら、バイクそのものが以前とは違っていた。まったく面影がないほどの変貌ぶりだった。

「……………アタセル、さん……………」

声ならぬ声を絞り出しながら、ハルユキは壁面の——ちようど梅塙中の校章があるはずの位置に停止するバイクを見上げた。

前後のタイヤは太さを増し、トレッドの中央にまるで牙のような鋭い突起が連続している。フロントフォークやガソリンタンクは蛇を思わせる銀色の鱗に覆われ、エンジンから排気系に至っては生物の内臓の如きドロスタクな姿だ。

いや、それはもう本当に生物なのかもしれない。なぜなら、マシンの主人であるはずのライダー……即ちアタセル・ローラー本人が、バイクと融合してしまっているのだ。ハンドルを握る両手も、ペダルを踏む両足も、頭や体までもが鱗模様の金属紋に包み込まれて外からはまったく見えない。

にもかかわらず、ハルユキはバイクから放射される強烈なまでの視線を感じた。その理由はすぐに解った。

赤い光を放つヘッドライトは、ライトではなかった。それは巨大な、ひとつの眼球だった。

黒い有機体に包まれた、深紅の瞳。ここしばらくの間に何度も目撃した、虚ろであると同時に強烈なまでの悪意と欲望を極めたひとつ眼。

「そんな……バイクに……SSキットが……」

ハルユキのとき声が聞こえたかのように、赤いヘッドライトが、ゆっくりと一度まばたきをした。

内蔵めいたエンジンが低く唸り、黒と銀色の生体機械は、ヘッドライトを地面に向けたまま壁面をゆっくりと上昇……つまりバックした。本来のアッシュ・ローラーのバイクならば絶対に不可能な挙動だ。赤い光の照射方向がぐりぐりと動き、前庭の両側で再び停止するスカイ・レイカーを捉える。獲物を狙う肉食獣のように、ライトが素早く二度回られる。

その様子からは、寄生するSSキット自体がバイクを動かしているとしたか思えない。殻の中のアッシュ・ローラーがどのような状態に置かれているのかは、現状では推測も不可能だ。

この直結対戦の目的は彼と話して状況を確認することだが、そうするにはまずバイクを無力化する必要がある。だが、あそこまで使用者と一体化してしまっている以上、強化外装だけの部分的な破壊は困難を極める。転倒させようがひっくり返そうが、バイクは身のうちに吞み込

むライダーを離さないだろう。

何より恐ろしいのは、キットが強化外装に寄生しているというインギニターな事象と、短時間でここまで強まってしまった支配力が、《浄化》を助けるのではないか……という想像だ。デュエルアバターが寄生されている間は、人格への干渉も続く。今すぐにもキットを切り離し、封印カードにまで還元しないと、アツシユ・ローラーと目下部輪が……かつて何度かハルユキを助けてくれた、二人の大切な友達が、変わってしまうかもしれない。

身を焼くような焦燥感に駆られ、ハルユキは夢中で叫んでいた。

「アツシユさん……眼を醒ましてください、アツシユさん！ あなたは、そんなキットになんか負けない……そうでしょう!!」

すると、その声に応じるかのように、バイクのエンジンが唸り声を高めた。

直後、ハルユキは見た。赤いヘッドライトの両側、有機的にうねるカウリングの表面に、ぼこつと二つの大穴が口を開けるのを。

だがそれは、ライダーが解放される前兆などではなかった。穴の奥に、闇より黒いエネルギーが凝集していく。紫色のスパークが瞬き、バイク全体が激しく震動する。何が起きるのかを直感的に察したハルユキは、再び声を上げようとした。

「師匠、逃げ……」

しかし言葉は重々しい振動音にかき消された。カウリングの穴から、連環のエネルギー弾が

発射されたのだ。ISSキットが装着者に付与する心意技のひとつ、(ダーク・ショット)。命中したものの全てを虚無エネルギーによって燃焼させる恐るべき遠隔攻撃が、しかも、二発同時に。

心意弾がわずかに掠めただけでも、乗客な車椅子は破壊されて走れなくなるだろう。なのにスカイ・レイカーは動かなかつた。迫り来る二発の隙を毅然と見詰めたまま、ふわりと右手を持ち上げる。五指を緩やかに開き、まっすぐ前にかざした手を小さく一回転させながら――

「(放回風路)」

技の名が告げられると同時に、水色の輝きが右手を包んだ。先は掌を中心に凄まじい勢いで渦巻き、風を呼び起こす。それはたちまち小型の竜巻にまで成長し、前座全体を覆わせる。

二発のダーク・ショットは、竜巻に触れるや吞み込まれ、猛烈なスピードで回転しながらもそれ自体に意志があるかのようにしどろくレイカーへと近づいていく。掌までもう数センチというところまで迫ったが、しかしそこで回転の勢いに屈して竜巻から弾き出され、一発は第一校舎、もう一発は第二校舎の壁に命中した。

進入不可ということは破壊不可でもある建物オブジェクトの壁が、虚無エネルギーの爆発によってこっそり削り取られる。あれほどの威力の心意技を弾いたからには、スカイ・レイカーが生み出した光の竜巻も心意によるものだろう。防衛性能、発動速度、ともにまさしく達人の域だ。

心意技は、その性質によって四つに分類される。

力の源を希望とするか、絶望とするか。効果を害に及ぼすか、範囲に及ぼすか。

ハルユキの知る限り、スカイ・レイカー——倉崎楓子（クラサキ カエデ）は（範囲を対象とする正の心意）の、最強の使い手だ。なぜなら彼女は、心意システムを信じているのだ。ブレイン・バーストを、加速世界を、そこで見出し育てた絆の力を。

楓子なら、きっとアッシュ・ローラーを前から引き戻してくれる。輪を苦しめる悪意を打ち払ってくれる。ハルユキは、その確信を抱きつつレイカーから視線を外し、昇降口上部の壁面に貼り付いているはずの生体バイクを見上げた。そして、愕然と眼を見開いた。

いない。眼を離していたのはほんの数秒なのに、バイクが消えている。だが、そんなことは有り得ない。（移動する時やかましい音を感じる）というアッシュ・ローラー最大の弱点は、ISSキットにも克服できないはずだ。

万が一、ミッションを構造変化させてバック走行が可能になったように、ガソリンエンジンの爆発音もどうにかして消せたでしょう。だが、バイクがバイクである限り、タイヤで踏なり地面なりを蹴らねば移動できない。あんな牙みたいな突刺が並んでいるタイヤなら、激しいノイズが聞こえてしかるべき……

——いや、違う。

一箇所だけ、タイヤの音ささ立てずに移動できる場所がある。それは、

「師匠——上です！」

ハルユキは、絶叫しながら空を振り仰いだ。奇祭ステージの夜空に星はなく、今にもひと雨降そうなほど分厚い雲に覆われている。三方を校舎の壁に切り抜かれた、灰色の煙形の真ん中に、ひときわ黒い影が存在した。バイクだ。二発のダーク・ショットが校舎に命中した時の轟音にまぎれて、一瞬だけエンジンを噴かして壁からジャンプしたのだ。

跳躍して後物に襲いかかる肉食獣そのものの挙動で、バイクはスカイ・レイカーめがけて落下してくる。もちろん、車椅子のダッシュ力なら回避は可能だろう。だが、あれほどの重量級オブジェクトが追面に激突すれば、大型アバターの踏み付け以上の振動波が発生する。移動中によりめき効果を喰らえば、軽量な車椅子は転倒してしまう危険がある。と言って、避けなければ下敷きになって大ダメージは必至——。

「……師匠……」

ギヤラリーの身では何の干渉もできない、それ以前に対戦者の十メートル以内には近づけない、と頭で解っているハルユキは本能的に校舎の壁際から飛び出しかけた。

しかしその寸前を見た。レイカーの両眼が、壁がりの中で鋭く光るのを。

これは彼女にとってのチェックメイトではない。逆だ。機子は、バイクが跳躍するのを……機動力が失われる空中で無害な腹を撃つのを、じっと待っていたのだ。

レイカーの背中に、眩い水色の閃光が生まれた。どうっ！——という強烈な噴射音。白い煙

手が吹き飛び、ワンピースも粉々に千切れて消滅、車椅子までもが後方に押し流される。

次の瞬間、スカイプルーの装甲を持つ優美なF型アバターは、背中から二条の噴射炎を伸ばしながら弾かれるように離陸した。シルバー・クロウの全力急上昇を遠かに超えるスピード。空を駆る彼女の心が生み出した、ブースター型強化外装（タイルスタスター）の力だ。

落下中のバイタの姿きまで瞬時に到達したレイカーは、一見華奢な右手を躊躇いなくエンジンの下部に打ち当てた。撃でも貫手でもなく、掌打。雷鳴の如きインパクト音が轟き、消化管めいたマニホールドが千切れ飛んで、エンジンブロックの各所に入った亀裂から真っ赤な炎が迸る。

それでも、生体バイタは止まらなかった。ヘッドライトに寄生するキットが強烈に光ると、前後のタイヤをどす黒いオーラが包み込む。さすがに回転するのは後輪だけだったが、間近で吹き荒れる濃黒の過剰光に触れたレイカーの長い髪が青もなく引き剥がれる。恐らく、近接型心意技（ターク・ブロー）に相当する能力だろう。あの回転に巻き込まれれば、レイカーとして無事では済むまい。

しかし、空色のアバターは壁する気配もなく、続けて左手の掌打をエンジンに叩き込んだ。ひび割れが更に広がり、漏れ出た火炎がオレンジ色の雨となって地上へ降り注ぐ。タイヤの回転が鈍り、赤い眼珠も苦しげに明滅する。

バイタのダメージは甚大だが、ハルユキの視界右上に表示されるアッシュ・ローラーの体力



ゲージはほとんど減っていなかった。ここでようやく、ハルユキは楓子の真の狙いを悟った。生体バイタの、文字通りの心臓部であるエンジンを追上戦で攻撃すれば、その上に被さる形で金属殻に閉じ込められているアツシユ本人をどうしても巻き込んでしまう。だが、空中で真下から攻撃すれば、ライダーを誘爆することなくエンジンだけを狙える。

つまり楓子は、恐るべき生体バイタの破壊ではなく、アツシユ・ローラーを傷つけないことを第一に考えて戦っていたのだ。

——さすがです、師匠!!

ハルユキが、胸の裡でそう叫ぶと同時に、ゲイルスラスタがいつそう高らかな駆動音を響かせた。

バイタの重量をスラスタの推力が上回り、黒い巨体がぐつと持ち上がる。そのタイミングでレイカーは一瞬だけ両手をエンジンから離すと、左右の掌打を一度に撃ち込んだ。ほとんど零距離からの一撃にもかかわらず、エンジンプロッタが完全に粉砕されフレームも前後に引き裂かれて、バイタはほとんど真つ二つになった。直後、巨大な爆発が奇祭ステージの暗い空を真っ赤に染め上げた。

火球に吞み込まれたレイカーと、そしてアツシユの体力ゲージが急減少する。しかしそれはすぐに止まった。いっばいに開いた両眼で、ハルユキを見た。球形に広がる爆炎を貫いて上昇する、水色の光跡を。夜空を目標して高く高く舞い上がるスカイ・レイカーの両腕には、見慣

れた革ジャンにスカルフェイスのアバターが、しっかりと握られていた。

「……師匠……………アッシュさん……………」

涙ぐみながら、ハルニキは出せる限りの大声で叫び、両手を思い切り振り回した。

再び前庭に着陸したレイカーのところに、ハルニキは急いで駆けつけようとしたが、途中でどんなに足を動かしても前に進まなくなってしまう。考えてみれば、強化外装を破壊しても対戦そのものは継続中なので、ギャラリィが対戦者の十メートル以内に立ち入れないルールも生きているわけだ。

禁止ゾーンの境界で空しくジタバタしていると、響子がちらりとハルニキを見て、苦笑の気配を滲ませながら「待ってなさい」とばかりに右手を上げた。

続いて章の向きを九十度回転させると、いまだ気絶している様子のアッシュ・ローターのヘルメットに、ずびし！と容赦ないチョップ。アッシュの体力ゲージが五パーセントほど減るのも意に介さず、もう一度手を持ち上げながら優しく嘆き掛ける。

「起きなさい、アッシュ。三つ数える前に起きないと、次はもうちょっと痛くしますよ♡はい、さーん、にー、いち……………」

びゅっ！と二発目のチョップが繰り出され、それがダイコツ顔の真ん中に炸裂する寸前、「ノオッ!!」

野太い喚き声が響き、革グローブを振めた両手が小さなバツテンを作った。

「ノー・モア・チョップピング!! 起きました、バーフェクトにウエイクアップしました師匠ッ!!」

「あら、そう? なら、自分で立ちなさい」

言うやいなや、これまでアツシユの背中を支えていた左手を外す。どてんと落下する愛弟子を意に介さず、楓子は蒼翠くインストメニユーを操作。出現した確証感をアツシユが寝転がったまま抑すと、ハルユキの視界に、対戦の引き分け終了を告げる炎文字が燃え上がった。

直後、これまで行く手を遮っていた障壁が消滅し、勢い余ってでんぐり返ってしまう。一回転してから起き上がり、ハルユキは全速力で二人の所に駆けつけた。

「あ……アツシユさん! だ、大丈夫ですか?」

大の字になったままのライダーの隣でキキッと急停止し、顔を覗き込みながら叫ぶ。

「なんだ、チメーもいやがったのかよカラス野郎。ザツツオーライに決まってるんだろ、俺様がチョップの一発や二発で……」

「チョップの語じじゃないですよ!! 頭……っていうか、思考っていうか……」

「ンだとコラ、俺様のアタマはエブリタイム・メガ・クワールに決まってるんだろ」

言い返し、両手でサムズアップして見せるアツシユだが、やはりその声いつもの元氣は無い。ハルユキはアツシユに手を貸して上体を起こさせると、自分もその横に正座した。車椅子

を回収してきた視子も、二人と向き合う形で腰書ける。

短い沈黙を、最初に破ったのはアツシユだった。あぐらをかいた両膝に手を置くと、師にして〈親〉である楓子に深々と頭を下げる。

「……すみません、師匠。ドジ、踏んじまりました」

「謝る必要はないわ。事態を予測できなかったわたしの責任でもありますから」

そのやり取りを聞き、ハルユキは大きく息を吸い込むと、対戦が始まる前から用意していた言葉を目にした。

「あの……本当に謝らなきゃいけないのは、僕なんですー」

「どういうことですか、猶さん？」

「……僕、今週の水曜日に……つまりアツシユさんが襲撃される三日も前に、マゼンタ・シザー自身の口から聞いてたんです。北を攻めるのは諦めて、東に侵攻する、って。その時、真っ先に思いつくべきだったんです。僕がマゼンタと遭遇した世田谷第二エリアの東は、下北沢のある世田谷第一エリア。そして、そのすぐ東は、渋谷第三エリア……猶さんの通う学校がある、渋谷区笹塚なんです……」

断腸の思いでそう告げた、次の瞬間。

ハルユキの襟首——の代わりに首飾の装甲を、アツシユの右手が握み上げた。

「……カラス野郎!! てめえ……何で知ってやがんだー! アイツが、笹塚女子学院中等部

のステューデントだつてことをよオ！」

「そ、そこですか？ っていうか、学校名までは知りませんでしたよ！ ぼんやりと、教室のあたりつてくらいしか……」

「黙らっシャルアァ——ッブー——さてはテメー、朝対戦の後にストーキングダしやがったな！ こつそり輪と同じバスに乗って、学校までつけてったんだろーがこのエロガラス！」

「そ、そんなことしたら僕が遅刻しちゃうじゃないですかー」

「うっせん、てめー輪と遅刻とどっちがインポータントなんだ！」

「そ……その突っ込みなんか変ですよ！」

「はい、そのへんにしないと痛くしますよ？」

しゅぽつ。と二人が元の状態に（アツシユはあぐらを通り越して正座に）戻ったところで、親子はまずハルユキに顔を向けて言った。

「湯さん。確かに、せっかく得た情報を活かせなかったのは反省すべき過ちです。しかしそれは、マゼンタ・シザーの作戦を読み違えたわたしも同じこと。ローカルネットに侵入できる文化祭だけでなく、私人の危険を冒して一般対戦でキツトの拡散を狙おうとは、わたしもロータスも予想できませんでした。万全を期するなら、問題が解決するまで、輪にグロバル接続そのものを禁じる選択技もあつたのに……」

空色のアバターが悔しげに両眼を細めると、ハルユキの隣で正座するアツシユが激しく動揺

ヘルメットを振り動かした。

「いえ、そいつは違うっす、銅匠！ テマーを守るためにネットを切って、加速世界からラシナウェイしても、問題はネバー解決しない……俺は、銅匠や、ロータス先生や、それにこのカラス野郎にそれを教わったんっす！」

思いがけないアッシュの台詞に、ハルユキは軽く俯け反り、椅子もゆっくりと一座まばたきをした。

「え……ば、僕がですか？」

「わたしも、そんなことを教えたかしら？」

「イエスアイドラー！ ワードじゃなく、ライフ……ライフ………おいカラス、（生き様）って英語でなんつーの？」

顔を寄せたアッシュにぼそぼそ語られ、思わず考え込む。

「え、ええと……ライフスタイル………はなんか違うかな………生きる道ってことだから、ウェイ……ウェイ・オブ・ライフとかですかね？」

「アイガットイット！ そのウェイ・オブ・ライフで教わったんっす!!」

テンションが乱高下するにも程があるアッシュの言葉だが、ハルユキには、彼の言わんとする所が感覚で理解できた。

第一期ネガ・ネビュラスの崩壊を境に、黒雪姫は二年にもわたってグローバル・ネットを切

断して加速世界から姿を消し、楓子もまた対戦から退いて、余人の近寄れない旧東京タワーの頂上に隠遁した。しかし、二人は、その悠遠した世界の壁を打ち破り、外へと踏み出したのだ。もう一度、自分を加速するために。

アツシュがハルユキの名前を付け加えた理由までは解らなかったが、ひとまず臆に置いて、ハルユキは頷いた。

「そうですね……。対戦に負けて、いつとき何かをなくしても、また取り戻せばいいんですもんね。アツシュさんだって、ISSキットを寄生させられても、こうやってばっちり復活してくれたわけです。輪さんが倒れた時はどうしようって思いましたが、これで……どうにか、一安心……」

そこまで言いかけたものの、アツシュとレイカーの気配から深淵さが消えていないことに気が付き、徐々に声を減速させる。

「……あの……これでもう、アツシュさんも輪さんも大丈夫なんですよ？ だって、ISSキットはアツシュさん本体じゃなくてバイタに……強化外装に寄生してたわけで、さっき隣匠に、バイタごと完全に破壊されて……」

「あのな、クローウ。ぬか喜びさせてソーリーだけだな……問題は、まさにそこなんだよ」

「……ど、どういふことですか……？」

鏡面の下で両眼を見開くハルユキに、楓子が静かな声で説明した。

「彌さん。強化外装は、対戦中に完全破壊されても、次の対戦では元通りに復活するでしょう？ つまり、アッシュがもう一度対戦すれば、その時はまたさっきの姿に……寄生バイタに取り込まれた状態に戻ってしまうと予想されるの。ニューロリンカーに潜むISSキットは、まだ消えていないのよ」

「えっ……じゃ、じゃあ、輸さんへの精神干渉も……」

「この対戦後も変わらず続く、と考えるべきでしょうね……」

「そ、そんな……」

息を詰め、ハルユキは境界上部のタイムカウントを凝視した。残り時間は、約六百秒。それだけ経過すれば、せっかく楓子が破壊したキットは再生し、アッシュはまたあの恐ろしい姿に戻ってしまう……ということなのか。

「それなら……早く浄化しましょう！ メイさんかベルに頼んで、キットを焼き尽くすか封印カードの状態まで還元して貰えば、それで干渉は終わるはずです！」

ハルユキは勢い込んで言ったが、楓子は今度も頷いてはくれなかった。

「残念ですが……それも難しい、と判断せざるを得ません。メイデンの《浄化の姿》、ベルの《時間逆行》、どちらの力を使うにせよ、ISSキットを装着者から切り離すには、力の誘惑を拒む意志が必要なんです。キット自体が持つ負の心意を打ち消すほどの、強い意志が！」

「なら、問題ないです！ アッシュさんが、あんなキットに負けるはずないじゃないですか！

だって今もこうして、ちゃんと、元のアツシユさんのままで……」

前のめりになるハルユキの肩を、ライダーグローブに包まれたアツシユの手がそつと押し戻した。

「……すまねえ、クロウ。おめえの気持ちは俺も嬉しいけどよ……でも、さっき言っただろ？」

問題は、あの巨玉が強化外装に寄生してることだ、って。いいか……バイタは、俺の分身だ。でもよ、バイタそのものに自意識はねえんだ。ISSキットを拒否するための心意力ってヤツを生み出せねえんだよ……」

「そういうことです。恐らく……いえ間違ひなく、浄化と測定のどちらを試みてもバイタとキットを分離することはできないでしょう。にもかかわらず、バイタとアツシユはイメージ操作系によって強く繋がっているため、調整干渉は発生してしまふ。この状況を意図的に狙って、アツシユではなくバイタにキットを植え付けたのだとしたら……マゼンタ・シザーは恐ろしい相手です」

「そ、それなら、アツシユさんもイメージ操作系を使ってバイタに意志を伝えれば……」

そこまで言いかけたところで、ハルユキはようやく重要な情報を思い出した。

（強化外装に寄生するISSキット）を見るのはこれが初めてではない。約十日前、同じくマゼンタ・シザーからキットを譲渡され、それを装着してしまったタタム——シアン・パイルも、赤い眼球を基本位置の胸ではなく右腕の強化外装（杭打ち機）に寄生させていたはずだ。

チュリに、(シトロン・コール・モードⅡ)でキットを消せないかと問われたタタムは、その可能性を否定した。理由は、キット自身が心意力によって分離を拒むから……と彼は言ったが、もしかしたらタタムも感じていたのかもしれない。己の分身にも等しい強化外装がキットに授けられてしまえば、その分離はアバター本体への寄生よりも困難となることを。

ハルユキの思考を裏付けるかのように、アッシュは頭を深々と叩きつけさせた。

「……………この対戦が始まった時、俺はバイクの中で必死になって支配権を取り返そうとしてた。でもよ……いざ戦闘になった途端、とんでもねえ勢いでキットの意志みてーなもんが流れ込んだよ。俺はほとんど失神しちゃってさ……次に眼が醒めたのは、脚匠に助け出された後だったよ。なんつうのか……オリープたちがキットに取り付かれた時は、本人の意識にキットが干渉してる感じだったろ？ でも、俺の場合は、キットが……キットに寄生されたバイクが、自分の意志で動いてるとしか思えねーんだ。アレから、心意システムの修行もしてねえ俺が支配権を取り返すのは、正直ムリくせえな……」

「……………そう言えば……パイルの強化外装に寄生したキットも、それ自体の意志で、俺に複製体を寄生させようとした。あの時もシトロン・コールで巻き戻すのは無理で、結局……」
消沈しながら呟いた自分の台詞から、ハルユキはようやく次なる解決法を思いつき、勢いよく顔を上げた。

「そ、そうだ！ 強化外装に寄生された場合も、あの方法なら……」
フレイン・バースト中央

「サーバー」の中で、並列処理中のISSキットを直接攻撃する方法なら、消滅させられるはずですよー。ほ、僕、今夜縮さんと直結して一緒に寝ますー。それで中央サーバーに侵入したら、キットを破壊……」

ここでやっと自分が何を言っているのか自覚し、ハルユキは慌てて両手と顔を振り動かした。「い、いえ、違いますお兄さんー。僕、そろそろゆうつもりはせんせん」

「誰がお兄さんだ。キガ・サ——ンター」
ひと声喚いたアツシュは、勢いよく左拳を振り上げ——。

首を縮めるハルユキの右肩に、ぼん、と置いた。

「へ？ あ、あの……？」

「……まあ、なんだ。サンキューつつつとくぜ、クロウ。妹の……縮のために、そんな一生懸命になっけてくれてよ」

「……ああ、アツシュさん……？」

「でもな……すまねとが、もうタイムアップだ。ISSキットの寄生は、すげえ勢いで進んでる。今夜までは、とてもしたねえ……。強化外装を……バイクそのものを消滅させることも考えたけども、それも簡単じゃねえんだ。方法は、直結対戦で他のパー스트リンカーに譲渡するか、無制限フィールドでシロップに売るしかねえけど、それじゃ実際のとこバイクは消えねえ。縮への精神干渉が続くどころか、ヘタすりゃ被害を広げちゃう可能性もある」

「ま……んな……」

ハルユキは絶句した。

バイクを手放す、という言葉をアツシユは何気ない様子で口にしたが、その重すぎる意味を彼が自覚していないはずはない。アツシユ・ローラーは、ボナンシヤルのはとんどを強化外装のアメリカンバイクに注ぎ込んだバーストリンカーであり、バイクを失えば戦闘力は半減どころでは済まない。今後レベルを上げるところか、ポイントを維持することさえ途方もなく困難となるだろう。

しかし――。

アツシユ・ローラーの覚悟は……妹の目下部権を思う気持ちは、ハルユキの想像をも大きく上回るものだった。

シルバー・クロウの右肩に手を置いたまま、アツシユはかつて聞いたことがないほど穏やかな声で言った。

「クロウ。でもな……たった一つだけ、輪の苦しみを取り除く方法があるんだ。ニューロリンカーの中のISSキットを完全に消して、精神干渉を終わらせる方法が」

「……それ、は……」

「俺が消えること、だ。今ここで、ダレイト・ウォールから脱退して、隠匿にネガ・ネビュラス加入を承認して貰う。そして次の対戦で、黒の王の《断罪の一撃》を受ける。それで、バ

「ストリンカーとしての俺は消える。SSSキットと一緒に、な……」

アツシュが口を閉じて、ハルユキはしばらく反応できなかった。

やがて、ゆっくりとかぶりを振る。何度も何度も、ひたすら顔を左右に動かし続ける。そうしながら、喉から掠れきった声を押し出す。

「……駄目だ。だめです、そんなの。アツシュさんは、十日政、（鶴）と同化した僕に言ってくれたじゃないですか。ギリギリまで、諦めないで粘れ……歯を食い縛って、最後まで抗ってみろ、って。だから僕、頑張れたんです。こうしてみんなの所に戻ってこられたんです。なのに……」

「ああ……そうだったな。俺も……俺ひとりの問題なら、そうしたかもしれないねえ。寄生が進んで、さっき以上に暴れちゃっても、最終的になんとかなりやそれでOKって思ってたかもしれない。でもな……俺は……」

一度言葉を切り、アツシュは地面に向けていた顔を持ち上げると、頸部を横したシールド越しにハルユキを真っ直ぐ見詰めた。

「……俺は、キットの精神干渉のせいで、たったの一度でも周りの人間に……特にクロウ、お前に何か酷いことを言っちゃったら、もう立ち直れねえだろう。仮にその後キットだけを強化できても、絶対に自分を許せねえだろう。自分を責めて責めて、泣いて泣いて……そんな俺は見たくねえ。それに……手遅れになる前に自分でケリをつけたいってのは、俺自身の意志

でもあるんだ。あいつは、その覚悟を決めてお前んとこの文化祭に来たんだよ。ずっと前から、すげえ楽しみにしてた今日いちにちを、バーストリンカーとしての最後の思い出にするためにな……」

「……………でも、もし、バーストリンカーじゃなくなったら、その時は」

戦の奥から絞り出すように、ハルユキは言った。

「その時は……………加速世界にまつわる記憶を、みんな……………」

「……………ああ、そうだな。でも、あいつはきつと、今日のことだけは忘れねえよ。お前と一緒にあちこち廻って回って、いっぱい笑って、思い切り楽しんだ、今日の記憶だけはな。だから……………クロウ、いや、ハルユキ、もういちどあいつと友達になってやってくれ。対戦はできなくても、それ以外にも色々することあるだろ。……………一緒に勉強したり、バイタルース観に行ったりな。言っとくが、兄としてそれ以上は本バー許さねえからな」

最後は冗談めかして言い終えたアツシユの顔を、ハルユキはまともに見られなかった。なぜなら、パイザーの下の両眼から、仮想の水滴がとめどなく溢れていたからだ。

あまりにも突然すぎた。こんな結末は想像もしていなかった。目下修輪と知り合って、まだたったの十日なのだ。話したいこと、聞きたいことはたくさんあるのに、何ひとつ話していないし、聞いていない。

輪だけではない。アツシユ・ローラーは、ハルユキがバーストリンカーとして初めて負け、

初めて勝った相手だ。それ以来、数限りなく対戦を繰り返し、互いに腕を磨いてきた。異なるレギオンに所属するライバルであり、同じ目標を……スピードの先を目指す同士だった。

そんな輪とアツシユが同時にいなくなるなどということは、絶対に受け入れられなかった。ハルユキはすがりような気持ちで、少し離れた車椅子に座すスカイ・レイカーを見やった。

アツシユとクロウ双方の師であるバーストリンカーは、口を閉じたまま、静かにハルユキの眼を見返した。夕焼けの色のアイレンズは、ハルユキに諦めを使すようにも——あるいは奮起を持つているようにも見えた。

その両方だ、とハルユキは感じた。楓子は、ハルユキに選択を追っている。

アツシユの言葉にただ頷き、永遠の別れを受け入れるのか。それとも、この状況でなお願を上げ、空に行くべき道を見出そうとするか。

ハルユキは強く瞬きし、涙を振り落とすと、奇祭ステージの夜空を見上げた。

先の大爆発の余韻がまだ残っているのか、分厚い雲にささやかな切れ間があった。その奥に、小さな星がたった一つだけ煌めいていた。そんなはずはないのだが、かつて何度か絶望の淵に落ち込んだ時、いつも夜空に見つけたのと同じ星だと感じた。

右肩に乗ったままのアツシユの手を、ハルユキは左手で持ち上げ、双方の顔の前まで持つてくると強く強く握った。

「アツシユさん。まだ……まだ一つだけ、戦う道があります。パイタからISSキットを消滅

させて、船さんへの精神干渉を今すぐ断ち切る方法が、たった一つだけ」

「……………」

無言で続きを持つアッシュ・ローラーを、ありったけの力を込めた両眼で見詰めながら、ハルユキは言った。

「連鎖の大本を断ち切るんです。無制限フィールドの、東京ミッドタウン・タワーに存在するISSキットの本体を破壊します。これから、すぐに」

「……よく言いました、鴉さん」

という鴉子の囁き声を、ハルユキは現実世界に復帰した直後に耳のすぐそばで聞いた。何かを答えるより早く、首から直結ケーブルが引き抜かれる。ハルユキも慌てて手を伸ばすと、ベッドで腰を屈じている輪の首からケーブルを抜いた。それをデイバツタにしまった直後、ベッドを囲む白いカーテンがさっと引き開けられた。

「ごめんごめん、遅くなって。ちよっとバイタルデータ見せてもらうね」

そう言つて空中に指を走らせる、ぱりっとした白衣姿の女性は看護教諭の船田三都だ。輪のニューロリンカーから、アドホック接続で体温、心拍等のモニタデータを引き出し、軽く眉を寄せる。

「ちよっと熱があるけど、それ以外は正常値だね。お祭りでのばせちゃったかな？ 少し休んで、様子見ようか」

その診断に、ハルユキは小さく息をつく。輪が割れた理由は風邪でも食べ過ぎでもないことは最早明らかなので、ここで救急車で搬送などということになったら事態がますます複雑化してしまふ。

いま補水液持つてくるからな、と言って堀田教諭が保健室の隣の冷蔵庫に向かったタイミン
グで、黒子がハルユキに囁き掛けた。

「黒さんとみんなにはわたしから説明しておくから、あなたはもう少くも輪についててあげて。
行動方針が決まったらすぐにメールします」

「はい……よろしくお願いします」

扉を下げると、ハルユキはカーテンの向こうで心配そうな顔をしているタカムにも軽く頷き
かけた。黒子は、一瞬だけ輪の手を強く握るとさっと立ち上がり、タカムを促して出口へと歩
いていった。入れ替わりに戻ってきた堀田教諭も、ハルユキに経口補水液のボトルを渡し、な
ぜか軽く微笑んでから少し離れたデスクに移動した。

ハルユキは、まず輪に手を貸して上体を起こさせてからボトルのキャップを緩めた。内蔵さ
れたストローが自動的に飛び出すので、輪の口許に持っていく。

控えめに冷やされた液体を少しずつ飲んだ輪は、軽く吐息を溜らすとハルユキを見た。

今ならまだ、輪は奇態ステージで繰り広げられた戦いと、交わされた言葉を記憶している。

アッシュ・ローラーが――兄である目下部輪太が何を語り、ハルユキが何を決意したのかを、
改めて説明する必要はない。

だからハルユキは、輪の灰色がかった瞳をじっと見詰め、煙く囁きかけるにとどめた。

「大丈夫。今度は僕が、君を助ける」

すると、繪はかすかに情き、ゆっくりと眼をつぶった。睫毛に小さな水滴が溜り、きらきらと揺れた。

「……………ごめん、なさい……………私……………」

謝罪の理由は、ISSキットを寄生させられてしまったことと、それを隠して今日の文化祭にやってきたことだろう。ハルユキは身を乗り出し、小刻みに何度しかぶりを振った。

「日下部さんが謝る必要なんかないよ。ほんとには、僕が……………僕がうつかりしてたせいで……………」だがその先はすでにステージで口になっているので、ぐっと吞み込んで続ける。

「……………あれの大本を、必ず消してくるから。そしたらまた、一緒に文化祭の続きを戦よう」

繪はしばらく俯いたままだったが、やがて顔を上げ、辛そうではあるが確かな笑みを浮かべた。こくりと頷きながら発せられた声は、切ないほどの清らかさでハルユキの脳に響いた。

「……………はい」

強く頷き返し、補水液のボトルを備え付けの小テーブルに置くと、ハルユキは繪をもう一度横たわらせた。タオルケットを肩まで掛けてやってから、立ち上がってベッドを離れる。

白いカーテンを開け、デスクでキーボードを叩いている堀田教諭の所まで移動すると声を掛ける。

「先生、ちょっと用事を済ませてすぐ戻ってきますので、日下部さんのこと、宜しくお願いします」

ホロウインドウから顔を上げた養護教諭は、もう一度にこつと微笑むと言った。

「了解。……それで、彼女のことは、副生徒会長には内緒にしておいたほうがいいのか？」

「ふくつ……………」

ざしつと背中を強張らせつつ、ハルユキはようやく霧田教諭の意味深スマイルの理由を語る。先々週の木曜日、体育の授業中に頑張るすぎてぶっ倒れたハルユキは保健室に運び込まれ、その時になぜか副生徒会長こと黒雪姫が付き添ったことを堀田教諭はぼつちり知っている——どころか、黒雪姫がアップ上げた保健委員の代行証明にサインまでしてくれているのだ。

なかな内緒でお願いします、と言いきりになるのを堪え、ハルユキは答えた。

「いいえ、問題ありません」

すると養護教諭はもう一度微笑み、言った。

「よろしい。では、行ってらっしゃい」

廊下に出た途端、視界にテキストメール着信アイコンが点灯した。押すと、差出人は様子ではなく黒雪姫で、思わず左右を見回してしまいがちろんな当人の姿はない。開いたメールには、【生徒会室で待つ】という一文があるのみで、全レギオンメンバーにニコとバドさんを加えた八名の話し合いがどうなったのかは書かれていない。

正直、今すぐSMSキット本体の破壊に挑むというハルユキの決心に、皆がすぐさま賛同し

てくれるとは思っていなかった。何と言っても、本体が隠されている無制限中立フィールドの東京ミッドタウン・タワーには、神獣級エネミー・大天使メタトロンという恐るべき守護者が存在するのだ。攻略作戦は、今後開催される七王会議で慎重に議論されるはずと聞いている。(四神)を除けば加進計算最強の存在に、十人にも満たない人数で挑むというのは困難を逼り越して無謀と言うしかない。

以前のハルユキなら、反対された場合はたった一人でもメタトロンに挑む、などと思いつめたであろう。しかし今、そんな思考は微塵も浮かばなかった。ハルユキが自暴自棄な特攻で無限E.Kに陥つても、結局アツシユも決して喜ばない。死ぬためではなく、これは救うための戦いなのだ。體と同化し、死に場所を求めて走ったあの時とは違ふ。

——だから、もし反対されたら、言葉と気持ちの全てを尽くして頼もう。無謀な作戦かもしれないが、決して不可能だと思っているわけではないのだと、皆に解って貰えるまで。

そう決意しながら、ハルユキは駆向う中央廊下を小走りで通り抜け、第一校舎に入った。

一階の西端にある生徒会室の扉はロックされていたが、近づくと自動的に解錠された。大きく息を吸い、スライドドアを引き開ける。

足を踏み入れ、後ろ手にドアを閉めた途端――。

「おせーぞ、タロウー」

ソファセットの上座にふんぞり返って脚を組むニコが、威勢良く喚いた。

他の七人——黒雪姫、楓子、誠、あきら、タタム、チユリ、バドさんもソファから振り向き、あるいは顔を上げ、揃ってハルユキを見た。

直前まであんなに決意を固めていたはずが、いざ仲間たちを見ると最初の言葉が出てこなかった。ドアの傍で立ち尽くし、ただ両手をぎゅっと握り締めていると——。

ニコの正面に座る黒雪姫が立ち上がり、優しく、そして力強く微笑みながら言った。

「何を突っ立っているんだハルユキ君。時間がないんだろう？ 早くそこに座れ、我々の準備はもう完了している」

剣の主の声を聞いた瞬間、風の中に溜め込んでいた言葉の全ては散り散りになって消し飛び、ハルユキはただひと言叫ぶことしかできなかった。

「——はい!!」

現実時間で十分間。加速世界では七日間。

それが、黒雪姫の指定した（強制切斷セーフティ）の発動時間——すなわち作戦に費やせる時間の上限だった。理由は、八人もが安全にダイブできる唯一の場所である生徒会室を、十二時十五分から三十分までしか独占使用できなかったから、らしい。最初の五分を現実世界でのブリーフィングにあて、次の十分が実際の作戦時間というわけだ。

「すまないな、ハルユキ君。何せ文化祭の真っ最中で、生徒会役員が昼食に出ている間しか、

この部屋が空かなかったんだ」

そう重罪する黒首姫に、ハルユキは慌ててソファから腰を浮かせて両手を振り動かした。

「いえ、七日もあれば充分過ぎます。僕と四葉宮さんの帝城脱出作戦の時なんか、目標タイムがたった二時間だったんですから」

「そーそー！ あの時さえ持ちこたびれてバターになりそうだったんだから、七日もあつたらチーズになつちやうよ」

ハルユキのすぐ右隣でチユリが明るい声を出すと、更にその奥からタタムが生真面目に指摘する。

「チーちゃん、バターを寝かせてもチーズにはならないよ。そもそもバターになるのは、待ちくたびれる時じゃなくて高速回転してる時じゃないかな」

「そんじや今度、レディオの奴をブン回してみつか。バターになっても食うのは全力で拒否すつけどな」

頭の後ろで両手を組んだニコが心底嫌そうに言うと、一同からほがらかな笑い声が湧き上がった。

それが収まったところで、ハルユキの正面に座る楓子が表情を改め、言った。

「時間的余裕は充分だとわたしも思いますが、今回の作戦を実行するにあたって、ひとつ大きな問題があります。ISSキット本体は無制限中立フィールドの東京ミッドタウン・タワー

に存在すると推測されるため、わたしたちも当然（へ上）にダイブしなければならないのですが……」

「あで……」

そこまで聞いた時、ハルユキは思わず声を上げていた。即時のミッドタウン・タワー攻陥を提案するなら、真っ先に考えておかねばならなかったのだ。この場の八人の中であつた一人、レベル的にも、そしてもう一つの理由でも、無制限フィールドへのダイブが不可能なバーストランカーがいることを。

ハルユキは、極子の隣に座る水見あきら——レベル1であり、また音城で（無制限）状態に置かれているアタア・カレントに——瞬向けた視線を、すぐに卓上へと落とした。

「す……すみませんカレンさん……。僕、ISSキットのことで、頭がいっぱいになっちゃってます……」

「謝る必要はないの」

穏やかにそう言う、あきらは沈黙する一同を順に見ながら続けた。

「私のことは気にせず、今は果たすべきことを果たして。重要な作戦に協力できないのは残念だけれど……ここに『一生懸命、皆の勝利を祈ることくらいはできるから』

「……カレン……」

黒雪姫が眩き、唇を噛んだ。

「重い尊殺を破ったのは、意外にも、あきららの右に座るバドさんだった。発せられた言葉もまた、ハルユキには予想外のものだった。」

「その選択はアキラらしくない」

「……………」

無言で隣に顔を向けるあきらを、バドさんはじつと見送した。直接の接点はないはずなのに、この二人がどこか似通った雰囲気を持っていることを、ハルユキは改めて意識した。

「本は流れ続けてこそ本。作戦はアキラに似合わない」

「……………」なら、どうしろと言うの、ミヤア？」

静かに問い返すあきらに、バドさんは普段通りの落ち着いた表情のまま、誰かが考えもしなかったであろう提案を作った。

「今すぐ《無限E.D.》から脱出して、そのままメタトロンの攻略に参加すればいい。七日もあれば、二つの作戦を連続して行うことは十分に可能。そしてこのメンバーなら、戦力的にも充分」「し、しかし……………」

と呟いてから口籠もったのは黒雪姫だ。だがそれも一瞬で、黒の王は毅然とした表情を浮かべると、ローテープルを挟んで正面に座るニコに問いかけた。

「……………」いいのか、赤の王？ レバードの提案は、我々にとっては正直願ってもないものだ。ネガ・ネビュラスの人員だけで救出作戦を行うよりも、遙かに成功率が上がるだろうからな。

だが、依然として困難なミッションであることに変わりはない。作戦に加われれば、セイリウウの猛攻で一度ならず死ぬか、レベルドレインの特殊攻撃（特殊攻撃）を受けるか……最悪の場合カレン同様の惨状Eに陥（おと）ってしまうほどのリスクを、プロミの幹部ブラッド・レバードと重賞たるスカ―レット・レイン自身が負うことになるが……」

黒雪姫が口を閉じて、ニコはソファにもたれて脚を組みだ嬉好のまま、しばらく何も言わなかった。だが数秒後、頭の前側で結わえた髪を一振りして頷く。

「ま、今回ばかりはあたしにもノーとは言えぬーよ。何せ、バドが今日までレベルアップを封印してきたのは、まさにこのためだからな」

「えっ、そ……それって、どういう……」

ハルユキは、驚き（おどろ）のあまり声を上げた。

かなりの古参であるはずのバドさんがレベル6——ハルユキやタタム、チェリの一つ上ではないことは、確かにずっと不思議に思ってきた。以前ニコにその理由を訊いた時は、はぐらかされはしたものの、長年のライバルたるスカイ・レイカーと関係があるような口ぶりだったと記憶（おぼえ）している。

それが実はレイカーではなくアタ・カレントにまつわる理由だったのだとすれば、バドさんとカレンは、ライバル以上の密な関係だということになるのだから——。

「あ……まさか……でも、ううん、そっか……そうだったんだ……」

「唖然としていると、隣でチユリがひとり納得したような声を出すので、ハルユキはたまらず小聲で問い質した。」

「お、おい、何が（そっか）なんだよ？」

「なーいしょ。きつと作戦が終われば解るわよ」

澄まし顔の幼馴染にそう言われてしまえば、食い下がっても無駄だということとは経験的に学習している。やむなく引き下がったハルユキに代わり、再び黒雪姫が発言した。

「ダイブ開始まで残り一分三十秒、そろそろ行動指針を決定せねばならないな。——レイン、そしてレバード。アタア・カレント救出作戦への協力の申し出、有りがたく受けさせて貰うよ。カレンも……それで、いいな？」

レギオンマスターに問われたあきららは、尚も迷うように俯いていたが、すぐに顔を上げると真剣な表情で頷いた。

「むしろ、私からお願ひするべき事柄なの。二年と半年のあいだ、閉じた環の中を走り続けていたけれど……私にも、もういちど彼方を目指して流れ始める時が来たことを、いま、とても鮮しく感じている。……みんなの力、私に、貸してください」

あきららが深く顔を下げると、楓子の左でこれまで沈黙を守っていた陽が、空中で素早く指を動かした。

「U・V レンねえ、絶対絶死、大丈夫なのです。何もかも、うまくいくのです。私たちに

は、幸せを運んでくる鳥さんがついてますから！」

……ははあ、ホウのことだな。

とハルユキが納得していると、國のチユリが勢いよく言った。

「じゃあ、作戦が始まる前に、ハルのアバターを書く塗らないとね！」

「え……ええ!? オレ!?」

「飛んでる時のカモフラージュ効果を増す効果がありそうだね」

タタムのおくまで生真面目なコメントに、ハルユキを除く全員が再び笑顔になった。

いったん通常対戦を行ってアクア・カレント救出作戦の詳細を打ち合わせてから、予定どおりの午後十二時二十分に、一同は〈アンリミテッド・バースト〉コマンドを叫んだ。

四目ぶりの無制限中立フィールドは、懐かしい〈世紀末〉ステージだった。梅郷中のグラウンドは縦横にひび割れ、錆びたドラム缶からはちらちらと炎が上がっている。その明かりを音にして横一列に並ぶ色とりどりのデューエルアバターたちを、ハルユキは順に見詰めた。

黒の王、〈絶対切腹〉ブラック・ロータス。

ネガ・ネビュラス副長にして風の〈四元流〉、〈鉄腕〉スカイ・レイカー。

火の〈四元流〉、〈焔火の巫女〉アーダー・メイデン。

ネガ・ネビュラス所屬、〈時計の魔女〉タイム・ベル。

同じくネガ・ネビュラス所属、シアン・バイル。

赤の王、(不勲要塞) スカーレット・レイン。

プロミネンス副長にして(三獣士)の一人、(血まみれ仔猫)ブラッド・レバード。

当然ではあるが、水の(四元素)、アタア・カレントの姿はこの場にはない。昔から少し遅れて、こちら側で三時間後にダイブする手はずになっている。彼女の(唯一の)という二つ名も、今日を限りに消滅するだろう。無制限フィールドに再びダイブするために、蓄積していたバーストポイントを消費してレベルを4まで上昇させたからだ。

ハルユキは、改めてアッシュ・ローラーと目下部隊を助けるための作戦に賛同してくれた仲間たちに礼を言うべく、背筋を伸ばしてから七人に向けて深々と頭を下げた。

「……本当に、ありがとうございます。文化祭の真つ最中なのに……何も言わずに協力してくれて……。——時にレインとバドさんは、アッシュさんとは直接の利害関係があるわけじゃないのに……」

「ちよーっと待った。その前に、もっかい確認しときたいんだけどよ……」

頭から伸びる二本のアンテナバースをびこびこ動かしながら、ニコが口を挟んだ。

「本っ当に、弱気オーラ溢れまくりのあの女が、グレウオのアッシュ・ローラーのリアルなのかよ？」

「う、うん。ちよっと複雑な事情があって、加速世界だと別人格になるって言うか……」

「そりや対戦中は人格変わる奴もいるけどさ、僕らなんでも変わりすぎたる！」

ハルユキが、その感想は「もっともなれど」と輪と輪太の事情をどこまで打ち明けていいのか……と悩んでいると、ニコの傍らに控えるバドさんが言った。

「でも彼女、古いバイクの車種を良く知ってた」

「そーいや、クロウんとこのクラス表示で名前の当てっこしてたな。ダチになれそうか？」
主に問われたのは、躊躇いなく頷いた。

「Y。もうなった」

「そんなら、あたしらも利害関係アリだ。……っつーわけでクロウ、作戦が始まったらあたしとバドに妙な遠慮すんなよー」

「レイン……バドさん……」

ハルユキは胸がいつぱいになり、ただ名前を呼ぶことしかできなかったが、音もなく前進してきた車椅子から親子が立ち上がり、深く一礼した。

「わたしからもお礼を言います。ありがとうございます、深く一礼した」

どうやらニコたちは、輪がアクション・ローターのリアルだということだけでなく、その《真》がスカイ・レイカーであることまでも既に知っているようだった。こくりと頷き返したバドさんが、珍しく長めの言葉を発した。

「NP。私にとっても《親子》の絆は、マスターや、あるいはライバルとの絆と同様に大切な

ものだから」

それを聞いたハルユキは、ふと考えた。バドさんの言うマスターとはもちろんニコのことで、ライバルはかつて対戦でしのぎを削ったというレイカーを指しているのだろうか。では、（視）はといったい誰なのだろうか。

しかしその時、レイカーがもう一度素のレギオンの二人に頭を下げ、次いで体ごとハルユキに向き直った。

「（視）さん。あなたにも、お礼を言わねばなりませんね。……あの子たちのために、戦いを決意してくれて、本当にありがとう」

「い……いえー 輪さんも、アツシユさんも、僕の大切な友達ですから……」

何度しかぶりを振ってから、大きく息を吸い、付け加える。

「……その言葉は、メタトロンを倒して、ミッドタウン・タワーに突入して、ISSキット本体を壊し終わった時まで取っておいてくださいー」

「ン、よく言ったぞ、クロウー」

（視）とした声は、もちろん黒書姫のものだ。同じくハルユキの横まで進み出ると、右手の剣で空気を鋭く切り払う。

「この作戦は、突発的ゆえに事前準備も攻撃要員も少々不足していることは（否）めない。しかし、だからこそ見いだせる懸念もあるはずだ。なぜなら、（四眼）が加速研究会の一員であると

いう聲が限りなく濃くなった以上、今後行われる七王会議の情報も奴らに漏れると考えるべきだが……さしもの研究会も、このタイミングで我々がミッドタウン・タワー攻略に挑むとは予想できない。つまり……」

そこで一度言葉を切ると、剣の先端を南東の空に向け――。

「敵はメタトロン一体のみ。あの神獣級エネミーさえ排除できれば、ISSキット本体にも刃は届こう！」

びゅっ――と音を立てて剣を振り下ろしてから、黒雪姫は体を少し回転させ、今度は左手の剣で真直を指し示した。

「――作戦を遂行するにあたっては、(四元基)アタア・カレントの力と才知が大きな助けとなるだろう。ゆえに我々はまず、カレンを四神セイリユウの巣から取り戻す。メタトロン以上の強敵なれど倒す必要はない。このメンバーが力を合わせれば、二次被害を出すことなく救出可能だと私は確信している。……大規模な作戦に連続して挑むことになるが、研究会の陰謀を叩き潰し、加速世界を救む機軸を断ち切るために……皆の奮戦を期待する!!」

黒雪姫の決然たる言葉に、ハルユキたちネガ・ネビュラスメンバーは一斉に、プロミネンスの二人はほんの少し遅れて右手を突き上げ、おう！ と叫んだ。

手を下ろしたハルユキが、闘志を燃やしつつ列に戻ると、隣にすすすと近づいてきたニコが背伸びをして囁いた。

「あのさー、あんたのトコ、作戦の前って毎日こんな感じなのかよ？」

「へ？ ……う、うん、だいたいこんな感じだけだ……」

「そ、そうか……いや、なんでもねえ……」

ううむと胸組みをするニコを見て、ひとしきり首を捻（ひね）ってから、ふと思いついてハルユキは訊（き）ねた。

「そういえば、世紀末ステージって電車は動いてるんですっけ？」

「N。ほとんどの線路が壊（こわ）れてる」

とニコの後ろから答えたのはバドさんだ。視座で「なぜ？」と問うてくるので、ヘルメットの側面（わきめん）を掻き掻き説明する。

「いえ、帝城の東門がある丸の内までけっ……さう遠いから、どうやって移動したもんかなって……歩いていくと時間がかかりますし……」

それを聞いた途端（とたん）、目の前のニコのアイレンズがきらーんと光った。嫌な予感（よかん）と思つた時にはもう真紅の小型アバターが両手で抱きついてくる。

「おにーいちゃんっ！ 今回こそ、あたしだけをダッコして飛んでくれるよねっ！ だってスベシャルゲストだもんねっ！」

「い、いや、それは、ええと」

「おいコラ赤いのー さっき特別扱いするなとか言ってただろうがー」

いきなり真後ろで黒雷姫の怖い声が響けば、ハルユキはフリーズするしかない。

「だいたい、ただでさえ人員が少ないのに、お前とクロウだけ先に飛んでいつてどうする！」

「しょーがないなあ、なら今度も、お兄ちゃんに全員選んでもらうしかないねっ！」

「え、えええ？ い、いやいやムリムリ、七人はさすがに無理！」

「あはは、じょーだんじょーだん！」

そこで天使モードを終了させたニコは、ハルユキを解放してびゅんと後ろに跳んだ。頭を一回りして、トーンの激変した声で言う。

「大サービスタ、あたしが丸の内までタクシーしてやるよ。ちょっと下がってな」

「え？ は、はい……」

タクシーと言っても、ニコ本体はこの場で最小サイズなので、せいぜいメイドン一人くらいしか運べそうにない。いっぽう強化外装を全展開しても、《不動要塞》の二つ名のとおり、サイズは激増するが機動力はほぼ消滅してしまはずだ。

ハルユキ以下黒のレギオンの六人は揃って首を傾げたが、バドさんが平然と距離を取るのそれに従った。ガラウンドの真ん中に一人残されたニコは、さっと右手を掲げるや叫んだ。

「着陸、《インピンシブル》!!」

途端、小さな体を赤い光の柱が包む。ごこん！ と重々しく空気が震え、周囲の空間に巨大なオブジェクトが実体化していく。

ミサイルポッド、機銃ブロック、左右の主砲、後部のスラスタ―つき装甲板、そして巨大な四脚の中央の空間にニコ本体が浮き上がった直後、ひときわ激しい轟音とともに全武装が合体した。赤の王の名に相応しい威容は何度見ても圧倒されるが、ほぼ固定砲台と化したこの姿の、どこをどう見てもタクシーとは程遠い。

だが――。

武装コンテナ群の中央に包まれ、アイレンズだけを輝かせるニコは、更なるボイスコマンドを高らかに叫んだ。

「チェンジ、〈ドレンッドノート〉!!」

再び、大地を揺るがすようなと重低音が鳴り響く。

四方に張り出していた脚部ブロックが回転し、二本ずつ前後に伸びる形で接合する。前面が斜めになった機銃ブロックが前にスライドし、ミサイルポッドがその後ろに格納される。最後部には、スラスタ―つきの装甲ブロックが収まる。

左右の主砲が両サイドに密着し、最後に脚部ブロックの下からこつたいタイヤが合計十二個も出現した。ハルユキの眼前に存在するのはや《固定砲台》ではなく、全長十メートルを軽く超えるであろう《大型武装トレーラー》だった。

呆然と眼を離りながら、ハルユキはそうか、と思っていた。

これこそが、昨日の夜ニコが言った《新しい力》なのだ。火力をある程度維持したまま機動

力をも手に入れた、不動要塞ならぬ（機動要塞）。

立ち戻くす黒の六人に向けて、バドさんが戦指を立てた右手をくいと動かした。次いで音もなく跳躍し、高さ三メートル近いトレーラーの上に飛び乗る。

ハルユキたちもしばし顔を見合わせてから領き、次々にジャンプした。最後に、レイカーの座る車椅子をハルユキが翼を使って持ち上げ、平らな装甲板に着地する。副機は下から見るとよりもずつと広く、七人が乗ってもまだまだ余裕がある。

「……これもやつぱり、タクシーじゃないと思うのです」

機がぼそつと囁くと、全員うんうんと頷いた。そんな突っ込みなど意に介さぬ様子で、トレーラー前部に収まったニコが威勢良く叫んだ。

「でかエネミーとかヨソのバーストリンカーに出くわさねーように、環七越えたら抜け道ぶっ飛ばすからな！　しっかり踏ん張ってるよ！」

「あ、あの、ニコ、座席とか、シートベルトとか、せめて手すりとかは……」

「スルいこと言ってるなよ、タクシーじゃあるまいしー　よおっし、そんじや、浴槽目指して……しゅっ！　ばああ——っ！！」

どこかにあるのであろうエンジンが吼え、巨大トレーラーは十二個のタイヤを全てから土煙を巻き起こしながら猛然と発車した。あつという間に梅郷中のグラウンドを斜めに横切り、元は文化祭グートだったのであろう鉄骨の門を粉砕しつつ道路に出る。

ほんの少し北上すると、恐怖の十二輪ドリフトを決めながら右折。広い青梅街道に飛び出さず、アスファルト舗装を粉砕する勢いで東へと爆走し始める。

前傾姿勢で加速に耐えながら、ハルユキは顔を上げ、正面の夜空を縦視した。

遠く離れた杉並からでは目視できないが、あの空の下に、超級エネミーに守護される古城と、SSキット本体を呑み込む東京ミッドタウン・タワーがある。

——カレンさん。あの時助けてもらったご恩を、今日こそお返しします。

——そしてアツシユさん、日下部さん。もう少しだけ頑張つて。

——僕たちが、終わらせるから。輪さんを苦しめるものを、潰してくるから。

「……………必ず！」

低く叫び、ハルユキは強く右拳を握った。

前腕の装甲からはほんの少しだけ夜、（光學誘導）アビリティ習得の証である導光クリスタルが、麗な夜光を集めてきらりと輝いた。



あとがき

「アタセル・ワールド13 水際の号火」をお読み下さりありがとうございました。

サブタイトルの読みは「みざわのこうか」で、ざりざりの境界線で上がるのろし、というように意味をつけてみました。つまり、ようやく反撃ののろしが上がったところで次巻に引いてしまっております……。

（冥神の鎧）編が6・9巻の四冊になったので、（メタトロン攻略）編はせめて三冊でと懸っていたのですが、結局同じ四冊になってしまいました。五冊にはしないつもり……いえ絶対しません！ 胸に輝くISSキットにかけてお約束します！

そんなわけで、問題はあんまり解決しない（どころか増える）今巻ですが、10巻収録の短編「遠い日の水漬」で登場した（四元素）のひとりアタア・カレントがレギオンに復讐できたので、久々の戦力増強に私もホッとしています。キャラづけ要素のひとつだった（レベル1）を、展開上やむを得ないといえアツサリ感としてしまったのが残念といえ残念ですが（笑）、彼女がなぜ長いあいだレベル1のまま用心棒を続けていたのかとか、そのへんの動機も次巻で語れればと思っています。

そしてこの巻ではもう一つ、かなり以前から目付だけは予告されていた権限中の文化祭をよ

うやく書くことができました。文化祭のシーンは、私があまりやらない（出来事）を小刻みに次次描写する」というスタイルで書いてみたんですが、ちよつと不安だったので担当さんに「こういう書き方どうツスカねえ……」とお伺いを立ててみたところ、「ライトノベルではむしろ普通ツス」というお返事に「なるほどツス！」と思いました。A.W.のヒロインたちがほぼ全員集合（なぜか黒書生先輩だけいませんが……）しているので、楽しんで頂けたなら嬉しいです。

また中盤の領土戦シーンでは、ライバルチームのメンバーとして、デュエルアバター募集企画にご応募頂いたアバターが登場しております。フレイザー・ハート」をデザインして下さいったウダさん、ヘーチャー・ブリーズン」のユーノさん、ヘーチャー・パソル」の裏表山猫さん、ありがとうございましたー 登場させるに当たって、アバター名や能力を微調整させて頂きました。ご了承ください。

13巻が刊行される時には二〇一三年も一ヶ月以上が経過していて、色々落ち着いている頃合いでしょうか。このあとがきを書いているのは二〇一二年十二月なので、キーボードを叩きながら、兼助の一年間をあれこれ思い返しています。

アタセル・ワールドのテレビアニメは四月に放送開始し、終了したのは九月でしたが、色々な準備や会議、付随する小規模な原稿の執筆なども入れると、二年近くもアニメ版に関わらせ

て頂きました。大変は大変でしたが、得るものも沢山ありました。それらを活かして、今後より面白いお話を目指して書き続けていこうと思っております。二〇一三年も、ハルユキや黒雪姫たちに変わらぬご応援の程、どうぞよろしくお願いいたします！

二〇一二年十二月

川原 雅

遊びではない!

天才プログラマー・茅場晶彦

チャル・ワールド・スペクタクル《アリシゼーション》編、第四幕!!

キリト&ユー gio VS 《整合騎士》!
「SAO」の集大成「アリシゼーション」編、第四幕!

超人ウェブサイトながらも、
閲覧数650万PVオーバーを記録した伝説の小説!

・オンライン

イラスト/ufuue

電撃コミックス ソードアート・オンライン アインクラッド ①②巻(作画 中村静子)

電撃コミックス ソードアート・オンライン フェアリー・ダンス ①巻(作画 渡辺 純)

電撃コミックスEX ソードアート・オンライン おんらいん。 ①巻(作画 南十字星)

原作 茅場 晶彦 キャラクターデザイン 中村静子

発売中!!

ソードアート・オンライン フェアリー・ダンス と ソードアート・オンライン おんらいん。 は、
「電撃文庫 MAGAZINE」(偶数月10日)にて連載中!

●川原 礫著作リスト

- 「アタセルワールド1―悪魔姫の帰還―」 (電撃文庫)
- 「アタセルワールド2―紅の悪魔姫―」 (同)
- 「アタセルワールド3―夕陽の戦姫―」 (同)
- 「アタセルワールド4―虚空への飛躍―」 (同)
- 「アタセルワールド5―異形の浮城―」 (同)
- 「アタセルワールド6―炎火の神子―」 (同)

「アタセル・ワールド7―決闘の巻―」 (四)

「アタセル・ワールド8―運命の流星―」 (四)

「アタセル・ワールド9―七千年の誓い―」 (四)

「アタセル・ワールド10―Secret―」 (四)

「アタセル・ワールド11―秘密の巻―」 (四)

「アタセル・ワールド12―巻の最後―」 (四)

「ソードアート・オンライン1―アインタラッド―」 (四)

「ソードアート・オンライン2―アインタラッド―」 (四)

「ソードアート・オンライン3―フェアリイダンス―」 (四)

「ソードアート・オンライン4―フェアリイダンス―」 (四)

「ソードアート・オンライン5―ファンタジーパレード―」 (四)

「ソードアート・オンライン6―ファンタジーパレード―」 (四)

「ソードアート・オンライン7―マザーズ・ロザリオ―」 (四)

「ソードアート・オンライン8―アーク―サクリファイス―」 (四)

「ソードアート・オンライン9―アリスゼーション・オブ・シンダ―」 (四)

「ソードアート・オンライン10―アリスゼーション・オブ・シンダ―」 (四)

「ソードアート・オンライン11―アリスゼーション・オブ・シンダ―」 (四)

「ソードアート・オンライン プログレッシブ」 (四)

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。



あて先

〒102-8584 東京都千代田区富士見 1-8-19

アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部

「川原 礪先生」係

「EDMA 先生」係



電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで“小さな巨人”としての地位を築いてきた。古今東西の名著を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の思い出として、語りついできたのである。

その道を、文化的にはドイツのレタラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、(Changing Times, Changing Publishing) 時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日
角川歴彦



電撃文庫

アクセル・ワールド1―黒雪姫の帰還―

川原 礒

イラスト／HIMA

ISBN978-4-04-907317-8

〈黒雪姫〉と呼ばれる少女との出会いが、デブでいじめられていた子の未来を変える。ウェブ上でカリスマティックな世界を語る作家が、ついに衝撃大賞（大賞）受賞――

か16-1 1718

アクセル・ワールド2―紅の襲撃姫―

川原 礒

イラスト／HIMA

ISBN978-4-04-908070-7

デブでいじめられていた子の少年・ハルユキの人生は、黒雪姫との出会いによって一変した。そんな彼のやどに、「おれもそんな時が来るぞ知らずの少女が現れては

か16-3 1775

アクセル・ワールド3―夕闇の路奪者―

川原 礒

イラスト／HIMA

ISBN978-4-04-908070-7

「ゲームオーバーです、おれは死んだ……いえ、シルバークロウ」黒雪姫不在の中、スライムカーストの頂点に立った新人学生、圧倒的な力の持ち主、ハルユキは例の……

か16-5 1834

アクセル・ワールド4―蒼空への飛翔―

川原 礒

イラスト／HIMA

ISBN978-4-04-908327-2

「……おれ、もう一度強い登ってみせる。僕はもう、下を降りて歩くのはやめたんだ」翼をもちたシルバークロウ・ハルユキが、ついに復活する――

か16-7 1899

アクセル・ワールド5―星影の浮き橋―

川原 礒

イラスト／HIMA

ISBN978-4-04-908327-2

とある日、ハルユキは新たなゲーム・ステータス出現の気配を感じる。（中略）ステージ、そこに降り着いたハルユキは、歴史的なゲームイベントを体験する――

か16-9 1963

アクセル・ワールド6 ―浄火の神子―

川原礫

イラスト／HIMA

ISBN978-4-04-066000-6

《炎城の篇》に接されていたハルユキは、異世界以外の存在から、《浄火》の命を下される。その命を継ぐアバターは、意外な場所に関与を待っていて……

か-16-11 2018

アクセル・ワールド7 ―災禍の鐘―

川原礫

イラスト／HIMA

ISBN978-4-04-066001-3

《炎城》に閉じ込められた《シルバー・クロウ》、果た本可成と見られるそして、ハルユキは不思議な変化を見る。それは、《災禍》にまつわる二人の物語……

か-16-12 2018

アクセル・ワールド8 ―運命の連星―

川原礫

イラスト／HIMA

ISBN978-4-04-066002-0

星まわしき強化外装（「星のキット」）に神まれ、異世界同士で戦うことになったタケムとハルユキ。人の心算が強く共鳴し合い、運命する……その運命は……

か-16-13 2135

アクセル・ワールド9 ―七千年の祈り―

川原礫

イラスト／HIMA

ISBN978-4-04-066003-7

再び《タコム・ディザスター」となったハルユキ。滅ぼすべき敵を求めて《加速世界》を侵略する。そして、その侵略に《炎城》のアバターの姿がまろよはかり……

か-16-17 2202

アクセル・ワールド10 ―Elements―

川原礫

イラスト／HIMA

ISBN978-4-04-066004-4

ハルユキが新入生の試験に巻き込まれていたころ、異世界は戦争終結後の沖波で、不思議なアバターから対応を仕向けられていた……。果たどうなるのか……

か-16-18 2239

アクセル・ワールド1 ―超硬の狼―

川原 礫
イラスト／HIMA

ISBN978-4-04-867935-0

打倒最強の存在で沸きあがった結果とは、
シルバークロウの新アビリティ「超硬鋼
鋼」の発覚だった。最強の兵器（レベル）
アバターも登場。いったいどうなるのか

か-16-20 2367

アクセル・ワールド12 ―赤の紋章―

川原 礫
イラスト／HIMA

ISBN978-4-04-867936-7

神楽坂エースと、大天使メカトロンの戦闘ア
ビリティの習得とマッシュンに落ちハルユ
キ。さらに立ちふさがる強敵アバター・サ
ベラスとの戦いは意外な結果を招く――

か-16-22 2376

アクセル・ワールド13 ―水際の号火―

川原 礫
イラスト／HIMA

ISBN978-4-04-867937-4

メカトロンの役割を担うハルユキたちの
戦いの舞台は、リアルワールド／機界中文化
空間へ――加速世界に混沌を注ぐ人とする
「メカトロ・システム」の機界が迫り……

か-16-23 2487

ソードアート・オンライン―アインツラッド

川原 礫
イラスト／drossel

ISBN978-4-04-867938-1

クリアするまで脱出不可、ゲームオー
バーは「死」を意味する。この仮想空間は、
ゲームであっても遊びではない。第15回
電撃大賞（大賞）受賞者が書く大作――

か-16-2 1748

ソードアート・オンライン―アインツラッド

川原 礫
イラスト／drossel

ISBN978-4-04-867935-0

アインツラッドでは珍しい「ビーストア
イマー」の少女・シリカが前線に臨んだ
とき、彼女を助けたのは、素顔も分から
ぬ謎の「真紅の剣」のキリトだった。

か-16-4 1814

ソードアート・オンライン 3 フェアリィ ダンス

三原 徹
イラスト／ 02000

ISBN 978-4-04-068193-3

謎のデスゲームを脱したアスナとクリア。現実世界に戻ってきたキリト。しかし、突然バーナーであり、永遠の誓いを果たしたらしいアスナはいまだ意識しておらず……

か166 1802

ソードアート・オンライン 4 フェアリィ ダンス

三原 徹
イラスト／ 02000

ISBN 978-4-04-068452-1

第30のヘムロの内で、アスナを救うためロラインしたキリトは、ついに希望郷。まだ未だに深く、しかし謎の秘密を、彼を共にしたアスナ・ローファと交錯してしま……

か165 1824

ソードアート・オンライン 5 ファントム バレット

三原 徹
イラスト／ 02000

ISBN 978-4-04-068763-8

（8A）の事件から一年、次にキリトを持つと見せるのは、彼と蘭のVRMMOの（分）ンゲイル・オンライン。突然発生した謎の殺人事件を調査する…… 新東映入

か1610 1985

ソードアート・オンライン 6 ファントム バレット

三原 徹
イラスト／ 02000

ISBN 978-4-04-070132-7

（9B）のロラインしたキリトは、彼が実際にこのゲームで唯一（完結）を達成し、（9B）を乗り越え、そして彼が（9B）（完結）を乗り越え……

か1612 2048

ソードアート・オンライン 7 マザーズ ロザリオ

三原 徹
イラスト／ 02000

ISBN 978-4-04-070431-1

次世代向けVRMMO（アルヴァイム・オンライン）にてアスナが遭遇したとあるアバターとの大切な思い出とは…… マザーズ・ロザリオ（完結）

か1614 2107

アリス・リローデッド

ハロー、ミスターマグナム

西沢まづの

イラスト／渡部健

ISBN978-4-04-891332-7

わたしの名前はミスター・マグナム。見ての通り、拳銃だ……。第19回電撃小説大賞（金賞）受賞の、美少女がめりめりマッシュタ・ガンマクシミンが登場――

あ-37-1 2483

明日、ボクは死ぬ。キミは生き返る。

藤原る

イラスト／エズキ

ISBN978-4-04-891329-4

「君と二人が入れ替わる。ぼつらな僕と完璧な彼女」。交際日記の中でしか書きたることのできない二人の、入れ替わらなければならない青春ストーリー――第19回電撃小説大賞（金賞）受賞作――

ふ-10-1 2484

エーコと「トオル」と部活の時間。

藤田悠樹

イラスト／MACCO

ISBN978-4-04-891340-9

クラスから孤立した少女「エーコ」は、稀なる人体複製の「トオル」と知り合い……。シニカルな学園とステリィ。第19回電撃小説大賞（金賞）受賞作――

や-7-1 2485

塔京ソウルウィザーズ

栗原将太郎

イラスト／小嶋将史

（そのほか、エニックス） ISBN978-4-04-891331-7

第19回電撃小説大賞（銀賞）受賞の、美少女……。ここは「塔京」で、魔法という「魔法」を駆使する魔法師が美しい。魔法「塔京」は、この地で魔法と魔法「塔京」を駆使する。

あ-38-1 2486

FOURTHシリーズ
連射王（上）

川上隆

ISBN978-4-04-891412-3

何事にも本気になりきれない高校生の高村・悠は、一人のゲーマーに出会い、「この本質」と真実に向き合うことになる。異色の青春小説が待望の文庫化――

か-5-42 2432

青春リアット!!

藤川タカマル

イラスト／すみ高

ISBN978-4-06-870238-6

出てくる連中バカばった。破壊力抜群の、
一頁紙に決まる青春コメディ! 電撃
文庫では異色な? と評されるや、堂々
の第17巻登場小説大賞(金賞)受賞!

せ-3-1 2077

青春リアット!! ②

藤川タカマル

イラスト／すみ高

ISBN978-4-06-870553-9

青春少女、長瀬と勝手に結婚にされてし
まった宮本が、またまた大風を巻き起こす!
読者投票の異色すぎる青春コメディ、2
巻目も出るぞコソヤのローマ!

せ-3-2 2165

青春リアット!! ③

藤川タカマル

イラスト／すみ高

ISBN978-4-06-870882-1

黒本がナンパした女性は何んか記憶喪失、
月島の人の好きや、黒本のす心もあって、
彼女を保護するのだが、家の家事負担が
で貯金をとてになりや!

せ-3-3 2247

青春リアット!! ④

藤川タカマル

イラスト／すみ高

ISBN978-4-06-886799-7

夏休み! だが宮本たちは「海の家」で
臨時に給んでいた。ひと夏の甘酸っぱい
思い出とこころを、古い黒板文になりそう
な、読者方々投票のアバンチュール編!

せ-3-4 2389

青春リアット!! ⑤

藤川タカマル

イラスト／すみ高

ISBN978-4-06-891341-6

転校生サンキの学校統一の野望に巻き
込まれた宮本の運命は? 黒本を救める
はずの金コンが長瀬によりサバトと化す
一夜突如、今回は特別編でお届け!

せ-3-5 2499